

人(式子内親王、後京極攝政前大僧正慈圓、權大納言通光、權中納言通具、藤原俊成、俊成  
の女、宮内卿藤原有家、全定家、全家隆、具明親王、藤原雅經、寂蓮法師、藤原秀能、西行法師)  
に仰せて各自の佳作と思へる歌十首宛を奉らしめ給ひ院の御製をも十首添へさ  
せ給へるものなれば當期に於ける歌人が特色の一斑を窺知するを得べし。また  
世上に喧傳せる『百人一首』は藤原公任の『三十六歌仙』に倣ひて定家が障子の色紙に  
古今の名手百人の歌各一首宛を撰録したるものなり。其の他家集に後鳥羽、土御  
門、順德三上皇の御集、實朝將軍の『金槐集』、慈圓大僧正の『拾玉集』、西行法師の『山家集』、家  
隆の『壬生二品集』等最も其の名高し。歌學の書には定家の『詠歌大概』、『未來記』和  
歌庭訓、長明の『無名抄』等後世に傳はれり。さて此等の歌集と歌學の書とに就きて  
は猶ほ以下に至りて明了となるべきなり。

## 第二節 當期の重要な歌人

西行法師 藤原定家 全家隆 源實朝

花山院爲兼 二條爲世

歌謡の當時代を通じて盛行したる事上來叙陳せるが如くなれば名手の稱譽を博

したる歌人の多きことも此の世に過ぎたるはなし。されば其の重なるものゝみ  
を列擧せんにも猶ほ十數人に下らざるべし。後鳥羽、土御門、順德の三帝をはじめ  
奉つり西行法師、藤原隆信、全良經京極攝政、源通親、寂蓮法師、慈圓大僧正此の人慈鎮和  
鴨長明、源實朝、源通具、藤原有家、全定家、全家隆、全秀能、藤原雅經、式子内親王、宮内卿、俊  
成衣笠内大の女、稍、後れては藤原家良臣といふ、二條爲家定家の子、藤原基通、全行家、全光俊、阿佛尼  
二條爲氏、藤原爲教、冷泉爲相以上三人、二條爲世、全爲藤、全爲定、花山院爲兼等は就中  
最も有名なるものなりとす。即ち後鳥羽天皇の管に歌道に秀でたるのみならず  
當時の歌人を獎勵保護せる、西行法師の性來瀟灑にして天京の詞才に富める、又は  
定家家隆さては爲家の詞壇を左右せるなど其の他孰れも多少異なる伎倆を具へ  
て一世に立たざるはなし。されども元來特殊なる詩想に乏しき我が歌界は是等  
數多の歌人を列擧して概評を試みむも各自獨特の趣致感想を認むる能はざるな  
り。故に予輩は是等の中最も多く異采を具へて一世を風靡し併せて後世に至る  
まで多少其の影響を及ぼせるもの數人を撰出して是れが評論を試みむとす。す  
なはち爰に撰出する歌人の中前にしては西行法師、藤原定家、全家隆、源實朝、後にし



ては花山院爲兼及び二條爲世を擧げむとす。まづ西行法師に筆を起こして、順次爲兼及び爲世の上に及ぶべし。

西行法師は俗名は佐藤憲清一説には藤清といふといひ鎮守府將軍藤原秀卿が九世の孫左衛門の尉康清の子にして鳥羽天皇の御宇元永元年(一七七八)に生まれき。年稍長ずるに及びて崇徳天皇の朝鳥羽上皇に仕へて北面の武士となり左兵衛尉に任ぜられたり。憲清の祖先是累世武を以て著はれたりしが彼れもまた勇敢にして射を善くし輜略に通じ併せて歌道に造詣するところありしかば上皇深く其の奇才を愛したりき。されども彼れは性來榮利を喜ばずして平素遁世の志を懷抱したりきと見ゆ。嘗て其の族人左衛門尉憲康と共に鳥羽殿に朝して還り明日また相與にせんことを約して別れしが彼れ翌日期の如く憲康の家にとりしに哭聲の外に聞こゆるものありしかば怪みて其の故を問へば家人答へて憲康昨夜暴かに病死せりといふ。こゝに憲清惕然として出家の志ますく堅かりき。彼れ一日出遊して其の家に還りしに其の女の年甫めて四歳なるもの嬉笑して出で迎へ衣にまつぱりて戯むるゝさまいと可憐なりければ彼れも流石に其の意動きけるが既

にして以爲らく我が出離を害するもの之に過ぐるはなし愛着を脱離するは當にこゝに始むべしとて即ち其の女を蹴つて牀上より墜し其の夜遂に官祿妻子を棄て、嵯峨に往き僧となりぬ。憲清此の時年僅に二十三。頃は當に崇徳天皇の御宇保延六年なりとす。法名は圓位といひ後更に改めて西行と呼びぬ。因にいふ其の妻も後また尼となりて高野の天野に居りて志操堅固に行ひすましたりとぞ聞こえし。

西行常に云ひけらく、桑門に家なし須らく抖擻行脚に一生を終ふべしと。此の故に彼れは遁世の後嘗て一所に定住せず或は西海或は奥羽と歴遊して六十餘州殆ど其の足跡の印せざる地なし。即ち悠々自適興到れば杖を止めて吟咏に餘念なく興盡くれば身また去りて他所に彷徨するを常とせり。何時の頃にか伊勢に止まりて二見浦に虚を結び草を敷きて茵と爲し石を穿ちて研となし扉又は花篋を文臺に代へて年月を送りたることもありきとぞ。又或時遠江の國天龍川を渡らむとて武士の乗りたる船に上りけるに舟人乗客の多きを危みて法師おりよと云ひけれど聽かぬふりしてありけるに舟人怒りて彼れを鞭撻せしかば血流れて面



を被ふに至りしかども、毫も恨みたる色なく、從容として船より下りきといへり。其の外、彼れ鎌倉に遊びて將軍頼朝の爲に兵法の奥儀を談じけるに歸るに臨みて、白銀の猫を贈られしかば、受けて漸く門外に出で、小兒の嬉遊するを見て、投與して去りきといふ。是等の逸事は孰れも以て彼れが如何に堅忍不拔にして、榮達利欲を念頭に掛けざりしかを想見するに足る。而してまた彼れが如何ばかり、輜略に通ぜしかは、彼れが頼朝の爲に談せしところ、流傳して、竟に後世兵家の秘傳となりたるよし、『吾妻鑑』に見えたるにても、推測するを得べし。

彼れは釋教に就いては、顯密の二教に兼通せしが、特に和歌は其の造詣するところ頗る深かりき。後鳥羽上皇宣は、西行は才思天成にして、常人の學び得るところにあらざり、人麿の後身と云ふべしと。彼れが如何ばかり、歌道の奥儀を會得したりしかを知るに餘りあり。彼れ嘗て慈圓僧正に教へて曰ひけらく、凡そ密教を學ばんと欲するものは、先づ和歌を學ぶべし、さらでは其の奥旨を悟りがたしと。かゝる零碎なる隻句は、彼れが歌學上の意見を明知するを得ずと雖も、和歌を以て密教の旨に協ふとなす所以のものは、此の道の専ら物の哀を知るを第一の要義となせ

しが、故にあらざるか。今彼の歌に就きて、驗するに、其の歌ふところの概して物の哀を詠むたるものならざるはなし。例へば

わきて見ん老木は花もあはれなり、いまいくたびか春にあふべき  
かぎりあれば衣ばかりをぬぎかへてこゝろは花を慕ふなりけり

津の國のなにはの春はゆめなれや、あしのかれ葉に風わたるなり  
の如き又は世上に普く喧傳せる

こゝろなき身にもあはれは知られけり、鴨立つ澤のあきの夕ぐれ

といへるなどの如く、彼れの詠歌の大半は殆ど此の悲哀の調を帯びたり。されども彼れが物の哀を詠ずるは、滔々たる世上の歌人が、單に歌はあはれに詠むべきものぞと心得たるとはいたく異なるどころなくばあらず。彼れは元來妻子財寶をも棄て、世を遁るゝ程の人心深く、物の無常なるを悲しく感じたるなり。されどもまた彼れは物の無常なるを悲しむと共に、無常即常なるを知れり。換言すれば、彼れは物の無常なる中に常道の終始一貫するを知れりしが、故に事に觸れて喜ぶこともかぎりなく深かり。上に引用せる歌の中にも、明かにかゝる感想則ち



無常を悲む底に常道の永遠なるを喜ぶ意を含蓄するを見出だし得べし。猶ほ一層其の旨の幽玄なるものを求むれば

ふかく入りて神路のおくを尋ねればまたうへもなき峯の松風

さやかなる鶯の高根の雲井よりかげやはらぐる月よみの森

の如きは其の一例となすに足れり。されば彼れの詠に或は瀟洒なるもの或は哀絶なるもの、あるは勿論或は人におくれて嘆きける人を見ては同感の情といめあへず

なきあとの傍をのみ身に添へてさこそは人のこひしかるらめ

と詠じ或は棄てたる浮世のなほ厭はしきとては

何事にとまるこころのありければ更にしもまた世のいとほしき

とよみたる如き孰れも彼れの肺肝より出でたるものにあらざるはなし。かるが故に彼れの詠には奇を求め巧を競ひたる跡は更にあらざるなり。さてまた彼れは措辭の技倆に就きて明らかに其の感想を發露するに餘裕ありしが如し。其の句法に艱澁侘儷なる調子を認めざるのみならず往々斬新なる言詞さへも能く調

和して流暢なるを得しめたり

かくて彼れは文治の頃京都に還り東山の双林寺のほとりに草廬を結び櫻の木など植へめぐらして常に釋迦入滅の日に臨終せんを願ひたりき。嘗て歌うて曰はく

ねがはくは花のもとにて春死なんそのきさらぎのもち月のころ

と果して其の詠の如く建久元年二月十六日即ち釋迦入滅の日におくること一日にして逝りぬ。享年七十三歳。其の家集を『山家集』といふ。また昔より自ら詠みおきける歌を抄出して三十六番につがひたるもの一卷を『御装瀧河の歌合』と名づけ他の一卷を『宮河歌合』と名づく。其の外に彼れが見聞のまゝを書き集めて佛説を載せたる隨筆を『撰集抄』といふこれはた今に傳はれり。

藤原定家は俊成の子にして母は若狭守親忠の女にて美福門院の女房伯耆といひし人なり。後二條天皇の御宇應保二年(一八二二)に生まれき。初の名は光季といひしが中頃季光と改め尋いでまた定家と改めたり。資性頗る躁急にして進取の氣象に富みまゝ才氣に誇負する癖ありき。治承壽永の間正五位下に叙せられし



が文治元年殿上に於いて源雅行と忿争し燭を把りて其の頬を撃ちし罪によりて後白河法皇の勅勘を蒙り官籍を除かれたり。されども其の年の暮父俊成深く此の事を歎き歌を作りて哀訴の意を寓せしかは法皇聞こしめしいたぐ之を憫み給ひて本位に復させられき。其の後越えて五年左近衛少將に任ぜられ兼ねて因幡安藝等の權介を歴て正四位に叙せられ建仁中左近衛權中將と爲り美濃の介をも兼ねたりき。元久二年後鳥羽上皇の勅を奉じて藤原有家、全家隆、藤原雅經、源通具等と共に『新古今和歌集』を撰進せし事前に記載せるが如し。承元の初つ方上皇當時の和歌に名あるものをして最勝四天王院の障子に名所の歌を詠ましめ給ふに上皇躬ら撰定し給ひしが定家の歌を最も多く採り給へり。建暦元年從三位に叙せられ建保中參議に任じ治部卿と爲り正三位に進みぬ。其の後民部卿に遷り貞應元年に參議を辭し安貞元年に更に正二位に叙せられき。定家常に父俊成は三位にて終られしに其の身かく二位に叙せられしかば無上の幸慶なりとて悦ばれけりとなむ。貞永元年權中納言に任ぜられ尋いで帶劍をも授けらるゝに至りぬ。此の時に於ける彼れが得意の程知るべきのみ。其の頃後堀河天皇の勅命を承け

て和歌集の撰進に着手し夙夜匪懈事に従ひしが巻軸完成するに先だち文暦元年天皇崩御ましませしかば奏せずして止みぬ。今に『新勅撰和歌集』とて世に傳はるものは即ち此の稿本なりとす。天福元年齡七十一の時剃髮して明靜と號し仁治二年遂に逝りぬ。行年當に八十歳。世に彼れを京極黃門と稱するは二條の北京極の西に住まはれし故にて黃門は中納言の唐名なり。彼れはまた嘗て別莊を嵯峨の小倉山に設けて靜養の地となし時に或は居住せし事もありき。

彼れは歌道の外史傳を涉獵し又詩を賦し文を作り兼て弓馬の術にも長じたり。就中和歌の才は殆ど其の天京に出で加ふるに家學として其の奥議秘説を繼承せしかば能く一世に獨歩するに至れり。後鳥羽上皇ある時定家を小御所に召され和歌を判せしめ給ひて勅詔ありけるは朕が汝を此所に召すは汝を重んずるが故なり宜しく汝が胸底を開いて思ふところを殘すことなく批判し申さるべし若し知りながら憚りて云はざる事もあらば其は朕が汝を召す本意にあらずと申されたる事あり。かゝれば當時諷詠の道大に榮えて名匠偉人を以て目せられしもの多かりきと雖も皆彼れを推重せざるはなかりき。さて彼れが歌道に於けるは天



稟の才に出で家學に淵源せるところ頗る深かりきと雖も其の平生の勵精刻苦は亦大に與りて力なくばあらず。彼れは即ち其の家に在りて歌を作るに必ず南面の障子を開かせて遠く外方を望み衣襟を整へ坐を正してのち詠まれたりき。其の言ふところを聞けば曰はく日ごろ靜肅の處に在りて之を習ふ時はかしこき御前にありても臆する事なかるべしと。彼れはまた歌を詠まんと思ふ時はまづ白樂天の故郷有母秋風淚、旅館無人暮雨魂といへる句若しくは、蘭省花時錦帳下、廬山雨夜草庵中といふ句などを誦するを常としき。かるが故にや其の詠もあつから風格高潔端正にして心深きもの多し。

秋の歌

明けばまた秋のなかばもすぎぬべしそら行く月のをしきのみかは

守覺法親王五十首の歌よませけるに

霜まよふそらに知られしかりがねのかへるつばさに春雨ぞ降る

されども一概に云はゞ定家の歌は過巧なるものなり即ち意匠は務めて新奇ならむを希ひ措辭はわざと華麗ならむと企てたる趣あるを見る。蓋し措辭の一點に

就きては彼れは殆ど無比の才能を有するもの縦横無盡優に精緻を極めたり。例へば

攝政太政大臣家歌合に彌中晚風といふことを

いづくにか今宵はやどをかりごろも日も夕ぐれの嶺のあらしに

詩を歌に合はせ侍りしに山路秋行といへる心を

みやこにも今やころもをうつ山夕しも拂ふつたのしたみち

題しらず

消えわびぬうつろふ人の秋のいろに身をこがらしの森のしたつゆ

等の諸詠は只其の一斑を示すのみ。按ずるに意匠の新奇措辭の華麗は我が歌界が必ず一度は過ぐべかりし趨勢なりしが此の趨勢は定家によりて始めて充分に發展せられたりともいふべし。されどもかゝる趨勢は恐らくこゝに其の進路を止めざるを得ざるべし。何となれば意匠の新奇と措辭の華麗とは定家の如き才能あるものによりてこそ充分なる成功をもなすことを得べけれさらぬものにありては徒に輕佻浮華に流れて終るべければなり。後鳥羽上皇申されけるは定家



の歌は人の能く模倣し得るところにあらず、彼れは専ら流麗を尙びて意味を主とせず、おもふに彼れは衆に優れたる技倆ありて巧に趣向を構ふるも若し骨力軟弱なるものにして之に倣はしめば其の歌大方無味索然たるものなるべしと。現に其の子爲家の如きは其の才力稍、見るべきものあり父定家の衣鉢を承けて其の風の歌をも詠みたりと雖も概してはあらぬさまに流れて皮相を傳へたるに止まりき。まして其の餘の歌人の定家を模倣せしものをや輕佻野卑殆ど見るべきものなきに至れり。

定家はかくの如く才藝衆に超えて古今の詞壇に一時期を畫する程なりしかども躁急なる資性は晩年に至りても只、僅に其の主角を銷磨し去りたるのみ往々儂聾を蔑如するを免れざりき。即ち彼れは晩年に及び尙ほ其の才氣を恃みて人を侮蔑したるがために讒せられて後鳥羽上皇の勘氣を蒙りし事あり。故に彼れが詠に逸氣放棄自己の不遇を慨嘆せるが如きもの、皆に進取の志に驅られたる壯時の作に見ゆるのみならず意氣四邊を凌ぐもの亦晩年の詠にも散見せり。上皇の宣旨にも定家は才學たぐひなしと雖も心術正しからず故に其の推獎せる歌の如

きも或は私なしとも限らず加之みづから高うして人を侮る風あり世の或は其の歌を賞するものあるも若し我が自讃の詠にあらざる時は色をなして怒ることありとやうに云はれたり。かゝれば當時彼れを敵視する人も蓋し尠からざりしならんに能く其の中において一世を風靡したる技倆の程豈に尋常なりとせむや。其の著述に『百人一首』と題して天智天皇より當時に至る歌人百人の詠一首宛を擇びたるもの、世に流傳せるは誰れも知るところ、其他『詠歌大概』『雨中吟』『未來記』『願註密勘』『僻案抄』『毎月鈔』『源氏奥入』『拾遺愚艸』『同頁外』『明月記』等あり。此の中『拾遺愚艸』『同頁外』は其の自詠を集録せるもの、『明月記』は其が家の口次の記録なり。

此の頃に於いて定家と殆ど其の盛名を齊くせしものを藤原家隆とす。此の卿は壬生中納言光隆の第二子にして母は兼實の女なり後白河天皇の御宇天保三年(一八一八)に生まれ幼にして穎悟の聞こえありき。家隆嘗て寂蓮法師の婿となりしが其の頃和歌を藤原俊成に學びぬ。俊成常に人に語りて此の仁未來の歌仙たるべし、見參のたびに難義などいふことは問はず、いつも歌よむべきまきしき心はい



かに侍るべきぞといふことを問ふ」とていたく感ぜられたり。されども少壯のをりはさまで聞こゆる事もなかりしが建久の頃よりやう／＼其の名を顯はし遂に歌道の奥義に達して定家と共に世の賞讃を博するに至れり。定家は前にもいひし如く驕慢の風ありて常に儕輩を輕侮せしかども家隆に對してのみは毫もさる風なきのみならず勅を奉じて歌集を撰びける時は彼れの歌を多く採録せられたり。さる程なれば爾餘の歌人に尊重せられしことは管々しく云ふまでもあらじかし。

『古今著聞集』に曰はく「後鳥羽天皇始めて歌の道御沙汰ありける頃後京極殿攝政藤原良經に申し合はせ參らせける時彼の殿奏せさせ給ひけるは家隆は未代の人磨にて候ふなり彼れが歌を學ばせ給ふべしと申させ給ひけり」と。又西行法師も家隆のいまだ若くて坊城侍従と稱しける頃其の秘藏の『御裳濯河の歌合』と『宮河歌合』とを授け奉るとて「圓位は往生の期既に近づき侍りぬ此の歌合は愚詠を集められたるも秘藏のものなり未代に貴殿ばかりの歌よみはあるまじきなり思ふところ侍れば附屬し奉るなり」といひて二卷の歌合を授けしるよしも同集に見えたり。家

隆常に後鳥羽天皇の爲めに甚だ親昵せられしかば承久の亂後上皇の隱岐に遷さるゝに及びても彼れは尙ほしば／＼獻詠するところありき。元久二年定家等と勅を奉じて『新古今和歌集』を撰進せし由は既に再三記載したるが如し。其の一生の間に詠せしところの歌よそ六万首、今に傳はるものは僅に其が十の一にも及ばずといふ。其の官は宮内卿に進み從二位に至りぬ、世に壬生の二位と稱せしも此の故なり。四條天皇の御宇嘉禎三年病のため薙髮して佛性と號し攝津の國の天王寺に住しけるが明年つひに逝りぬ。此の時年八十歳。家集を『玉吟集』とも亦『壬生二品集』ともいふ。

其の詠せる歌は感想着實平淡にして妄りに奇巧を銜はず格調流麗にして高雅の風を帯びたり。是れ蓋し家隆の當時の人々に抽んで、尊重せられたる所以なり。此の點を以て云は、彼れは當に定家の華麗を貴び奇巧を求めしと相對立せるものとも謂はれ得べし。例へば

攝政太政大臣家百首歌合に春曙といふ心をよみ侍りける

かすみたつ末のまつ山ほのく／＼と涙にはなるよこぐものそら



和歌所にて六百首歌奉りしに冬月

ながめつゝいくたび袖にくもらんしぐれに更くる有明のそら

時に合はせし歌の中に山路秋行といへることを

秋風のそでに吹きまく嶺のくもをつばさにかけてかりも鳴くなり

百首歌よみける中に

きのふだに問はんともおもひし津のくにのいく田の森に秋は來にけり

千五百番歌合に

おもひいでよ誰がかねごとのすゑならん昨日のくものあとの山風

の如き孰れも其の感想文致の着實平淡にして高雅流麗なるを示さるはなし。

『續歌仙落書』に彼れの歌躰を評して「風躰けだかくやさしく飽なるさまにて又昔思ひいでらるゝふしも侍り末の世にありがたき程の事にやすがたさまゝなれども大内の花盛り心あらん雲の上人いざなひて暮るゝまで詠むる心地なむするど見えたるも過言にあらず。彼れの詠歌が當時の詞壇を占領せる靡浮巧緻の風を離れて着實高雅の格調を持したるは恰も延喜天曆の歌風を再び數百年の後に見

らむ趣あるを覺ゆ。

斯くの如く家隆の詠歌は稍當時の風格を離れて着實高雅の趣ありきといへども仔細に査査する時は未だ其の着想措辭兩ながら勿論全く當代を脱せしものと云ふべからず即ち軟弱なるが如きは其の較著なるものなり。故に若し此の時代にありて能く是等の風格を離れて優に一異采に點出せしものを求むれば予輩は鎌倉第三代の將軍源實朝を推さざるを得ず。實に實朝の詠は高大雄渾眞摯素樸當代に於いて遂に其の比を見ずさながら奈良朝の歌謡を吟詠する概あり。以下直ちに其の特質を評臨するに先だち將軍が閱歷の一斑を見む。

將軍は誰れも知る如く源右府頼朝の第二子にして母は北條時政の女政子なりき。後鳥羽天皇の建久三年(一千八百五十二年)父頼朝が恰も征夷大將軍に補せられたる當年鎌倉に生まれ幼名を千幡といひぬ。其の年わづかに十二歳にしてたまたま兄の頼家將軍の職を廢せらるゝに至りしかば其の跡を襲ぎて從五位下に叙せられ征夷大將軍を拜命し次いで右兵衛佐に任ぜられき。其の後數年を出でざる程に右近衛少將、同權中將、權中納言、左近衛中將等の諸官を経て位は從二位に至り



建保六年正月權大納言に遷りしが同年二月自ら請うて左近衛大將となり同十月更に内大臣に進み同十二月遂に右大臣となりぬ。是より先將軍の權大納言に拜せらるゝや幕臣大江廣元將軍の齡いまだ壯に至らず剩へ尺寸の勳功なくして榮進甚だ遠かなるを見不測の殃禍あらむ事を怖れて切諫せしかども將軍當時外戚いたく跋扈して源氏の正統永く繼承せざらんを慮りせめては我が身の官位をだに高め家聲を發揚しおかむとて聽許せざりきといふ。さる程に將軍は右大臣に任ぜられて翌年即ち承久元年正月廿七日夜鎌倉の鶴が岡八幡宮に於いて拜賀の禮を行ひ其の式果て、當に石階を降らんとして頼家の遺子僧公曉のために刺殺せられけり。齡やうく二十八歳。翌日其の地なる勝長壽院の側に葬りぬ。初め將軍拜賀の日其の室をして髪を梳らしめ自ら之を扱いて室に與へ戯れて曰はく「こを我が亡き跡の形見にもせよ」と又其の邸を發するに臨み庭上の梅花を見ていであいなばぬしなきやどとなりぬとも軒端のうめよ春なわすれそと歌へりきと。後に思へば二者さながら鏡を爲ししに似たり。故に當時學事に將軍は資性温雅聰慧幼にして學を好み頗る風雅の念に富めり。

疎き鎌倉武士の間に人と成れるものとしては稍異常の教育を受けたり。即ち彼れは文章博士源仲章に就きて孝經をはじめ引きつゝ和漢の書史を學習せり。さりければ和歌に至りては將軍わづかに十五の時其の詠三十首を京都に遣はして定家の批判を乞へりし事あるのみ。尤も加茂真淵の説に従へば將軍はその後定家より其の相傳の私本と稱する『萬葉集』を得て専心に講習し能く其の所載の歌に就き玉石を甄別して讀みたりといふ。また『吾妻鑑』には建曆元年鴨長明藤原雅經の推舉により鎌倉に下りて將軍實朝に謁したる由見えたり。鴨長明は當時有数の歌人として其の名を知られしもの然らば將軍はまた長明につきても歌道を質したることありしなるべし。

其の著『金槐和歌集』は彼の自詠七百首を集録したるものなり。將軍の歌風はちのづから一跡を爲して音に當時の詞壇に一の比類を見ざるのみならず殆ど『古今集』の風格をも離れて負に『萬葉集』の調を帯びたり。たとへば

歌

武士の矢なみつくろふ小手の上にあられたはしる那須のしの原



太上天皇御書下影時歌

山はさけ海はあせなん世なりとも君にふたこゝろわれあらめやも  
といへる歌の高古雄壯にして眞摯なるは誰れも知るところ其の他

古都春月といふ事をよめる

たれ住みてたれながむらんふるさとの吉野の宮の春の夜の月

秋のはじめ月あかりし夜

秋風に夜の更けゆけばひさかたの天のがはらに月かたむきぬ

秋の歌

かり鳴きて秋風さむくなりけりひとりや寐なん夜の衣うすし

箱根の山を打ちいで見れば浪のよる小島あり供の者に此の海の名は

知るやと尋ねしかば伊豆の海となん申すと答へ侍りしを聞きて

箱根路をわが越えくれば伊豆の海や沖の小島に波のよる見ゆ

と詠むたる如き亦道強素樸の體なるを見る。將軍の歌の斯く高古雄壯にして眞

摯素樸の風あるは畜に平凡なる歌人等が強ひて萬葉の風格を學ばむとして單に

措辭の上を修飾模倣したりしとは全く異なり感想はた能く高古雄壯の趣ありし  
こと以上に列擧したる歌に就きても知らるべし。

蓋し將軍は定家に就きて學習せしことありきといへども措辭の一點はむしろ將

軍の注意せざりしところなりしが如し。例へば「大乘作中道觀歌」と題しては

世の中はかゝみにうつる影なれやあるにもあらずなきにもあらず

と詠む又「思罪業歌」と題しては

ほのほのみ虚空に充てる阿毘地獄行くへもなしといふもはかなし

と詠むなど其の風姿の簡短なる散文めきたるをも願慮せざりき。就中紅梅を

字音に讀ませて

我が宿の八重の紅梅咲きにけりしるも知らぬもなべて訪はなん

と歌ひたる如きは益措辭の上にはさせる注意を置かず唯感ずるまゝに其の言は

むと欲するところを吟詠せし人なりしを知るに足る。此の外にも猶ほ古歌を誤

解し語義を違へて用ゐたるなどは殆ど數へがたき程なり。按ずるに將軍が此の

如く不注意に且つ未熟なる措辭を以てして猶ほ高古雄壯の調を歌ひ専ら優麗絳



巧を事とせし詞壇に立ちて世の視聽を驚かししは將軍の性來おのづから歌人たるに適じたるものありしや必然なり。故に余輩は將軍が定家に學びたる事ありきとするも其の一事のさまで將軍をして得るところあらしめきとは思はざるなり。若しそれ將軍が『萬葉集』を講究したる影響に就きては予輩も多少認識せざるにあらずと雖も亦將軍が武門に生まれ尙武の氣象旺盛なりし鎌倉にありて成育したるに重きを措かむとす。此の點より見れば京鎌倉に於ける人情風習の差異は此處にも尠からず其の現象を呈したりと謂ひ得べし。後世の史家將軍を評して極めて文弱優柔なる一貴公子に過ぎざとせども一旦將軍の詠を誦するものは決して平家の子孫の如き柔弱なるものなりきとは爲す能はざるべし。さはいへどまた予輩は強ちに加茂眞淵の所説の如く直ちに將軍を目して奈良朝以後唯一獨歩の大歌人と爲すものにあらず唯、將軍の如き少壯の齡にして能く詞壇の一方に卓立し管に當時に推されたるのみならず百世の後にまでも熱誠なる嘆美者を出だしたりしを偉なりとするのみ。げにや當時において定家は既に將軍の歌を賞して鎌倉右府の歌を見る時は歌は物憂くなりぬといひ其の一首を百人一首

の中に擇びて朝夕の風詠に資し『新勅撰和歌集』には其の二十五首を採録したりき。其の後詞壇の風織細をのみ賞びぬる世となりても賞揚するもの尙ほ盡きず諸集の撰者はた將軍の歌を採りて載録したるもの數十首の多きに及べり。近世に至りても眞淵の如きは特に將軍の詞才に秀でたるを賞揚して貫之躬恒といへど之に師たること能はざるべしと云へりき。さりけれども天齡を將軍に假さず遂に其の姪公曉の爲に暗殺せらるゝと共に高古雄壯眞摯素樸の風また榮えず我が歌道は是れより永く反對の方向を取りつゝ唯一に軟弱織細を以て其の極宗と看做すに至りぬ。

そも、實朝將軍逝きて後また高古雄壯の調を歌ふものなく我が歌界の風全く軟弱織細に赴きたるは何の故なるぞ。按ずるに此の頃我が歌界の覇權は全く優柔なる公卿の手にのみ委せられ一種の技術となりたるに剩へ定家等の一派が専ら意匠の新奇を求め措辭の華麗を競ひたる餘弊のみ傳はれるに依らずはあらず。蓋し優柔なる公卿の口より雄渾壯絶の調を唱へいでむはかたく詞才定家等に及ばぬ歌人の彼れが如き意匠の新奇と措辭の華麗とを併はせ求めむは易からず遂



に其の弊のみを傳へて軟弱纖細の風に成り了せしにこそ。されば余輩は特に定家の意匠と措辭とを模倣せむと企てしものに此の風の甚しきを認む。故に切言すれば定家に於いて既に此の軟弱纖細なる風調を來たすべき暗潮ありきと謂ふべし。されども其の子爲家(一八五七—一九三五)出て、詞壇の牛耳を執るに及び其の潮流の稍顯著なるを見る。爲家は詞才なかりしにあらざるも遠く其の父に及ばざりしかば歌ふところも徒に父祖が歌風の皮相を傳ふるに止まりて其の精神に及ばず格法を守るを以て專一の要務とし只管ら新を求め奇を希ふあまり縁語を用ゐて上下の掛けあひを取るを主となせりき。かゝりければ『新古今』時代の雄偉艶麗なる風はいよ／＼極端に奔りて其の弊に陥りしも當時許多の歌人中能く爲家に及ぶものなかりしに剩へ父祖の聲望を荷ひしかば歌界はつひに其の風の歌を以て占領せらるゝに至れり。其の後爲家の長子爲氏(一八八二—一九四六)御子左又は二條ともと號し第二子爲教生死年月不詳毘沙門堂と稱し第三子爲相(一九二三—一九八八)冷泉と呼びつゝ三家分立するに及びては其の詠出せる歌風各多少異なりきと雖も亦其の祖俊成若しくは定家等の務めて歌ひしものとは

あつから別にして孰れも其の弊をのみ襲へり。爲家の法に泥み又華に流れたるは

春立つ心をよみ侍りける

あら玉の年はひとよのへだてにてけふより春を立つかすみかな

早春を

いとはやも春立ちけらし朝かすみたなびく山に雪はふりつゝ

といへる歌にても知らるべし。其の格法に泥みたる故にや委詞整然たる趣はあれども歌情おほむぬ深からざる風あり。其の父定家の歌の詞艶にして義理幽遠なるに比すれば遠く及びがたくやあらむ。かくて爲氏及び爲相は爲家の風骨を得て委詞共に和熟せしも爲氏の句法整然として稍氣力あるは爲相の措辭婉曲にして無下に軟弱なるとは異なれり。爲氏の歌に

秋夕雨

ながむとて夕は露の我がそでをいかにかほさん秋のむらさめ

搦衣幽



里どほき夜半の寐さめの秋風にそれかあらぬか衣うつなり  
といへるを爲相の

立春の心をよみ侍りける

いつのまに霞の色となりぬらん昨日は雪のふる年の空

院百首歌の中に

風すさぶ垣ほの草の下葉まであつれば露をしたふ月かけ

とあるに比較し見よ、ちのづから前に云へる如き別あるを認むるを得む。さてまた爲教の歌に至りては爲氏爲相のとも異なるどころ多し。爲教の歌は爲家のに似たるよりは寧ろ父祖俊成定家等の幽玄体に倣ひて及ばざるものとやいはむ、奇僻見えたり。例せば

見花

春ごどに飽かずなれても山ざくら花にや今日もながめくらさん

寄柱戀

契りしもありしながらの橋ばしら立つ名ばかりに朽ちや果てなん

の如し。其の子爲兼(一九九二卒)は父爲教の歌風を襲ぎて稍、氣骨あるを詠出せしものから其の極はた往々奇に流れたり。

家に歌合し侍りし時春雨を

梅の花くれなるにほふ夕ぐれにやなぎなびきて春雨ぞふる

の如き又は

春歌の中に

思ひそめき四つの時には花の春はるの中にもあけぼの、空

と歌へる如きは僅に其の一斑を示せるのみ。是等の歌を見るに殆ど歌謡の趣味を没了する觀なくばならず。されども爲兼の歌にも亦眞率流露の趣ありて諷咏に適するもの往々見えたり。

百首歌奉りし中に夜旅

とまるべき宿をば月にあくがれて明日の道ゆく夜半のたび人

海邊眺望を

浪のうへにうつる夕日のかげはあれど遠つ小島は色くれにけり



爲氏の子爲世(一九一〇—一九九八)の歌は祖父爲家さては父爲氏等の風を學びて是れはた一方に僻したる趣あり。

元享三年八月十五夜後宇多院に月五十首歌奉りけるに

またれつる風よりもなほ夏ころもひとへに月のかげぞすしき

百首歌つかうまつりける時岑時雨といへるを

あらし吹く峯のうきくもとにかくに立ちもさだめ降る時雨かな

措辭婉曲流麗なれども縁語を用る上下の掛合をとるに過ぐ。是れ前に云ひし如く爲家等の詠出せし歌風の一層極端に奔りて措辭の奇巧に流れたるものとやいはまし。故に爲世の歌を爲兼のに對すれば彼此の歌さながら兩極端を示す趣なくばあらず。彼れは想の邊に奇を求めて其の奇に失し是れは詞の上に巧を希ひて其の巧に過ぎたるものなり。此の故に彼れの最も極端なるものは意味減裂して錯雜なる平語の如くこれの最も極端なるものは姿詞回轉して一種の綺語に似たり。嘗て予輩が三家分立の後に至りては孰れも父祖が歌風の弊のみを襲ふ觀ありと云ひたるも此の故なり。若しそれ爲兼爲世の歌の共に平坦着實なるもの

を擇びて比較せむには予輩は歌人として寧ろ爲世の優れるを想ふ。左に掲ぐる歌の如きは蓋し此の説を證明するに足るべしと信ず。

暮春月

中そらにかすみてのこるかげもなし暮るゝ彌生のありわけの月

稀逢戀の心を

おのづから待ちえてこよひはらふとも枕のちりはまたや積らん

百首歌たてまつりし時

煙りさへかすみそへけり難波人あし火たくやの春のわけぼの

かくて後爲兼爲世各流派を立て、相拮抗せしかばつひにはおのれの門戸を張らむとするあまり互に非議するに至れり。されば爲世一派の輩が父祖の遺訓に托して爲兼の歌を貶黜せしが如きは世業ならざる爲兼が一派を主張するを思みて無稽なる譏誚をなせしに過ぎずと知るべし。爲兼の歿後毘沙門堂の流派は跡絶えて獨り御子左と冷泉とのみ永く榮え就中御子左の一派繁盛を極めたり。爲世の子爲藤爲明爲定爲通等共に其の名あり殊に爲世の門に頼阿法師一世に其の譽



れ高し。是等はまた後に至りて説く時あらむ。

石原正明が「尾張に家裏」に曰はく「かくて此の道地に落ちて年月経たりしを後嵯峨院世をまつりごちし給ひしほご再び世上に勃興して百首歌合など何にくれさ數多かり。かりければ又其の世につけたる上手たち出来て絶えたる道をつぎしなり。其の上手たちの中に爲家卿は俊成卿の子孫なりければ世のおぼえよせ重き宿老なりしかば唯々此の人のひかりをおもてに立てよくもあしくも其の指揮に従ふ事となりぬ。世尊寺の筆道に家を立てたる如く歌道の家業としたるは此の卿なん始めなりける。かくて此の卿に子三人あり太耶爲氏其の子爲世御子左と號す。二耶爲教其の子爲兼毘沙門堂と號す。三耶爲相冷泉と號す。冷泉は此の論に用なれば姑くさしおくべし。御子左の流れは爲氏爲世打ちつゞきていさめでたき歌よみなり。さるは爲家卿が風骨にて俊成定家の氣韻には遠く及ばれざる處せき規矩の中になん滞りなく詠みたるものにて結句は爲家卿よりすぐれたる所なん見ゆる。(中略)毘沙門堂の流れは爲教卿上手にて爲氏卿にも劣れりといふけしめふさしも見えわかつ。其の子の爲兼卿もまた一時の名匠にていさ勢ある歌よみなり。此の風は爲家卿の持法なるを嫌ひて上二代の風に心をかけたれば少しく氣概あるに似たれど怪しき僻ある風にて御子左にまさらず、まさられど一家なり。「玉葉」風雅にていみじき物にいひおもふは御子左の遺言なればさのみはいかゝあらむ。「野守鏡」「非蛙眼目」などにそしられたるは我が方引きたる論説なれば其の心して見るべし。かくて御子左は爲氏爲世と打ちつゞきて和歌

は其我が家のものさ爲しはてたるに同流にさる物の上手出でてきて撰集をも承りしことなれば家門の嫡庶のまぎれも出できぬべくて周章したるものなり。「群書類從」に入りたる陳狀を見て知るべし。さるまゝに若干程の偽書を作りて毘沙門堂にておそぶ言葉どもをしかくさてよまざることしかくは希はざる事と云ひて定家爲家の兩卿に托して其の説を主張して爲兼卿の説を防ぎたり。此の兩卿はかの系別の祖なれば必ず據るべしと思ひてなり。世上の歌よみに草庵体とて持法なるがあるは其の風の名残りなり。かくて爲兼卿は其の家つゞかす爲世卿は爲藤爲明爲定爲通等の卿皆めでたき歌よみにて遂に此の風に一致したり」云。

### 第四章 散文

#### 第一節 散文界の概況

鎌倉時代に於ける散文の特質 佛教思想若しくは

厭世的觀念 武士道並に儒學思想 文詞の進歩

作者 著書

以上に述べたる如く此の期の歌謡は平安朝の艶麗優美若しくは不自然の傾向を繼承して所謂様によりて蒔藎を描く觀ありしが散文は全く之と異なりて顯著な



る發達を見せり。單に其の種類のみに就きていふも既に前代に見えたる序跋、物語、日記、紀行、消息、草子、雜史等の如きは勿論、記録、戰記、註疏の類は尤新に此の期に入りて出でたり。而して是等のもの、通有せる感想に至りては特に平安朝に其の比を見ざるものありて存す。佛教思想若しくは歴世的觀念の一大思潮となりて普く此の期の散文界に流通せること則ち是れなり。蓋し是等の感想は既に第貳章に於いて述べたる如く當代の人士が一般に懷抱せるものなりしが、發して散文の上に現はれたるなり。それ當代の初期に於ける天災地妖はさておれ保元の亂平治の變はまのあたり人倫の毀滅を示し源平の盛衰は親しく人生の恃むべからざるを知らしめき。此の時に生まれあひて躬ら世態の變異を聞睹せるもの何れの人か無常の感あらざらむ。况して此の頃興隆せる佛教的思想は普く人心を陶冶して益、無常の感を鼓吹したるをや。されば躬親しく此の毀亂の世を閱し佛教的思想に陶冶せられつゝ遂に厭世の觀念を懷抱するに至れるもの筆を執りて文を成すに如何でか其の作の是等特異なる思想を包含せざるべき。げにや當期に於ける散文は或二三の作を除く外概ね此の佛教的若しくは厭世的觀念を以て

支配せらる。况むや當代筆を執りて散文界に馳騁する者多くは僧、侶、隱士の輩にして其の主題とせるところのものはた當時の社會、或は人事にありしをや。すなはち

それ人の友たるものは富めるを奪み無なるを先とす必ずしも情あるとすなほなることば愛せず只絲竹管絃を友とせんには如かず  
といひ

今は禁色雜袍をゆり顯職温官を経て父子丞相の位に至り兄弟將相の榮を並べたり末代といへども不思議なりし事共なり。政道忽ちに亂れ官途こゝにすたる、歟。是はひさへに大威徳明王の御利生にやと覺えたり

といへる如き儘に其の一例に過ぎざれども此の如き思想は當期の散文中殆んど明暗何れにか認識せられざるなし。そも、前代の散文は歌舞音樂洋々たる平安城裡の詞人が其の間の消息を描寫せるものにして既に樂世的思潮の流行せるを見たり。盛衰常なく榮枯定まりなき鎌倉時代の文士が當時の社會を敘述せるもの、厭世的觀念を包容せるも理の當然なるのみ。而して當代の散文が包容せる感想は皆に是等佛教思想若しくは厭世的觀念に限らず、かの當時武人の生命と



せる武士道の如きさては汎く儒學思想の如きまた孰れもこゝに見るを得べし。  
例へば『保元物語』に

乙若生年十三なるが「あな心憂の者共のいひかひなさや、吾等が家に生まるゝ者は幼な  
けれども心は猛しきこそ申すにかく不覺なる事を宜ふものかな。世の理をも辨へ身  
の行末をも思ひ給はゞ七十になり給ふ父の病氣に依りて出家遁世して憑みて來たり  
給ふをだに斬るほどの不當人のまして我々を助け給ふ事あらば(中略)。命助かりたり  
さも乞食流浪の身となりて此處彼處に迷ひ行けば、あれこそ爲義入道の子どもよき人  
々に指をさゝれんは家の爲にも耻辱なり」

とて死を輕んずるは所謂義のため生を鴻毛に比して顧みざる武人の精神にあ  
らずや。また同『物語』に保元の亂階を論ずると

されば聊かも御私なく天下を治め給ふべきに愛子に溺れて庶を立て後妃に迷ひて弟  
を用ふる國の亂るゝ基なり。此を以て書に曰はく聖人の禮をなす其の嫡を尊みて世  
を繼がしむるにあり太子賤しくして庶子を尊ぶは亂の始なり必ず危亡に至る

と是れ即ち儒學的思想を以て帝位の正統を論評せるものにあらずや。然らば同  
時代に於ける詞人の作にして散文のみひとり平安朝のと異なるどころ多く歌謡  
の依然前代の風ありしは何の故ぞ。是は主として自然なる人間社會の描寫をつ

とめ彼れはあまり不自然なる題詠をつとめたるに歸せずばあらざるなり。

當期の散文に於ける文詞の進歩に至りては特に著るきものあり。蓋し前代の散  
文も多少漢語若しくは佛語等を混和せざりしにあらずと雖も此の期の散文には  
殊に能く是等の調和せられたるを認む。由來我が國語の優長閑雅なるは單に悲  
哀優婉の事件を寫すに餘りあるも未だ莊重偉大の思想を發表するに足らざりき  
然るに此の期の散文は能く漢語佛語等を固有の國語に調和して優婉悲哀なる事  
件も莊重偉大なる思想も共に自在に描破叙陳するを得たり。

頃は二月十日餘りのことなれば梅津の里の春風の餘所の匂ひもなつかしく大井川の  
月かけも霞にこめて腫なり。一方ならぬあはれさも誰れゆゑも思ひけめ往生院  
さば聞きつれども定かにいづれの坊さも知らざれば此處にやすらひかしこにすみ尋  
れかぬるぞむさんなる。

といへる句の優美にして

左衛門尉は頭もなき女房の傍に臥沈みたり。盛遠は走寄り御敵具して参りたり、先づ  
御首御覽せよとて懐より女房の首を取出だして其の身に指合せて腰刀を抜きて左衛  
門尉に與へて盛遠が所爲なり和殿の頭を掻くと思ひたれば斯かる事を仕出だしたり  
餘りに心憂ければ自害せんと思へども同くは御邊の手に懸りて死なん、さこそ本意な



く思ひ給ふらめ、疾々切給へて、頭を延べてぞ居たりける

といへる。如何に壯絶なる孰れも優に固來の國語漢語さては俗語を調和して流暢自在なるを見るべし。なほ予輩が第二章に述べたる諸種の言詞は散文の上に於いて始めて認むべきものなるにても其の進歩の尠少なざりしを推知すべきなり。漢文學の深遠なる講究は早く既に衰運に歸せしも所謂淺く汎く斯學の一般に傳播せしを想察するに足る。佛語はた然り。

これを要するに此の期の散文の主なる特質は其の感想の佛教的若しくは厭世的なると其の主題を普く人間社會に求めたると又作者の多くは僧侶又は隱士なりしとにあり。而してまた武士道の發揮の如きも平安朝に比すれば一異采を表するものといはば云ふべし。其の聲調の莊重偉大の風を帯び而して之れを現はすに和漢混和文の一跡を創始して漢語佛語の如き外國語を固有の國語に調和したるはた前代に其の比を見ざることなりとす。但し當期の末葉に出でたる二三の作、又は女流作家の手に成れりしものには猶ほ是等の特質を具有すること尠く一瞥したるところのみにては殆ど平安朝のと區別すべからざるものもありきと知るべし。こゝに最も多く當代の特質を發揮せるものを雜史とす。所謂隨筆もの之に次ぐ。

作者には僧西行、鴨長明を始めとして葉室大納言時長、信濃前司行長、橘成季、源親行、同光行、辨内侍、阿佛尼等最も名聲あり。著書には『方丈記』『四季物語』『發心集』『撰集抄』『抄石集』『十訓抄』の如き、『保元物語』『平治物語』『源平盛衰記』『平家物語』『義經記』『曾我物語』『古今著聞集』の如き、さては『辨内侍日記』『十六夜日記』等孰れも其の名後世までも聞こえたり。

予輩は此の期の散文を評するに當りては例の如く其の内容及び外形の性質体裁の上より左の如く分類し其の作爲せられたる年代によりつゝ順次にものせむとす。即ち此の期の散文をば

物語附消息文隨筆

雜史

日記及び紀行

の四種に分かつ。以上の外なほ序跋、記錄、註疏等の文ありといへども是等は殆ど取り出で、評議すべき程のものにあらず。故に是等は或は便宜に従ひて錄する事あるべきも大方は省略すべし。例へば序跋の單に前代に見えたる諸歌集のを



模倣したるに過ぎざる如き又は記録註疏の殆ど文學的趣味を欠けるが如きは寧ろ省略するの遺般の略史に適するを想へばなり。

### 第二節物語 附消息文

小説的物語の衰微 『秋夜長物語』 『鳴門中將物語』

歴史小説 『義経記』 『曾我物語』

平安朝にありて繁盛を極めたる小説的物語は其の期の末葉よりやうやく衰運に向ひしが此の時代に入りては只、わづかに一縷の命脈を詞壇の一隅に維持せしがあるのみ。蓋し當代の初つ方は干戈に寧日なくて讀書の餘暇だにあるべくもあらねは新に此の物語類の世に出づべき機會なかりしなるべし。其の後世の中稍、治まるに及びても猶ほ一般の人情は樸實質素をよるこび文弱柔儒を厭ひ尙武の氣象のみ旺盛なりしかば浮華なる小説的物語は世の嗜好を惹くこと能はずつひに此の種の物語をして益、衰微に赴かしめたり。しかのみならず當代の初つ方に於ける轉變無常の世態はさながらに其の現實の變遷を敘述せむも既に小説的たる趣ありて讀者の興味を促すに足りじわばわざ／＼世の嗜好に反して小説的物

語を作爲すべき必要なかりしなり。故に此の間にありて僅に世に出でたる物語は前代のに比すれば一小話めくもの數種あるのみ。『鳴門中將物語』『秋夜長物語』『義経記』『曾我物語』等是れなり。是等の物語は孰れも其の作者詳かならず、作爲せられたる年月はた不明なり。

さて『鳴門中將物語』は其の結構單簡にして嚴密には殆ど小説の名を附すべきものにあらず。其の筋の大體は、いつれの年の春とかや彌生の花盛りに花徳門院の御のぼりて二條前關白大宮大納言(公相)刑部卿三位頭中將などまゐり給ひて御鞆侍りしに女ども許多まゐりて見物しけるを其の中に帝のいたく御心よせ給ふありて召さむとしけるに女煩はしくて一旦は其の姿を隠しけるが後つひに尋ね出だされてもとの住家に住まはせつゝ時々忍びて召されければ女のもとの男其の庇によりて中將となるといふ小話なり。伏線照應はさて措き波瀾變化の妙あるにあらず文章さへも前代のに比すれば覺に下れり。『秋夜長物語』は『鳴門中將物語』よりは多少優りて趣向も複雑なる點なきにあらねど是れはた一小話たるを免れず。後堀河院の御宇に西山の隱面上人として道學兼備の人元の名を桂海といひ



しが壯年の頃花園左大臣の御子梅若君といふ童の三井寺の坊に居給ひしを見そめて深き契を結ばれけるが或日梅若君桂海を尋ねて叡山に赴く途次其の山の山伏の拐かすところとなりしより事起こりて叡山と三井寺との戦鬪となり叡山の衆徒園城寺を焼き拂ふ。此の時若君は石の牢に幽閉せられてありけるが天狗どもの戦鬪のさまを物語るを聞き給ひて悲み給ふに大蛇老翁と化して遂に若君を助け出だす。されど若君はあのれの身より事起こりしをあさましく覺えて勢多の橋より身を投げ給ひしが桂海は若君が詠みおくり給ひし歌によりて世にながらへ西山の岩藏に庵室を結び修行をつみ後に東山に雲居寺といふ御堂を創立すといふ筋を一篇の骨子とす。其の間日吉山王新羅大明神を點出し此の亂をもて桂海を發心せしめ若干の化導をなさしめむがための結縁となす。此の篇西行法師のものせる『撰集抄』の中に西山の瞻西上人とて道學兼備の人東山の雲居寺に住する由見えたれば實際にありける事實を潤色して作れるものか。全篇を通讀すれば他奇なしと雖も其の中ちのづから神明佛陀の利徳無量なるを説きて諷諭教戒し以て衆生を濟度せむとするものゝ如し。篇中の人物には僅に人間の通性を

ば認め得るも勿論個人の特性判然たるものあるなく剩へ事變の因果更に一貫せず頗る奇怪にして不自然なり。只文章の一點のみは流石に見るべきものなきにあらず國語漢語若しくは佛語の調和既に見えたり。

その袖のうつり香も身にふるばかりより添ひてうちかたぶきたれば蟬妍たる秋の蟬の初元結ひ宛轉たる娥眉のまゆずみのにはひ花にも妬まれ月にもそねまれぬべき百のかほばせ千々の聲繪に書くとも筆に及びかたく語るに言葉なかるべし。涙と共に枕をかはしまの水の流れも絶えず猶ほ契るべきむつごともまだ盡きなくに闇寒くして紫蘭の夢さめ連理の花分かれて止めがたければ篠の小笹の一ふしに明けぬと告ぐる鳥の音もうらめしくあのがきぬきぬ冷かになりて立ちわかれなどするに明方の月の窓の西より隈なくもさし入りたれば寝みだれ髪のはら／＼とかゝりたるはづれより眉のにはひほけやかにほのかなる顔の餘色ふかく見ゆるさま別れて後の儂に又逢ふまでも待つほどの命あるべしともおぼえす。

其の措辭句を對せむとする形蹟表れて稍繁冗なる弊を免れず。されども斯の如



く漢語國語を併用せるは未だ曾てあらざるところ、こは物語文の上にはまさしく一生面を開きたるものといふべし。

『義經記』と『曾我物語』とは前二者に比すれば其の結構著るく勝りたるのみならず其の作の性質さへも大に異なるものあり。否啻に前二者に異なるのみならず前代の諸作とも異なるどころあり。從來の諸作は専ら篇中の人物を假設しひたすら想像を以て作の全体を構成したるものなりしが此の『義經記』と『曾我物語』とは全く然らず篇中の人物は勿論一篇の骨子を概ね歴史上の事實に採り之に血肉と服裝とを加へ潤色して構成したるものなり。故に短簡に云へば彼等は世話小説にして是等は歴史小説なるの差異あるなり。これまた當代の人情浮華を厭ひ實際を尙びしより小説の骨子も全く假設に成るに比すれば歴史上の事實に據るの興味多きを認めて此處に出でたりと覺ゆ。

『義經記』は此の歴史小説の祖なるべし『曾我物語』に比すれば文章幾何か古雅なる風あり。源義朝都落ちに筆を起こして判官(義經)自害する迄の顛末を叙す。義朝の妾常盤の腹に三男あり末を牛若といふ九死の中に一生を助けられ鞍馬に入りて

其の弟子となり遮那王と號す。十六の時吉次といふ金あき人に従ひて奥州に下り途次名を改めて自ら九郎判官義經と名乗る。其の後舍兄頼朝伊豆に兵を擧ぐるに及びて初めて黄瀬河の陣に見參し其の一方の大將を承りて上洛し平氏を討ち木曾義仲を破り大勝を奏して鎌倉に歸る。此の時判官の心には其の勳功の莫大なれば少くとも己れは關西を支配するほどの任を得べしと思ひしが梶原景時の佞辯早くも頼朝を籠絡して兄弟の友義を破らしめしかば遂に見參だに協はずして腰越驛より京に歸るの止むべからざるに至る。かくて判官は堀川の第におはしけるが頼朝の差向けたる土佐坊が夜討に兄弟の中愈破れて判官は京を遁れ住吉大物の浦などにさすらひ吉野に入り幾程もなく北國路をたどりて奥州に下り秀衡に據る。さるに秀衡歿後其の子泰衡の謀叛に依りて事かなはず判官遂に自殺し泰衡また頼朝の爲に亡ぼさる。これを本書の梗概とす。されば本書の材料は全然正史の事實に典據したるものなること明瞭なり。義經の一生を考ふるに其の閱歷全く悲劇の素をなすものあり否ひと義經のみならず其の所従の士何れも皆悲惨の閱歷を有せざるはなし。是等悲惨なる閱歷は能く讀者の同情を



促すに足る。故に作者が其の材を義經の一代記に採りたるは從來の諸作が只管假設の事件を叙したるに比すれば當に一轉歩せりと謂ふべきなり。材に於て既に然り。其の材を鹽梅せる布陳の方法また見るべきものなきにあらず。例へば梶原景時の辯佐利口なる佐藤忠信の勇猛義烈なる若しくは貞操なる靜が愁傷忠勇なる秀衡が臨終等孰れも讀者を感動せさするに足るものあり。されども全体より云へば未だ描いて細微に入らざる觀あるは論なし。すなはち由來讀者の同情を買ふべき素材もいまだ充分之れを喚起すべき力を缺けり。按ずるにこれ個人の特性判明ならず破綻を起こすべき因縁顯然たらざるに由るべし。斯かる所以のもの作者の主意こゝにあらずして單に事を叙述するにあればなるべし。

『曾我物語』も事を叙するを主とする點については『義經記』と異なるどころなし。伊豆國の住人宇佐美宮藤次郎助經といふもの京に上りて小松内大臣重盛に奉公しける程叔父伊藤次郎助親のために世襲の莊園を押領せられたるを遺恨に思ひ密に其の郎等大見小藤太並に八幡三郎といふものに命じて助親を狙はしむ。一日二人の郎等助親等の狩せるを偵察し其の歸途を要し射て助親の子河津三郎助通

を殺す。助通に男子二人あり兄を一萬とて五歳弟を箱王とて三歳になりけるが父の死後母なる人の相模國の住人曾我大郎助信に嫁したるについて其の許に養育せらる。二子長ずるに及び兄は曾我十郎助成弟は曾我五郎時致と名を改む。不俱戴天の仇敵助經を撃たむとして千辛万苦の末源頼朝富士の裾野に狩せるに立ち交り夜陰に乗じて遂に素懷を果し兄は戦死し弟は捕はれて處刑せらる。其の後助成在世の砌に契を結びたる大磯の遊女虎といふ者悲歎に堪へずして尼となりて兄弟の菩提を吊ふ。これを此の物語に於ける趣向の大略とす。かゝれば是れ後世に所謂仇討小説の嚆矢なりともいふべし。前に云ふ如く此の物語も一篇の結構事件の面白きを主とするからに人物の性情見るべからずといへども曾我兄弟の性質稍判然たるものあるが如し。兄十郎は温厚沈着物の哀を知る風雅の心あり弟五郎は剛強一徹時に奔馬峻坂を下る樂あるを見る。例へば

湯坂峠にて十郎跡の方を順み曾我の朝またき烟もいまだ晴れやらぬ佐川古宇津高札寺の山の方を見やりては別かれし大磯宿の事思出でられければあれ見給へ時致あの烟の見ゆるこそ住みなれし所なれ唯今此の山越えなん後いつれの世に又見るべきと涙を流しければ五郎聞いて「殿は古里をも新里をも詠め給へ時致は親の敵より外は心



にかゝる事も候はず、弓矢取るものは餘り物を案すれば心細くなりて思ひ切られぬ習なり、京鎌倉の旅人の見んも耻かし、又下人の習ひなれば我等死なん後何人が語り出で、扱ても兄弟は命や惜かりけん、此の山にては泣き給ひし彼の峯にては歎き給ひしと思はれん事こそ耻かしけれ、馬引き駈けて通る。十郎申しけるは「和殿、助成も其の儀を知らぬにはあらず生あるもの古里を戀ふる事胡馬北風に嘶き越島南枝に葉かくさいふ間もあらずや」とて打過ぐる

十郎の此の性質は時に或は其の行をして優柔不斷ならしむる事あり。而して五郎の行爲は飽くまで果斷なり。

十郎申しけるは「侍共音するものもなし能きあひだに一步も遅れて今一度母をも見奉りて後猶も延びつゝくものなれば如何なる野山の奥へも引籠り閑に念佛申し自害をもせん」と云ひければ五郎聞いて「恐れ入つて候ふものかな、如何なればかやうに云ひひなき事を御計ひ候や、先づ御思召しても御覽候へ愛を遅れて何國までか延び候ふべきぞ」と云々

故に十郎は時としては又其の行ひに怯懦なるかと疑はるゝ事なきにあらず。されど其の逡巡躊躇するはひたすらに身命を惜むが爲めにあらず母を憶ひ弟を思ひさては汎く物の哀をおもふが故なり。

其の間も十郎思ひるは、扱ても安からぬものかな、年來の親の敵此の君共の思ふ所、日本

國の侍共の見聞くところもあれ、取つて引きよせ一刀刺すまゝに自害せばやと思ひければ又打返し心を静め、ましてしばし兄弟を云ひながら五郎は殊に契深し、兄弟敵を討つて死も角も一所にならんこそ夜も寝も甲斐なく、敷申し契りしに所々に伏せんこそ口惜しけれ、後世までも五郎に恨みられん事も餘儀なく如何に口をきくとも今二時三時の内ぞかしと機々思ひつゝけて盃を急がす。

こゝを以て十郎は事愈、決し一事の又願るものなきに至りては猛然として「萬事は皆したゝめぬしすましたり、いざや打つて入らん」の氣槩あり。五郎は剛強一徹のものなりと雖も理のあるところ義の命ずる邊能く相譲りて決して圭角を持つることなし。蓋し十郎の温厚沈着は五郎の剛強一徹の性質と相依り相賛けて事を成就するを得しめたるものゝ如し。而して兄弟の性質かくの如く異なりと雖も彼等の動作をして一致結合せしむる綱索は別に炳然たるものありて一貫す。曰はく「孝義の念。是れ素より此の物語ある以上はかくあるべき筈也。然るに只、惜むらくは此の物語元來事を叙するを以て主とせるが故に其の特性をして充分發動せしむるを得ざりしを。殊に全篇の結構甚だ不完全にして副主人公ともいふべき助經の行動に飽かぬふし多きは遺憾なり。是れを『義經記』に比較するに讀者



の同情を惹くこと寧ろ彼れは是れに勝るところあるべし。神明佛陀の靈驗を説くは二者相同じ。文章は是れと彼れとは太く異なる趣あるに拘はらず、則ち彼れは稍、古雅にして是れは多少通俗なるに拘はらず、さまで軒輊あるを見ず。若しこれ此の物語に東國武士の言語を關東訛りに物したるは能く此の篇に適したるものなるべし。『義經記』は別に『判官物語』此世寫本にありて今といふものあるがそを増補潤色したるものなるべしといふ説あり如何にや。『曾我物語』には眞字本、異本、假名本の三種あり。通常世に流布せる假名本は眞字本と假字に譯して潤色敷衍したるもの、復に後世の作なること疑ふべくもあらず。

要するに當代の小説的物語は材料を歴史に採りたるもの、多少見るべきものありし外、古物語の體裁なるは全く衰微の極に達したるものといふべし。而して小説の材料を歴史の事實に採るに至りしは斯界の境域を擴めたる者、一進歩とも謂ふべきならむ。此の外また此の時代の始に専ら上流の間に繪卷物といふもの行はれしが其の詞書は古物語の一變せし者なるべし。今傳はれる者に『小柴垣草子』『地獄草子』の類あり。是等は後世の草、双子の起源をなすものならめども此の頃は

繪畫を主として其の趣向は甚だ簡短に文章はた零碎なるものなれば、未だ文學書として見るべきものにあらじ。

消息文は物語に見えたるを然らざるを問はず概しては次第に文學的趣味を減少せる風あり。されども猶ほ當代に於ける感情文致の一大變革はこゝにも多少認むべきものなきにあらず。此の中漢文の消息は平安朝に於いて既に邦語ながらの文脈を混交して稍、不醇の文格となりしが當期に入りては殊に日記記録の文脈が破格の漢文となりしが如く全く一種異様なる和漢混交の文脈を成すに至れり。而して是等漢文の消息は率ね公事儀禮のをりに用ゐられたること平安朝に於けるが如し。予輩はこゝに藤原攝政良經(一八〇八—一八六六)のものせる『新十二月往來』より一章を抄録して其の異様なる文例を示さむとす。

兩種、悦以給候畢。未見來候之處、今思食寄給之條、御志之至不可中盤候。委細之旨期見參之次候。謹言。

五月四日

右衛門少志

其の文脈全く漢文ならず又國文ならず兩者を混用して破格極まる漢文の體裁を



成すものなり。是れ漢學の攻究衰微して其の弊を襲用せる結果のこゝに至れるものか。後世の候文はちもふに其の濫觴を是等の文體に歸すべし。當代の消息文を集録せるもの此の『新十二月往來』の外其の前に猶ほ中山内府忠親の著せる『貴嶺問答』作者未詳の『十二月往來』あり、其の後に僧玄惠二〇一〇の著せる『庭訓往來』『遊學往來』『喫茶往來及び僧虎關一九三八—二〇〇六の録せる『異制庭訓往來』等あり。是等は孰れも當代に於ける和漢混交體消息文の模範として世を指導するところありたり。就中『庭訓往來』は太く當時に珍重せられたるのみならず永く後世にまで行はれたり。

こゝにまた假名の消息文にも少からぬ變革進歩ありしことは一般の假名文の變遷ありしに徴しても知るべし。すなはち假名の消息文は其の用語文體前期の比して著るく異なる點あるを見る。例へば『定家卿消息』一名『毎月鈔』に

毎月の御百首能々拜見せしめ候ゆ。凡此度の御歌まことに有難う見申候へば年來を  
るかなる心に忝き仰のいなみかたさばかりをかへりみ候きて僅に先人申おき候し庭  
訓のかたはしを申候き。定て後世の笑はれ草もしげりぞ候らむなれども(中略)左道の

事どもあるし付候。相構て不可及外見候。大休愚者が年來の修理の道たりこの條々  
の外はまたく他の用意なく候。随分心座を壊さす書つけ侍り必ずこの道の眼目と覺  
召て御覽せられ候べく候。あながしこゝ

とあるに就いて檢するも漢語を挿み漢文の格法を混用し送假名を省略せるのみならず從來の假名文には侍りといひしを候といふなど全く珍らかなる文體にて今日の候文の素は亦其の一分をこゝに成せりといふも謬言にあらず。按ずるに今日の候文、文體の消息文は當時の和漢混交體のど此の假名文體のど結合調和して一跡と成れりしものなるべし。阿佛尼のものせる『乳母の文』一名『庭のをしへ』は之と稍、其の文體を異にして優美に古風を帯びたるものなり。

なにはのここのよしあしなも、おぼしめしわき候はんまでは、うきなもまのびすぐして  
御身をさらぬまもりにごこそ思ひまぬらせ候つるになのび世々にも成りぬべく候事  
の、さやは契しき、おきふしなげかれ候に御ふみ見候へば、いさめしものさ、見えさふらふ  
こそ、あはれにおほえ候へ(中略)。わるき心は進み近づきたがるものにて候を、我心な  
がらも、常にさんげして、心をなしへ行候へば、まだいに立て直さるゝものにて候。我心  
のまゝに振舞候はんには、いたづらごにて候。かゝるごはりさはありて人毎に迷  
ふごにて候。よく、御心え候て御れ、うげん下され候。あながしこゝ



されど漢語及び俗語を交へたる若しくは侍りを候となせりしなどまた時勢の傾向につれば他の假名文と共に同様の變遷ありしを知る。而も之を『定家卿消息』に比較すれば一層今日の女子用文に接邇せるものなり。故に予輩は平安朝に見えたる假名文の消息文は此の時代より早くも二途の發達を爲し一は和漢混交體と共に後世の男子用文、素となり一は専ら今日の女子用文、方向を採りたりと云はむとす。『乳母の文』に就いては猶ほ後に日記及び紀行の文を論ずる條下に於て阿佛尼の性行を記述するに當りて説くことあるべし。

### 第三節 隨筆

鴨長明 其の閱歷性行及び著作 『方丈記』 『佛敎思想』

並びに厭世的觀念 『發心集』と『撰集抄』と 『沙石集』

平安朝に『枕草子』といふもの出でし後隨筆と呼ばれるべきもの久しく跡を絶ちたり。此の期に入りても純粹に隨筆といはるべきもの絶えてあることなし。『方丈記』

『無名抄』の如きは只多少の類似を以て此の條下に攝すべきものなるべし。『發心集』と『撰集抄』とは後の『沙石集』と共に其の結構布陳に多少の順序あれば隨筆の下に攝せむは稍附會の嫌ありと雖もさまで異目を立つべき程のものならねば評論の便宜を謀りて同じくこゝに掲げむとす。かの『古今著聞集』『十訓抄』『宇治拾遺物語』等の書も亦隨筆めける點なきにあらねども是等はむしろ歴史の參考になりぬべきものあれば其の條に載すべし。さて此の隨筆の條下に攝すべき著作を以て上の如く定むればこゝに其の作者として記載すべきは只鴨長明、西行法師並びに無住法師の三人あるのみ。

鴨長明は俗稱を菊太夫といひ山城國愛宕郡加茂の社の祠官の子なり。或は近衛天皇の久壽元年(一八一四)に生まれて順徳天皇の建保四年六月八日に六十三歳の齡にて逝りきといひ或は後白河天皇の保元の頃より順徳天皇の御世に至るまでの人なりきと云へれど正確なる年月は知るに由なし。されども長明は後白河二條、六條、高倉、安德、後鳥羽、土御門、順徳など申し奉る御世を経て源平の盛衰を目撃せる人なるは明瞭なる事實なり。幼時は父方の祖母の家に養はれ生長して宮中に



奉仕し二條天皇の應保元年には従五位下に叙せられしが其の後源平の亂烈しくて又仕ふるを得ざりしかば加茂の社に仕へて氏人となれり。然るに長明は父祖の業を紹きて社司たらむ志あり安元治承の頃素願を果さむとして公に請ひしも其の事叶はざりしかば爾來居常鬱々として樂まず終日門を杜ぢ客を謝して味氣なき星霜を送りぬ。長明嘗て和歌の道を源俊賴及び俊惠法師に學びて得るところあり兼ねて絲竹管絃の秘曲をさへ極めしかば御鳥羽上皇常に其の才學を愛したり。故に上皇の土御門天皇の御世建仁元年和歌所を宮中に設けらるゝや長明をも其の寄人の官に擧げ給ひき。されども長明の意は元來此處にあらねば久しく留まるを欲せず幾程もなく遂に辭して名を蓮胤と改め落髮して大原山に隠れぬ。上皇痛く之を惜しみ給ひて今一度擧げて寄人の職に補せむとの院宣ありしも更に應せず是れより世上のいどなみを厭うて深く唯識止觀の旨を喜ひ老莊の道を究め只管閑寂に處りて性を養ひ心に任せて諸の勝地を探りつ。建永承元の頃更に幽居を日野の奥なる外山に移し其の處に環堵の室を結びたりき。其の著『方丈記』に當時の住居の様を記するを見るに

其の家の有様世の常ならず廣きは僅に方丈高きは七尺が内なり。處を思ひ定めざるが故に地を占めて作らず土居を組み打ちおほひを弄きてツギ綴目毎にかけがれを掛けたり。「若し心に協はぬこそあらは易く外に移さんが爲なり。其の改めつくる時幾何の煩ひがある。積むところ僅に二幅あり。車の力を報ゆる外は更に用途いらす

とあり其の世上のいどなみに遠ざかりしを察すべし。平素藏するところのものには佛像の外唯歌集管絃『往生要集』に箏琵琶各一張ありしのみ。建曆元年源將軍實朝の招きに應じて鎌倉に下り將軍のために歌道を談ずること數度に及びぬ。かくて再び外山の里に歸り來ては念世の状態を憤慨して復出せず専ら泉石の間に餘生を送りたり。

其の著作に『方丈記』『四季物語』『發心集』『無名抄』等最も其の名後世に著はる。『登玉集』『文字鏡』また長明の撰録するところなり。

『方丈記』は卷末に自記せる如く長明が鎌倉より京に歸りたる翌年建曆二年三月外山の草庵において誌せるものなり。まづ其の發端に流水泡沫の比喻を設けて諸行無常の理を説き進みて安元の大火治承の辻風養和の饑饉元暦の地震等年來の



事變を掲げ終に著者が人生に對する感想を叙べたり。之を閱するに著者が觀念の之に依りて知了せらるゝのみならず併せて當代に於ける思想界の或一部を代表するものあるを覺ゆ。彼れすなはち人生の無常なることさながら泡沫に似たる所以と年來見聞せる世上の事變とを説き更に進みて曰へらく

すべて世のありにくきこと我が身と住家どのはかなくあだなるさまかくの如し。いはんや所により身の程に従ひて心をなやますこと、擧げてかぞふべからず。もし、あつから身かなはずして權門のかたはらに居るものはふかくよろこぶ事はあれども、大にたのしむにあたはず、歎ある時も聲をあげて泣くことなし、進退やすからず、立居につけておそれおのゝくさま、たとへば雀の鷹の巢に近づけるが如し。もし、貧くして富みたる家となり居るものは朝夕すほき姿を耻ぢてへつらひつゝ、出で入る、妻子僮僕の羨めるさまを見るにも、富める家の人のないがしろなるけしきを聞くにも、心念々にうごきて時として安からず。もし、せばき地に居れば、近く炎上する時其の害をのがるゝことなし。もし、邊地にあれば、往反わづらひおほく盜賊の難はなれがたし。

いきほひあるものは、貪欲ふかく、ひとり身なるものは、人にかろしめらる。實あればおそれ多く、まづしければなげき切なり。人をたのめば、身他のやつことなり、人をほごくめば、心、恩愛につかはる。世に従へば身くるし、又、またがはねば狂へるに似たり。いづれの處をまめ、いかなるわざをしてか、まばしも此の身を宿し、たまゆらも心を慰むべき

と。是に於いて彼れは世を遁れ、獨り山林に交はるをもて處世の法を得たるものとなしぬ。曰はく、もし、念佛ものうく讀經まめならざる時は、みづからやすみ、みづからをこたるに妨ぐる人もなく、また耻づべき友もなし。殊更に無言をせざれども、獨り居れば口業をさめつべし、かならず禁戒を守るとしもなければ、も境界なければ何につけてかやぶらん。山中の景色はをりにつけて盡くることなし。いはんや、ふかく思ひ深かく知られん人のためには是にしも限るべからず。一期のたのしびはうたゝねの枕の上にきはまり、生涯の望はをりくゝの美景に残れり。と而して彼が、五十の春を迎へて家を出で世を背けりしも、其の理由全くこゝにあり。彼れ云へらく、大方世を遁れ身を捨てしより恨もなく、恐もなしと。之を要するに



彼れば人生を以て無常なるものとなし厭惡すべきものとなし而して此の濁惡無常の世に處して心身を勞するは無益の業なり須らく人烟稀なる山林に隱遁忌避して自然の行動を樂むに若かずとなすものなり。換言すれば現世は只逆旅の如きものなれば宜しく無爲恬淡にして終はるべし吾人の希望は一に佛果を得るにあり吾人の満足は獨り彼岸に達する時にありとなすものなり。故に彼れの觀念は現世に對しては一の希望なく満足なしとするもの全く厭世的なり。彼れが此の觀念の由來は蓋し佛教と道教との二者に歸す。人生を以て畢竟空なるものと觀じ現身を以て諸種の罪業の根源となす是れ佛者の常に唱道するところ藜茹布衾以て世に處すべしとするはた然り。されば彼れが草の庵を愛するも科とす閑寂に着するも障りなるべしいかゞ用なき樂をのべて空しくあたら時を過ぐさんと叙したるは佛教に所謂一切盡捨の旨意にしてまた彼れが遁世の極意を表白せるものと謂ふべし。

それ長明の言ふところ期するところ此の如し而して是れを彼れの實行に徴するに略相合ふものありしが如し。雲烟交はる外山のほとり方丈の草庵に起臥して

悠然として閑居の妙味を會せしが如きは眞に天地の間名利の外に彷彿として名利よりも一層高尚なるものあるを認識したるに似たり。すなはち一道の光明は常に髣髴として彼れの心眼に映じ以て彼をして名利の念を忘却せしむるところありしに似たり。されども彼れが此の怡樂の靈域に逍遙するを得たるは單に山林の閑居に於ける時にあるのみ都に出でゝは乞食となるをだに耻づといへり。彼れみづからは草の庵を愛するも科とす閑寂に着するも障りなるべしといふと雖も其の實行は未だ此の境に到らず尙ほ山林の獨居を以て諸縁を閑却する良好無二の適地と爲せりしものたり。彼れが一切の行爲の常に消極的に出でたるも此の故にこそ。山林の獨居を以て諸縁を閑却遺忘する無二の適地となすは全く名利を超脱すること能はざるもの物我の差別に彷徨するものいまだ所謂悟道徹底せざるものと謂ふべきなり。是に於いてか予輩は思ふ長明は物我無差別の靈域を認めて彼處に到るべきを知りながらいまだ到ると能はざりしものなるを。想ふに長明は人生の空なる所以を佛教の旨意と老莊の所説とに據りかねておのれが閱歷に驗して知りぬ。然りかのれが閱歷の不如意なるに驗して知りぬ。故を



以て彼れの説くところは人生の源始に溯りて其の成立を拒非厭忌するよりも當世の濁惡澆季を難ずるかた勝れり。『方丈記』の一篇其の記事叙説多端にして或は人性の空なるを説き或は當世の澆季を歎じ或は處世の困難を叙し或は閑居の妙味を示す等さまざまなりと雖ども讀み來れば予輩は終に筆者が人世の名利を棄てむとしていまだ棄てやらす一進一退頗る苦慮煩悶する状あるを見ずばあらざるなり。

かく長明は常に苦慮煩悶する状ありしが故に其が『方丈記』の文は熱涙の筆端に迸出する概あり。彼の章句を修飾するところ行文稍繁冗に失する嫌はあるも尙ほ何處もなく其の情熱を露出する趣なくばあらず。而して其の章句の大方佛書若しくは漢唐の文に典據すると多きは猶ほ其の所説の彼等に據るところ多きが如し。中には往々『白氏文集』『文選』さては『維摩經』等の文字を其のまゝ轉載するところあるを見る。

『四季物語』は其の隨筆たる體裁『方丈記』に似たりといへども其の記するところは全く彼れと異なれり。此は正月より十二月に至れる四季をりくくの公事節物の

やうを記載したるもの其の文章また見るべきあり。『無名抄』はた隨筆の體なれど此れは主として和歌に關する記事論説小話を載す。本篇にもしばしば引用するところありしが歴代歌集を概評するなど頗る斯道に有益なること多し。彼れが歌學上に於ける識見と技倆とは是れによりて窺知するを得べし。

『發心集』は其の題名の既に表明する如く諸宗の僧俗が發心せる因緣由來を録して佛縁を希ふ媒助とするものなり。すなはち賢を見ては及びかたくとも希ふ縁とし愚なるを見ては自ら改むる媒とせんといへるが如し。かるが故に其の書中の事實は『方丈記』とは全く異なりて僧俗の發心せる因緣由來をも見聞せるまゝに記載せる者なりと雖も全篇に涉れる感想は毫も彼の記と異なるなく一に現世をはかなむ佛教的觀念に外ならず。多武峯増賀上人遁世往生の事と題する條に附記して

此の人のふるまひ世の末には物くるひども云ひつべけれども境界離れんため  
の思ひばかりなれば其につけても有りがたきためしに云置けり。人に交  
るならひ高に隨ひ下れるを哀むに付けても身は他人の物となり心は恩愛の



ためにつかはる。是此世の苦のみに非ず出離の大なるさはりなり。境界を  
離れんより外には如何にしてか亂れやすき心を去づめむ

といへる其の他「資財を恐厭すべし」といひ「百千年あらんために材木をえらび檜皮  
葺瓦を玉かゝみとみがき立てんも何のせんかある」といへるなど孰れも「方丈記」を  
通じて彼れが列叙せし感想に過ぎず。其の文章の雄健真率なるは實に「方丈記」に  
優るべし。

此の『發心集』と其の類を同じうせるを西行法師の『撰集抄』とす。其の序文に此の  
書を撰集せる所以を陳じて曰はく

生死の長き眠いまだ醒やらで夢にのみほだされつゝ水の面の月を實さおもひ鏡の内  
の影をげにさふかく思入てあけくれば只妄念の心のみうちついできて生死の船をよそ  
へずして居所の羊の歩は我身の外にもてはなれ鳥部船岡のけふりをよそに見て過に  
し方四十餘年の霜を頂き行末しらす今日しもやあるらむしかれば同夢のうちの遊に  
も新舊の賢跡を撰求けるとの業を書集め撰集抄と名付て座の右に置て一筋に知識に  
頼まんさなり卷は九品の淨土に思宛十に一をもらし事は八十隨好思ひよそへて百に  
廿を残せり抑凡夫の習明眠しぬて眞明を見す心老て斷妄の利劍おこたらざる物なり  
されば偏に冥助を仰き奉んか爲に卷毎に神明の御事をしるし載せ奉り侍り

と。かゝれば此の書の撰集せられたる主意全く長明の『發心集』と異なるなきなり。  
次ぎに掲ぐるは「花村院永玄僧正の事」と題する條なり咀嚼して其の感想文致の如  
何を想察すべきなり。

凡人の習世を背くまでも骨をばうづむとも名をば埋むまじと思ふめる。殊  
に(此の僧正の)よしなき色に耽りて寺を離るよしのいつはりをのべられけん  
心中思ひやられてわくかたなく哀に侍り。止觀の文かよ實を隠し狂を顯  
せと侍るは是ならんと思えて侍る。まかれはもろこしにも此の國にもげに  
げにしく世を遁るゝ人は皆箇様に侍るとかや。げに人には拙きものと思ひ  
くだされて心一に思ひすまして侍らんはいみじくすみ渡りてぞ侍るべき。  
さて又あちこちさそらへゆかんに心にかなはぬどこそあらば思ひはなるゝ  
ぞかしなんどすゝろに床敷侍り。世をすつとならばかくこそあらまほしく  
て身のちからもいたくつかれ侍らざりし頃廣く國々を経まはりてやん事な  
き寺々面白き所々徘徊し侍りしが指當りて身の愛も忘れ侍しかばかくて  
一期を過したらんも罪深からじと思侍き。况や發心堅固にして心もかして



くさざりあらん人のなじかは心もすまで侍べき。越の白山雪積りて老曾の森のはつきい風になびきやすく佐野の野原のほやのすつきそよめきて同心の末葉の露は風に亂てしどろなる有様木曾のかけ橋佐野の舟橋など見侍りしに心もといまるべき程なり。逢坂の關のせき守とめかねし秋こし山のくずもみぢ見過しがたく濱千鳥の跡ふみつくるなるみがた富士の山邊は時あらぬかのこまだらの雪のこり浮鳥が原清見が關大磯小磯の浦々は過がたく侍るぞや

長明と西行とは殆ど同時代に生存せし人にて一人は山林に隱遁し一人は江湖に放浪せしものなりと雖も人世の無常を見て俗塵に着するを欲せざる心根共に同じかりしかば其の著作の偶相似たる奇なるが如くにして而も當然なり。此の二人は按ずるに當代の人々が懷抱せる感想を最も能く發表せるものとす。其の後無住法師の『沙石集』といふもの亦世に出でたりしが其の體裁は九前の二書に同じ無住法師は梶原景景の姪なりといへれど其の實名及び閱歷等分明ならず。『沙石集』は弘安二年夏稿を起こして同六年中秋に至りて完成せるものなりといふ。其

の序にいふどころ次の如し。

夫鷹言歌詠みな第一義に歸し治生産業しかしなげら實相にそむかず然ば狂言綺語のあだなる戯を縁として佛乘の妙なる道に入れ世間淺近の賤き事を譬として勝義の深き理を知しめんと思。是故に老の眼をさまし徒なる手すさみに見し事聞し事思出るに隨て難波江のよしあしなもえらばす藻蘆草手にまかせてかきあつめ侍り。かゝる老法師は無常の念々におかす事を覺り冥途の歩々にちかづく事を驚て黄泉の遠き路の概をつみ苦海の深き流れの船をよそふべきに徒なる與言をあつめ虚き世事を注す。時にあたつては光陰をなします後におよびては賢哲をばさす由なきに似たれども愚なる人の佛法の大なる益をもささらず和光の深き心をもしらす賢愚のしなこなるをもわきまへなく因果の理さだまれるをも信ぜぬために或は經論の明なる文を引或は先賢の殘せる誠をのす。夫道に入る方便一つにあらず悟をひらく因縁これ多し。其大なる意知れば諸教義こさならず修すれば萬行の旨みな同き者をや。是故に雜談の次に教門をひき戲論の中に解行を示す。此を見人拙き語をあさむかすして法儀をささりうかれたる事をたゞさすして因果をわきまへ生死の郷をいづる媒とし涅槃の都にいたるしるべきせよさなり。是則愚老が志耳。彼金を求者は沙をあつめてこれをさき玉を翫ぶ類は石をひろひて是を盛く仍て沙石集と名く。卷は十にみち事は百におまれり。于時弘安第二之曆三伏之夏之天集之。林下貧士無住。

此の書編纂の主意かくの如し、其の體裁大方前二書に類似せるは勿論なりと雖も



予輩は此の集を前二書に比較して其の文章といひ其の内容といひ共に趣からぬ差異あるを見る。すなはち其の文章は前二書の流暢真率にして妙味多きに似ずして無味繁冗に其の内容は剩へ奇怪不可思議の事實を含むこと少からず。例へば『藥師利益事』とて説くを見れば

常陸國中郡と云所に草堂有藥師如來を安置す。其の堂ちかき家に十二三ばかりなる小童有けり。わるき病をして息絶にけり。近き野へすてつ。一兩日鳥獸もくはず。此の藥師童子を負て家へ具して御坐すと思てよみかへりけり。藥師をば地頭家鎌倉へ迎奉て堂造りなんどしてわがめ奉り彼の童子は既に法師に成て承仕して侍となん。當時の事なり。未代なればとて感應むなしき事は不可有。文永の頃にや一説に彌陀と云り。尾張の國熱田社頭に若き下手男今年十一月十五日俄に兩目共に盲てけり。心うく覺ければ神宮寺に參籠して藥師如來に祈念す。次の年三月十五日の夜夢に一人の僧來て汝ちきて目あけよと被仰ければ目は盲て候と申せばたゞみあげよと仰らるゝと思て見あげんとする程にやがて開てけり。盲目に成て主人追すてた

りけるを目あきて後又つかはんとしけるを僻事なりければ社司きゝてゆるしてけり。まのあたり見たる人の説なり。文永年中の事。

とあるが如き、單に佛の奇怪不可思議なる功力を叙べて衆生を歸依せしめむとするもの、前二書の主として僧俗の發心せる由來を録したるとは差異あり。彼等に載するところは一面道理を以て律すべきものありしに是れは道理を絶して多少怪力を語る傾向見えたり。彼等は猶ほ衆生を開發して佛に導かむとし是れは凡庸を驅りて彼の教に盲從せしめむとす。學者須らく他力易行、安國中道など通俗的諸宗派の當時代に起こりし順序次第に參照して是等同種類の書にあのづからかゝる差異の生ぜし所以を察すべき也。

#### 第四節 雜史

雜史の變遷

擬古體雜史

軍記物語の流行

『保元』『平治』『平家』等の物語並びに『源平盛衰記』

平安朝に於いて雜史と名づくるものに既に『大鏡』『榮花物語』等の數種ありて孰れも小説的物語の體裁に倣ひ史的事實に多少の紛飾を施して讀者の嗜好に投ぜし



ことありしは學者の夙に知悉するところなるべし。此の期に至りては當時の人心一層浮華を厭ひしかば架空の小説衰微せしに反して此の種の雜史更に多く世に出でたり。殊に源平二氏の合戦以後は人々皆文弱を排し只管勇武を事とせしかば事實も勇ましく文勢も強健なる軍記物語世上に持斷さるゝこととなりき。雜史の目的は由來讀者の興味を促がすを主とせしものなれば真正の史的事實には稍遠ざかり中には黑白を轉倒せるさへ尠からぬは勿論なるが猶ほ當時の嗜好を促すに重きを措きしかば是れによりて當代の感想は充分察知するを得べし。彼の荒唐無稽なる譬喩怪談さへ時にとりては當代を映寫せること云ふまでもなからむ。况や事件を叙説せるかたはらには佛教若しくは儒學の準繩をもて評定批判する文の往々散見するをや。予輩は此の故に是等雜史を以て當期文學の最要なるものと信ず。而して是等雜史の中軍記物語の或者は之を琵琶に合はして聽衆の前に語りきともいへれば當時如何ばかり此の物語類が世人の嗜好に投ぜしかば殊更に喋々するを須るざるなり。こゝに軍記物語と名づくるは『保元物語』『平治物語』『平家物語』『源平盛衰記』等をい

ふなり。是等は孰れも多少の事實に根據して潤色演義せしものなれば或程度までは史として見るを得べきこと云ふを要せず就中武具兵器を寫せるあたりは以て當時の状態を窺ふべき須要なる好資料なりとも謂ひつべきなり。さてまた『古今著聞集』と『十訓抄』とは其の体裁より云へば一は隨筆めき一は教訓めけるところあれど是等はた當代の人情風俗等を知るべきもの歴史の資料とならむこと勿論なるべし。

是等の文章は前期の雜史體のに比すれば進歩の跡頗る著明なり。語勢遒勁にして變化自在なるに加へて章句簡潔行文快暢優に和漢雅俗の言語に梵語をまで調和したる前古其の比を見ず。其の文詞かく豊富なるからに或は莊重急激或は細緻哀切漢文の語勢をとり國語の脈を追ひ波瀾頓挫奔放自在の趣あれば讀誦の間歴然としておのづから聲をきし色を見る心地す。若しそれ軍記文に一種の聲調具はりて普通の散文と稍異なるところあるが如きは是等獨得の風格として標致すべきものか。之を要するに鎌倉時代に於ける文章の精粹は蓋し是等の上に集まるとやいはまじし。



當代の軍記物語には上に挙げたる如く四種ありしものから『保元』『平治』の兩物語は自餘の物語の模範となりける趣あり。故に予輩もこゝに是等軍記物語を論評するに當りてはとりわきて其の模範たる『保元』『平治』の兩物語に就きて稍、精細なる研究を爲さむと欲す。『保元』『平治』共は其の作者詳かならず或はいふ葉室大納言時長の作なりと。但し『保元物語』には二説あり醍醐報恩院所藏の舊記には葉室時長の作といひ、大外記中原師香が手書して其の物語奉れる狀には故師梁が鈔せし者なりといへる是れ也。今日孰れを是と定めむに由なけれども舊説は『平治物語』と共に此の物語を葉室時長の作とするを以て其の眞に近きものとせるが如し。時長、姓は藤原氏、中納言顯時の孫にして修理大夫時光の子なり。其の閱歴詳かならずと雖も伯父出羽守盛方の母は刑部卿平忠盛の女にして大納言時忠の室と建春門院の女房帥とは彼れが伯母なりきといへれば保元平治の事蹟は幼時より委しく彼れの耳に馴れて是等の物語を著作する遠因となりしなるへし。兩物語共に異本數種ありて章段の順序、字句の次第等同じからず。是れ後世普く流布する際誤寫謬傳したりしものか、其の體裁の異なるによりて畢竟一人の手にならぬもの

とせる説あれども予輩は探らず。其の記事大方現實の事態を叙せしものから著作の主意一面は娛樂に供せむとするにありしが故に文章に多少の修飾添はりて幾分か小説めきたるところあるや論なし。

『保元物語』に載せし事實は保元年間に於ける兵亂の顛末にして『平治物語』に記せし事件は平治年間に起こりし騷擾の首尾なり。『保元物語』が鳥羽法皇の薨去に筆をつけて保元の亂の顛末を叙し、『平治物語』が信西と信賴との不和に稿を起こして平治の騷擾の首尾を寫すところ、事件相連続し筆また相似たるが故に二書題名を異にして而も壹部の正續なるかの觀あり。さて『保元物語』一痛の主人公とも云ふべきは藤原賴長と源爲義とにして、『平治物語』は藤原信賴と源義朝と篇中の主人公たるが如し。保元に鎮西八郎爲朝を精叙せしと同じく『平治』には源賴朝の事に力を盡くしたりと見ゆ。其の外『保元』に於いて賴長に對するに爲朝の謀計を以てせしは『平治』にありて信賴にむかひて義平の策略を以てせしにも似たり。篇中に於ける重要な人物に勇怯剛愎善惡正邪等の性情の幾分か各自に顯はれたる、二書共に異同あるなく孰れも事件を叙するを主とするに拘はらず、多少活動する趣見



ゆめり。例へば一個の勇士馬を敵陣間近く押寄せて

かく申すは桓武天皇十代の御末刑部卿忠盛が孫安藝守清盛が次男安藝判官基盛生年十七歳とぞ名乗りたる。大将とおぼしき者禰の直垂に藍自地を黄に返したる鎧着て、黒羽の矢負ひ鎧籠藤の弓を持ち、黄河原毛なる馬に、具鞍置きて乗りたりけるが進み出て、身不肖に候へども、形カタの如く系圖なきにしも候はず。清和天皇九代の御末六孫王七代の末孫孫津守頼光、舍第六和守頼信の四代の後胤中務丞頼治が孫、下野権守親弘が子に、宇野七郎源親治とて大和國守郡に住して、いまだ武勇の名を落さず

と應へたる、さなから血統の貴賤を以て榮辱とせし當代勇士の状貌を窺ふべし。

『保元物語』に爲義降参の事を叙したるは殊に作者意を注ぎたりと覺しくて哀絶の光景ミナトのあたりアトに髣髴シたり。

義法房爲義受戒しての名子供に向ひて宣ひけるは、我が身が合期したらばこそ各引具して山林にも立隠れめ。我れは只、義朝をたのみて都へ出でんと思ふなり。さても今度の勳功に申し替へても命ばかりは助けこそせんずらめ、但し恣に院方の大將軍承りたれば、勅命重くして助かりがたからんか、それ又力なき事なり。齡既に七旬に及び惜しむべき身にあらざ。万一甲斐なき命助かりた

らば如何にもして汝等をも助くべし、面々は先づ如何ならん木の陰、岩の間に隠れ居て事鎮らん程を待つべしと宣へば爲朝聞きもあへず、此の儀然るべからず候、縦令下野守殿こそ親子の間なれば助け申さんとし給ふとも天氣よも御免候はじ。其の故は新院は正しく主上の御兄にて渡らせ給はずや左府亦關白殿の御弟ぞかし豈に親とて罪科なからんや義朝いかに申さるゝとも立ちがたくこそ覺え侍れ。御所勞なほりおはしまさば只何ともして關東に赴き今度の合戦に上り合はぬ三浦介義明、山莊司重能、小山田別當有重等を相語らひて東八箇國を管領して誓しもおはしますべし。若し京都より討手下らば爲朝一方承りて思ふまゝに合戦して叶はずば其時打死すべし、などか誓く支へざらんと申しければ、それも東國へ下りつきての事ぞかし、落人となりぬれば何事も思ふに叶はぬものなれば降参せんと宣ひて既に山より出で給へば子供泣くく供しつゝ、西坂本下松サカノを下りしかば篠目シノメ漸く明け行きて鳥の聲々告げわたり、峯の横雲晴れば入道、疾々何方へも落行くべしと宣ひて都の方へ赴き給ふを誓く御待ち候へ申すべき事候ふと聲々に申せば、何



事にやどて立歸り給へば前後左右に立圍みて泣くより外の事ぞなき。誠に只今をがざりにて又逢ふべき事ならねば餘波を惜しむも理なり。入道今度老の頭に兜を戴きて合戦を致す事全く我身の榮花を期するにあらざり若し打勝ちて運を開かば汝等を世にあらせんと思ふためなり。今義朝を頼みて出づるも我若し安穩ならば其の蔭にて各をも助けばやと思ふ故なり。汝等を捨て、我れ一人助からんとや思ふらん。齡既に致仕に餘れば身の後榮何をか期せん如何ならん處にも深く隠れて待つべし。疾々として下られけるが、かくで心強くは宣ひしかどもさすが餘波や惜しかりけん又立歸りて頼賢よ頼仲よいふべき事あり歸れと宣へば各呼ばれて立ちかへる。誠に異なる事なけれどもあかぬわかれの悲しさに又呼び下し給ひける恩愛の程こそ哀れなれ。如此互に別を慕へどもさてあるべきにあらざれば面々は散々にこそ別かれ行く。落つる涙に道昏れて行先更に冥々たり。悲しきかな人界に生を受けながら鳥にあらねども四鳥のわかれを致し、あはれなるかな廣劫の契り空しくして魚にはなけれども釣魚のうらみを含む。涙欄干として魂飛揚

すと見えて哀れなりし有様なり。

筆端人情の熹微に觸れて讀むもの爲に泣かんとす。同「物語」の「新院御出家の事」左府薨逝並大相國忠實御歎の事爲義最後の事「義朝幼少の弟悉く誅せらるゝ事」爲義の北の方入水の事さては「平治物語」に「義朝敗北の事」義朝野間下向並忠致心替の事「頼朝生捕らる附常盤落つる事」と題する條など皆又一様に細叙したる筆法轉讀者の同情を買ふに足る。和漢の先蹤古聖人の言行を引用して書中の人物事件を評論するところはた能く當を得るもの多きを見る。「保元物語」に其の兵亂の源を論じて

脱履を既に申すうへは古き履の足に懸りて捨てまほしきを捨つる如くに思しめすへきに結句新帝に譲り給ひて後また重祚の御望あり、それ叶はれば院中にて御政務ある事都て道理にも背き王者の法にも違へり。かやうに朝儀廢るれば斯かる亂も出で來るなり。都て今度の合戦は前代未聞と申すにや主上皇御連枝なり、關白左府も御兄弟、武士の大將爲義義朝父子なり。此の兵亂の源も只故院后の御勸に依りて不義の御受禪共ありし故なり。

とらひん



史記には牝鷄朝する時は其の里必ず亡ぶといへり。牝鷄の時を作るは處の怪異にて其の郷亡ぶる如く婦人政をいらふ事あれば國亂るといへり。然るを鳥羽院美福門院の御計ひに任せて御恙もましまさぬ新院を押し下だし進らせて近衛院を御位に即け奉り嫡孫を擲きて第四宮當今御受禪ありし故に此亂出來せり。嫡々を擲きおはしきすは故院の御誤りにや。然れども天津日嗣は掛けまくも忝く天照太神より始めて今に絶えざる御事なれば昔より此の御望ありし君一人も御本望を送げられたることなし。されども御計ひ違ふ故にや是れより世亂れそめて公家忽に衰へ朝儀愈廢れたり。洛中の兵亂は是れを始と申すなり。

といひぬ。論意明晰一篇の史論として見むも其の價值少からずと覺ゆ。抑、こゝに掲げたるは『保元物語』の一節なりと雖も『平治物語』に於けるも亦然り。若しそれ人意をもて測度しがたきに逢ひて忽ち不可思議なる神佛の功德を説き現世の盛衰を見て過去の業報に歸するが如き宗教的信念の全篇に一貫したるは前に當代の他の作者について説明したるに同じと知るべきなり。

文章は二書共に質樸にして稍、古雅の風具はること前に掲げたるにても既に明らかなるべし。然れども此の二書の評論を終了するに當たりて猶ほ特に記載すべき事あり。すなはち其は後世に所謂道行ぶりと唱ふる一節の是等の物語に早く

見えたる事はれなり。『保元物語』に曰はく

子供は小原、藤原、産生の里、鞍馬の奥、我船の方さまへ思ひく／＼に落ち行けば深山がくれの秋の空、露も時雨も争ひて我袖の涙も更に眞柴さる山路の奥を辿りつゝ、人里遠く分け入れば峰の巴猿一度叫び、行人の袋を潤せば谷の牡鹿の要戀ひに旅客の夢も覺めぬべし

と。『平治物語』に見えたるは作者の筆更に熟せるにや『保元』に比すれば遙に巧妙を加へたり。

かくて近江をも過ぎ行けば如何に鳴海の潮干潟、二村山、宮路山、たかし山、浪名の橋を打渡り、小夜の中山、宇津の山をも見て行けば、都にて名にのみ聞きしものを、それに心を慰めて、富士の高嶺を打眺め、足柄山をも越えぬれば、いづくを限りとも知らぬ武蔵野や、ほりがれの井をも尋ね見て行けば、下野國府に着きて、我が住むべかんなる室の八島まで見遣り給へば、烟り心ほそく上りて、折りから感涙止め難く思はれしかば、泣々かくぞ聞えける

我がためにありけるものを下野や室の八島に絶えぬおもひは  
爰をば夢にだも見んさは思はざりしかども、今は住家と跡を占め、習はぬ草の塵、響へん方も更になし。

後世の軍記又は戯曲等の書に海道くだり若しくは道行きぶりなど、題して句拍



子ある文の往々散見せるは全く是等の文體を踏襲模倣したるものなり。此の兩物語の結構と文辭とがいかにかに其の影響を後來に及ぼし、かを想察すべし。

『平家物語』と『源平盛衰記』とは共に是等『保元』『平治』の體裁を學びつゝ、文辭は一層優美艶麗に、結構は一段高大幽遠の域に進めるものなり。故に『平家』『盛衰記』の載するところは彼の二書と其の性質を同じうせるや勿論なり。此の二書また其の作者詳かならず、世に出でたる前後につきても古來未だ正確なる定説あるなし。『平家』は『公卿補任』なる葉室系圖には勘修寺良門十三代の孫葉室時長『平家物語』作者の隨一なりといひ、『臥雲日伴錄』には菅爲長の作と見え或は吉田資經、源光行、願教法師といへるなど異説さまざまなりといへども今は吉田兼好が『徒然草』に

後鳥羽院の御時、信濃前司行長、稽古の恐れありけるが、樂府の御論議の番に召されて七徳の舞をふたつ忘れたりければ五徳の冠者さ異名をつきにけるを心うき事にして學者をすて、遺世したりけるを慈鎮和尚、一藝あるものをば下部までも召しおきて不償にせさせ給ひければ此の信濃入道扶持し給ひけり。此の行長入道『平家物語』を作りにて生佛さいひける盲目に教へて語らせけり。さて山門の事をゆゑしく書けり、尤耶列官の事は委しく知りて書きのせたり、蒲冠者の事はよく知らざりけるにや多くの事

もなしるじもらせり。武士の事、弓馬のわざは生佛東國のものにて武士にさひ聞き、書かせけり。

とあるを眞として信濃前司行長の作なりとせり。『源平盛衰記』の作者また葉室時長なりといふ説あれど之を『保元』『平治』に比ぶるに文辭太だ異なれば恐らく彼れの作ならじ。また『平家』及び『盛衰記』の世に出でたる前後につきては『盛衰記』前に出で、『平家』後に出でたりとする説と、『平家』先づ出で、『盛衰記』後に出でたりとする説とあり。二書殆ど同一の記事にして祇園精舎に筆を起こし六道物語に之を收めつゝ、以て源平二氏盛衰の件を載す。故に『盛衰記』を後に出でたりとするものは之を以て『平家』を敷衍増訂せるものとなし、『平家』を後に出でたりとするものは之を以て『盛衰記』を抄録改刷せるものとせり。實際には孰れ當れるかは審かならずと雖も其の行文及び結構の比較上古雅簡潔なるによりて『平家』先なりとするを至當の推測なりとす。

『平家物語』及び『源平盛衰記』に載するところ比較上簡潔繁冗の別はあれど其の記事の略、同一なるが如く古今東西の故事先蹤に典據し儒佛の教理によりて案を斷



ずる趣は二書また相似たり。就中全篇を通じて無常なる世相を示さむと務むる次第の明瞭なる二書各、相如けり。さて二書卷首に、祇園精舎の鐘の聲諸行無常の響あり、沙羅雙樹の花の色、盛者必衰の理を現ず、驕れる者久しからず、只、春の夜の夢の如し、猛き人も遂には亡びぬ、偏に風の前の塵に同じと筆をつけたるは、孰れも作者が其の篇を物せし主意なるべし。まことや予輩は此の二書を閱了して回想すれば、さながらに無常の響を聽き、盛者必衰の理を感ずるが如く思はる。斯くの如きもの元來此の二書に於ける記事の然らしむるや必せりと雖も亦其の文章紆餘曲折或は優美に或は激切に情に隨ひ意に應じ而して、往々人生の弱點を穿ち以て讀者の感を惹くことあるに因らざばあらず。是等を『保元』『平治』の二書に比較するに時に華に流れ、織巧に失したる弊はあるも精神快暢特に『平家物語』の一種の律呂を具へたる風あるは、彼等の遠く及ばざる點なるべし。試に『平家』なる海道くだりの一節につきて之を見よ。

四の宮河原になりぬれば、爰は昔延喜第四の皇子蟬丸の關の嵐に心をすまし琵琶を彈き給ひしに、博雅の三位といひし人、風の吹く日も吹かぬ日も、雨の降

る夜も降らぬ夜も、三年の間歩を運ひ、立ち聞きて彼の三曲を傳へけん、わら屋の床のいにしへも思ひやられて哀れなり。相坂山をうち越えて勢多の唐橋駒もどいろと踏み鳴らし、雲雀上れる野路の里、志賀の浦浪春かけて霞にくもる鏡山、比良の高嶺を北にして伊吹の岳も近づきぬ、心をとむとしなければども荒れてなかく、やさしきは不破の關屋の板廂、いかに鳴海の沙干瀉、涙に袖はしをれつゝかの在原の何某の唐衣きつゝ、馴れにしと詠めけん、三河の國の八橋にもなりぬれば、蜘蛛手に物をとあはれなり。濱名の橋を渡り給へば、松の梢に風さえて入江にさわぐ波の音さらでも旅は物憂きに、心をつくす夕まぐれ池田の宿にも着き給ひぬ。彼の宿の長者熊野が女侍従の許に其の夜は宿られけり。

『盛衰記』に見えたるを取出でむも亦之れに譲るべからず。學者須らく此の文を前に掲げたる『保元』『平治』の比べて幾何の進歩ありしかを、知ると共に又爾餘の如何を推測すべきなり。

『平家物語』及び『源平盛衰記』結構並に文辭は大跡以上に記載せるが如し。然らば



二書の優劣は如何にあるべきぞ。全牀の結構と文辭と詩情を帯びたる點に於いて元より『平家』の優りたること古人も既に云へり。况や『平家』は語らむために作りたる事として行文の間に一種の句拍子具はりて多少詩形をさへ具へたるものをや。

因に、『平家』の句拍子に關する僧惠空の既は多少此の書を解するに參考となるべきものあり。曰はく「行長入道慈鎮和尚に扶持せられし故にや『平家』のふしも多くは台家の聲明のこえに似たる所あり。六道講義のはかせ及び叡山大合の時など讀みあぐる聲明のふし今の座頭のかたる、よくうつりのまがふ所多し」と

されども是はこれ此の二書の詩情に關する大牀の觀察なり『盛衰記』の行文の細密にして意匠の周匝なる却りて『平家』に優ることもなくばあらず。其の一例を示さば横笛といふ女房の瀧口時頼入道を嵯峨の往生院に訪へる條を『盛衰記』には

華嚴經の文をくり返し〜二三邊をぞ唱へたる、聞けば尋ねる瀧口入道が聲なりけり。思ひ呼聲は聞こゆるなるためしも誠なる心地して暫く之れを立聞けば瀧口入道申しけるは「我親世に有りしかば何不足とも思はざりしかども横笛がこゝ心に叶はぬ憂世の中も思ひ知られて様をかへ斯く行きて候へば悲しき女は還つて菩提の善知識と覺

えたり人は心弱くては佛道は迷ぐまどきにてありける後世はさりとも助かりなんものななんこそ口脱きたる。横笛儘かに是を聞き得つゝ軒近く立寄りて竹の編戸を叩きけり。内より誰そと問ひければ横笛ぞと答へける。瀧口入道是を聞き誠ならぬ事哉と胸うちさばき障子の間より是を見れば實に横笛にぞありける。色々の小袖に薄衣引纏ひそやうの耳踏みきりて袖は涙すそは露にぞしほたれける。終夜尋ねわびたる氣色は堅固なる道心者も心よわくぞ覺えける。無愁やな誰れ是れにさば教へけん何さてこれよでは來たりけん出で物語せばや。見えて心をも慰めばやと思ひければい主の見るも耻かしく云ひつゝるこそ、耻かしくさては佛道成りなんやと思ひきる。人を出だして「是れにはさる事候はず人違へておはする瀧口とは誰人ぞ」と事の外に云ひければ横笛強ひて申すやうけに入道の聲のし給ひつゝる者をや、様をこそ替へたまはんからに心さへ強面なり給ひける恨めしさよ。させる妨にも成るまどわれ故に姿をやつし給へるさ承れば今一度黒染の姿をも見奉り又便あらば自らも苦の秋に鏡りかへて花を求め香を燒きさもに後生を助からんと思ひてこそ遙々尋ねまぬりたれ。それまで誠に叶はずば只出で給ひて今一度見え給へと云ひければ入道千度百度出ではやと思へどい云ひつゝる事も耻づかしく出でい由なき事いづと思ひつゝい迷にかぐれて遂はざりけり。比は十月中の六日の事なれば嵐に伴ふ曉の鐘今夜も明けぬと打響く月に靡く紅葉幾重軒端に積るらん、落つる涙に時雨つゝ横笛袖をぞ絞りける。たま〜有りき聞得つゝ聲をたよりに尋ねれば主の層のはしたなく無しと答へて出だされば



憂身の程もあらはれて今は人を恨むに及ばず有サカ明け行く空なれば人のためづし  
しと思ひつゝ

山ふかみ思ひ入りぬる柴の戸のまことの道に我れをみちびけ

と讀みすて此の世の見参は叶はずとも朽ちせぬ契りにて後の世には必らずささらば  
暇申して入道殿とて女そこより歸りけり。時頼入道も心強くは出でれども悪しから  
ぬ中なれば庵室の陸いりうしる姿を見送りて忍ひの袖をそ絞りける

とあるに『平家』の

住み荒らしたる僧坊に念珠しけるを瀧口入道が聲と聞きすまして御様のかはりてお  
はすらんをも見もし見え参らせんがために妾こそ是れまで参りて候へと具したる女  
にいほせければ瀧口入道胸打さわざあまいさいに隙子の隙いりのぞきで見れば襦は  
露袖は涙にうちしほれつ、少し面瘦せたる顔ばせ誠に尋れかれたる有様、如何なる大道  
心者も心弱くなりぬべし。瀧口入道人を出たしてと全くこゝにはさる人なし、若し門違  
へにても候ふらんといほせたりければ横笛なさけなく怨めしけれども力及ばず涙を  
おさへて歸りけり。その後、瀧口入道同宿の僧に語りけるは、是れも世は静かにて念佛  
のせうけは候はれぬと飽かてわかれし女に此の住居を見せて假令ひ一度は心強くさ  
も又もと甚ふとさあらば心も動き候ひなんす暇申すとて雙蛾をは出で高野へ上り、まや  
うとくまん院に行ひすまして居たりける

とあるを對比せば如何に『盛衰記』の筆致情を得て人を動かす力あるかを判するを

得べし。『盛衰記』の文常に冗漫繁縟なることありとするも時に情を得て神に入る  
こと『平家』に優る、豈に此の書全く彼れの下にありとせむ。况や此の歴史たる價値  
は、到底『平家』の企及せざることなるをや。

さて軍記物語の外雑史の項に猶ほ『十訓抄』及び『古今著聞集』といふ書を附載すべき  
こと既に述べたるが如し。『十訓抄』は何人の著なるか分明ならず、或説に爲長の作  
かといへれどいかゞあらむ。自序には、建長四年の冬神無月半の頃、ちのづから暇  
あり心静かなるをりふしにあたりつゝ、草の庵を東山の麓にしめて蓮の臺を西土  
の雲にのぞむ、翁念佛のひまにこれをしるしをはると見えたり。書中に載せたる  
ことは専ら著者が見聞せるにつきて十目を立て、教訓となるべきものを集録せ  
るなり。則はら此の如く本書は教訓となるべきことを集録せるものなれども史  
料となるべきとまた少なからず文章はた平易にして樸實讀むに足る。『古今著聞  
集』も見聞せる事柄を集録せる點は『十訓抄』に同じけれど是れは教訓にせむとて  
ものせるにあらず、『宇治大納言物語』さては『江談抄』の體に倣ひて神祇より始め禽  
獸魚蟲の事に至るまでをそれと類を分かちて集録せり。文章質素にして虚飾



なく事實には怪異なることありと雖も或點よりいはし史學上遙に『十訓抄』の上  
にあり。著者は橘成季といひて後深草天皇の御宇の人也。建長六年之を著はす。  
成季の傳例の審かならず。卷の數凡べて二十卷。『十訓抄』は著者自ら言ふごとく  
釋教の流を汲むものなるは云ふまでもなければども『古今著聞集』はた其の作者の  
腦裏を支配せるものは又鎌倉時代一般に普遍せる老佛孔孟の思想に外ならず。

### 第五節 日記及び紀行

『辨内侍日記』並に『中務内侍日記』『海道記』と『東關紀  
行』と『十六夜日記』

鎌倉時代に日記と稱すべきものは唯、僅に『辨内侍日記』と『中務内侍日記』との二書  
ありしのみ。源光行の『海道記』其の子親行の『東關紀行』並に阿佛尼の『十六夜日記』  
などは云ふまでもなく紀行の文に屬す。此の中『辨内侍日記』『中務内侍日記』及び  
『十六夜日記』は女子の手に成りしことゝて優美なること大方平安朝の近く『海道  
記』と『東關紀行』とは男子の手に成りしことゝて勁拔なること當代の隨筆さては  
雜史等の風趣に似たり。但し平安朝のに近き日記の文も其の用語と文脈とは共

に多少當代の風を具へ着想はたさのみ古風のものにあらず。

辨内侍は中務大輔藤原信實の息女なり歌文に妙を得たりし事其の日記を見ても  
知らるべし。其の日記一本に『後深草院辨内侍家集』と稱せり。こは其の書の日記  
といふものから文は寧ろ歌の序詞めきたるものにて家集に類したるよりの名に  
てもありけむ。後嵯峨院寛元四年正月廿九日富小路殿にて御讓位ありし事より  
書きはじめ建長四年十月までに渉る殆ど七年間の記事あり。文章平淡にして他  
奇なしと雖も禁中に奉仕せる縉紳宮文の状態歴々として察するを得。歌もまた  
平板にして歌情稍欠乏せる觀あるも風姿暢達誦するに足るものあり。さて此の  
日記の作者に就きては其の奥書に

「此集後深草院辨内侍歌多見之仍號彼集此辨内侍者閑院冬嗣公一男中納言長良卿之末  
葉中務大輔信實女也」

とあるに依りて古來辨内侍の筆なりといひ傳ふれども書中辨内侍の歌の多きが  
故にしか傳へたるにて別にさるべき證ありしにあらず。故に其の作者を辨内侍  
とするにつきては疑ふべきふしもまた少からず見ゆ。例へば



五月五日あまのつみをきりしに、かつみをかきつみまらせたるを、歌かぞへて取りてまゐらせよと仰言ありしに、菖蒲さ思ひて侍れば、ひきたがへたるもおもしろくて辨内侍

かつみ生ふるまさかの沼もまだ知らず深くあやめと思ひけるかな

の如し、おのがものせる日記なるに一々我が名を記載したりけむ事如何にあるべき疑點は即ちこゝにあるなり。されば予輩が此の日記を辨内侍の筆なりとせるものは只便宜のため姑く舊説に依りたるのみ。此の日記の今日に傳はるもの巻末に至るに隨ひ紙魚の害を受けたるどころ多くして全文の明確ならざるは惜しむべし。

『中務内侍日記』は宮内卿永經といへりし人の女にて中務内侍たりし婦人の手に成りしもの也。中務の侍の閏歴は詳ならぬと龜山、後宇多の兩朝より伏見天皇の御代にかけて奉仕したる人なるべし。書中記するところ、

徒に明かし暮らす春秋はたゞ羊の歩みなる心地して末の露本の車に後れ先だつ例のはかなき世を且つ思ひながらも得達の縁には進まず皆生々世々に迷ひぬべき人間の八苦なるぞあさましき。唯、かゝる中のそゞろことのみ心にしみて忘れがたき中にも弘安三年伏見殿の御識法とて院の御方はかなく

なりしに十五夜の月も雪打ち散りて風も冷やかなる枯野の庭の景色物おはれなれど同心に見る人もなし。獨眺めんも好きくしかりぬべければ入りて伏しぬるに春宮御方鈞殿に出でさせおはします。

とて故後深草院を忍び奉ることより書きはじめて伏見天皇の正應五年までの間おのが禁中にありて見聞せし事など載録せり。故に當時の御幸のさまさては伏見天皇御即位の次第、大嘗會の儀式等朝廷式微の間にありても尙ほ大禮として辛く執行せられけるやう一々窺ふを得べし。文章は前段に見えたるにても明らかなる如く古風ながらも著るく當代の露勢顯はれ思想はた例の佛教思想の配下にあるを見る。これを『辨内侍日記』に對比するに彼れは稍、藹然たる太平の和氣あるかの如く是れは聊か陰鬱なる厭世的傾向あるに似たり。これ蓋し彼れは端を祝賀に發き是れは巻を悲哀に開きたるに依れるが、或は作者の性質おのづから然るものありしに基づくならむ。

『海道記』及び『東關紀行』は題名の既に表する如く作者が京都より東海道を経て鎌倉に至れる紀行の文なり。其の作者源光行と親行とは父子たりと雖も其の傳共



に詳かならず。されども光行は其の記の卷首に、貞應二年卯月の上旬五更に都を出で一朝に旅立つと見えれば後堀河天皇の頃なるべく、其の子親行は『東關紀行』の中に、仁治三年の秋八月十日あまりの頃都をいで東へ赴くことありと記すれば四條天皇の頃の人なるべし。『東關紀行』は一説に長明著はすところとすれど仁治三年は長明死後の年號なれば親行の作とする古説こそ眞實なるべけれ。『海道記』の文は措辭六朝の體を帯び句を對する趣見えて稍煩瑣の風あれど和漢梵の典故を自在に引用するところ以て作者が富贍の思藻を窺ふに足る。『東關紀行』は『海道記』に比すれば寧ろ本朝の故事に典據し文體は尤稍平易にして明快なり。されども若しこれをとりて次ぎに出でたる紀行の文『十六夜日記』に比較するに尙ほ行文も着想も前に云ひし如く共に勁拔にして其の作者の異性たるを示すと勿論なりとす。

『十六夜日記』は阿佛尼の著はしたるものなり。阿佛尼は法名をまた北村禪尼と稱せり。從五位下佐渡守平度繁の女にして俗には四條とも右衛門佐ともいひき。其の初は順德天皇の皇后安嘉門院邦子の方につかへて侍女なりしが、のち大納言

藤原爲家に嫁して爲相爲守等を生みぬ。阿佛尼の歌道に通じたるは其の著『夜の鶴』といへるに歴代の歌集を論評したるにても明らかなるが又當時の歌集中其の歌の入りぬものなきにても知らるべし。されば子爲相の生長して三代相傳の家學を繼承せしも一には其の母たる此の阿佛尼の力與りて功多かりきとぞ。『十六夜日記』は爲家死後爲相に譲るべき播磨國細川の莊を異母兄なる爲氏の押領せしかば後宇多天皇の建治三年阿佛尼之れを鎌倉の執權に訴へむとして東下せし時の道の記なり。かるが故に此の記は管に行旅中に見聞せる山川若しくは事物を冷然漫録せるとは甚だ異なりて其の愛子をおもひ斯道を思ふ熱情篇中に充滿横溢す。すなはち此の壯舉は元來阿佛尼子を思ふ心の闊は尙ほ忍びがたく道をかへりみる恨はやらん方なくてといへる如く數百里の旅行をも意とせざる母子の愛情より出でたるなれば聞睹せること一として斷腸の思ひあらしめざるはなく或は道を思ふていまの世を慨き或は子を想うて亡夫を傷むなど轉讀者をして涙あらしめざるなし。蓋し阿佛尼は慈愛貞節の淑徳は勿論分別あり學才ある婦人なりしなり。故に十六夜日記の文は情藻高潔にして野卑猥雜なるところなく全



篇教訓となすとも毫末の支障なきを見る。行文簡にして意長く優美なるうちに毅然たる精神の貫通せるは此の書の特徴とも謂ふべきなり。阿佛尼の著作は此の『十六夜日記』の外に猶ほ『夜の鶴』として代々の歌集を評論せるものと『乳母の文』(前引)『阿佛口傳』等あり或は彼れが歌道の意見を見るべく或は彼れの徳高きを窺ふべし。弘安六年鎌倉に於いて歿りぬ享年詳ならず。阿佛尼歿後鎌倉時代の散文家にしてまた此の尼に襲ぐほどのものありしを聞かず。

## 第五期 室町時代の文學

### 第一章 總論

年代の範圍 室町時代に於ける文學の概況 言語文章

こゝに室町時代の文學とは後醍醐天皇の延元元年(一九九六)足利尊氏北朝の天子を擁立し自ら征夷大將軍の職に居りて幕府を京都室町に開きし頃より後陽成天皇の慶長八年(二二六三)徳川家康征夷大將軍となりし頃まで凡そ二百六十餘年間に於ける文學を云ふ。此の間政治上の變革より云へば其の末造の三十餘年を割きて別に織豊二氏の時代を設くるを一層精細なる分類といふべしと雖も文學上にはさる異目を置くべき程の特色なきを以て予輩は併せてこゝに之れを室町時代の下に攝す。

此の時代の文學は其の初に當りてはさまで鎌倉時代の風を距ること遠からざりき。其の文學が或は厭世的思想を帯びたる或は雄偉瑰麗なる或は材料の斬新にして通俗的傾向を有せるなど予輩が之を鎌倉時代に見たるに似たり。されども南北朝の頃は云はれず、天下に統一に歸しての後も此の時代は外觀太平なるが



の如くにして内常に争亂絶えざりしかば其の文學は次第に衰微の姿を呈したり。况や嘉吉應仁さては其の以降の頃をや。英雄四方に割據して中原に鹿を逐ふ世の中には社會の上流に立つものと否らざるものとを問はず文學に従事するもの少く又稀に従事するものもあるも専心之が研鑽に身を委ぬるものなければ當時の文學の微々として振はざりしも當然の事なりかし。文學は太平の花なりと知らば誰れかは嵐吹き荒める當時に偉大崇高の文學あるべしと思はんや。然れどもかゝる時代にありても文學は尙ほ或自由なる方向をとりて進みたり。すなはち兵亂打ちつゝ人々干戈に忙しきがために規律の煩瑣なる文學こそは或少數者の手に委せられたれ其の自由なるもの之に代りて世に出て較著なる進歩の緒をなせり。例へば俳諧歌の如き平安時代の文學に既にこれありしが此の時代においては歌界に重要なる地位を占め連歌はた急激の發達をなして暗に江戸時代なる文學の素をなしぬ。諸種の歌曲一層進歩して謠曲の出でたる。さては滑稽を主とせる狂言の起りたるこれのみにても此の時代を文學史中に紹介する價值あるべし。况や御伽草子といふもの出で、後世に於ける小説の種子たりし趣あり

しをや。是等の文學其のまゝにては未だ偉大崇高の稱を冠しがたきはさる事ながら偉大崇高なる文學の萌芽たる價値は少くともこれあり。故に此の時代の文學は野分吹きわたりし冬枯の野邊にも喩ふべく古風なる文學漸く搖落して新文學の萌芽既に發生の兆あるを見る。さて是等の文學は細流の手に出でたるもの多かりしがために大方は佛教的趣味を帯びたる事また注意すべき要件なるべし。此の時代の作者は文學既に以上の如き有様なりしかば十中の八九は其の名を逸して不明なるものに屬せり。卜部兼好、僧頼阿、北畠親房、宗貞親王、今川貞世、一條兼貞、太田資持、東常縁、宗祇、宵栢、西三條實隆、荒木田守武、山崎宗鑑等只、僅に其の名を傳へて世に高きのみ。著書には『徒然草』『草庵集』『神皇正統記』『新葉集』『太平記』『吉野拾遺』『公事根源』『權談治要』『増鏡』『暮景集』『徹書記』『三玉集』『菟玖波集』『犬筑波集』等最も其の名あらはれたり。

言語は古風の文學衰微すると共に舊來の格法ますます崩れて自由なるものとなり。鎌倉時代にありても漢學の講究衰へたるがために措辭用語漸く蕪雜なるものあるに至りしが當代の言語は決して其の比にあらず。即ち漢語梵語武者詞



などの交れるは勿論今日使用せる極めて杜撰なる言語も多くは此の時代より始まれるものなり。例へば從來あるまじといひしをあるまいといひ何々なりといひしを何々ぢやといふが如き又は最負無念などの類すなはち是れなり。語格假名遣のみだれには係結の辭の一定せざる又は自他の動詞の順逆を失せる又は覺ゆといふべきを覺ふとせる如き大方の誤謬錯亂は此の時代に至りて其の極に達したり。是れ戰國の世の中として一は文學に従事するもの古文の格を知らず一は當時諸地方に於ける武士の交通甚だ頻繁なりしにつれて不醇なる方言のますます多く混交せしに依るべし。さて當時の言語はかくの如く雅俗不醇なるものなりしかば是等の言語をもて綴りたる文章は冗漫粗笨のもの多かりしこと云ふまでもあらし。されど猶ほ細査せば此の時代の初期に出でたる隨筆又は雜史の文詞と中葉以後に見えたる謠曲の辭章とには莊重なるものも絢爛なるものも尠なからざりきと知るべし。故に此の時代の文章は典雅なるものと卑俗なるものとさては雅俗混交せるものと相錯綜せりと謂ふべし。之を要するに室町時代の文學は思想も言語も文章も一樣に舊慣を破却して不羈

自由なる新天地に入らむとするものなり。次ぎに來べき江戸時代新文學の發生は此の時代の文學ありてこそ始めて見らるべきものなれ。學者宜しく之が研究に意を留むべきなり。

## 第二章 社會の概況

南北朝の兩立 應仁の亂 戰國 將軍及び諸侯の奢靡  
士民の困弊 武士道 宗教及び教育

後醍醐天皇元弘三年北條氏を亡ぼさせ給ひてのうち中興の業一たび成りしかども諸卿徒らに偷安を謀り天皇もまた政事に倦ませ給ひ内奏頻りに行はれて政令常に定まらず將士の行賞はた多く偏頗に流れしかば世やうやく武門の昔を慕ふものありき。然るに此の間に在りて足利尊氏は累世の名望を有し併せて將士の心を收攬せしかば政道の不正を憤るもの次第に歸伏して威權ます／＼隆盛となりぬ。かゝれば心あるものは戰亂の必ず避くべからざるを憂へざるはなかりき。さる程に建武二年尊氏遂に叛き自ら征夷大將軍と稱し延元元年京師を陥れてここに持明院の流なる皇統を擁立し幕府を室町に開くに至りて世はいよいよ亂麻



の姿を呈しぬ。此の時後醍醐天皇は亂を遁れて吉野におはせしが楠新田等諸勤王の將士之に隨ひ奉りて恢復を圖りつ。是れより五十餘年の間戰亂止む時なく僻陬の地なほ其の禍を蒙らざるはなかりけり。世に之を南北朝の亂といふ。此の間南朝の社稷日に衰微して北朝のみ月に盛なりき。かくて尊氏の孫義満將軍の時に至り北朝の天子後小松天皇正位を踐むことに定まりて兩朝の和議やうやく成り天下の政道甫めて一に出でたり。されども天皇は素と足利氏の擁立に繋かるを以つて多くは垂拱して成を仰ぎしかば幕府の威權獨りますく加はりぬ。さて天下はかくして一時靜謐の觀を呈するを得たりき。されども其は實に表面上の假裝なりしのみ。かゝる間にありても諸地方には尙ほ小戦私闘の如き殆ど間斷なき有様なりきとこそ聞け。鎌倉の管領職は其の初尊氏關東を鎮護し併せて將軍を補佐せしめむとの趣意より其の子基氏を遣はししものなるが數世を歴るに及びては嘗に往々其の管領の將軍に拮抗せしのみならず君臣の間はた常に親睦を缺き延いて嘉吉の戰爭をさへ醸成せり。應仁の亂に至りては猶ほ是れより甚だしきものありけり。此の亂もと細川勝元と山名宗全との軋轢に基くとい

へども天下の諸侯大方其の孰れにか黨與せしかば數十方の軍兵東西に對陣して京師の地を戰場とせしこと前後十一年の長日月に亘りぬ。されば之が爲には京師大半修羅の街となりて兵燹にかゝり灰燼となりたるのみかは公卿百官は其のよるべきを失うて四方に流寓し古來諸家に傳はりし記録珍寶の類また零焼亡散逸せり。兩軍解散の後も諸國の豪族孰れも其の城地を固うし道を塞ぎて各地に割據せしかば六十餘州到る處干戈の響絶ゆる時なくて弱肉強食の世となりぬ。かゝれば室町將軍の威令は寸毫も行はるゝ所なく天皇の詔勅まして顧るものだになかりき。されば隨うて世に勢あるものは譜代の臣下も鋒を逆にして其の君を陥れ力乏しき時は侯伯も其の威を保つに由なかりき。例へば守護代地頭代の如き其の職由來非違を檢斷する役にありながら今は却りて非違を逞うし其の主を追うて獨立するもの比々相連りぬ。永祿の頃織田信長尾張に起るに及び始めて四方に號令せむとする志あり先づ近畿の地を制定し遂に當時の將軍足利義昭を奉じて京師に入りぬ。而して其の京師に入るや皇室を擁護し幕府を翼賛し以て衆望を收むることを務めたり。然るに義昭は信長の威望日に隆盛なるを猜み



て除かんと謀りしかば却つて之がために敗られて自家の滅亡を招きぬ。是に於いて信長足利氏の後を承けて諸國を平定し其の領地の如き殆ど全國の半に及びしが未だ全く其の成功を見るに至らずして逆臣の毒手に斃れぬ其の臣豊臣秀吉は偉畧に富める者なりしが織田氏の偉業を繼續するに及び遂に全國を裁定し城を大坂に築きて以て天下の政務に參せり。かくて我が邦こゝに始めて天下一統に歸するを得たる觀あり。しかれども政權は未だ皇室に復せず且つ秀吉大志を抱きて程なく征韓の師を起ししかば文物猶ほ興盛の運に至らざりき。殊に秀吉の薨後は其の子秀頼幼稚にして諸侯を制すること能はざりしが故に將士各其の權を争ひ互に猜忌して騷擾を極めたり。かくて元和元年徳川家康大坂城を陥れ豊臣氏を亡ぼすに及び天下全く平和の緒に就きぬ。

かゝれば此の時代に於ける庶民困弊の狀は大方想像するを得べし。南北朝の頃は干戈寧日なく到る處戰場となりしかば庶民其の堵に安んずること能はず公卿百官の流落するもの亦尠からざりしは云はむも愚なり。南北合一の後となりて天下稍小康の姿ありし時だにも將軍義滿驕奢極まりなく平素の行動或は上皇に

擬し無用の土木を興して苛税を收めしかば民愈窮乏せり。義滿が室町に花の御所を作り北山に鹿苑院を營み三層の樓閣を起こし壁柱戸牖悉く金を塗りしが如きは如何に民力を消耗するところありしかを窺ふべし。其の孫義政に至りては奢侈義滿にも超えたり義政が作りし高倉御所の腰障子は一間の價二萬錢なりきとかや。義政財用究する毎に或は賦税を重くし或は徳政を布き或は又錢を明國に乞ひなごして以て一時を彌縫せり。さるに在京の諸侯は之に倣うて盛に第宅を造營し頻りに奢靡を競ひしかば士民の困究日に月に甚しがりき。况や此の頃は天災地妖連年打續き物價また騰貴して餓殍既に途に委するものありしをや。されば應仁以降に於ける士民の狀態は最早云ふを要せじ。然るに此の間皇室を始めざるらせて公卿百官の困弊はをさく士民の狀態にも譲らざりけり。諸國の豪族跋扈するにつれて朝廷の所領愈奪掠せられ公卿の領地はた武人の横領する所となりぬ。應仁亂後には此の弊ますます甚しく公卿孰れも衣食に安ずる能はず或は縁を求めて諸國に流落するもの多かりき。管領大内義興の職を辭して周防に歸るや諸司の之に従ひて下りじもの引きもきざりきと傳ふるにても知ら



るべし。かゝれば、朝廷の恒例の廢れしもの擧げて數ふべからず、明應九年に後土御門天皇崩御ましませし時には、大葬の費用給せざりしを以て、靈柩を黒戸の御所に納め奉りしこと四十日に及びたり。また後奈良天皇御在位の頃となりては、朝廷の衰微殆ど其の極度に達し、宮殿の如き頽破してさながら、邊土の民屋に異ならず、築地毀れて内侍所の御燈の光も見ゆるばかりの御有様なりきといふ。信長出で、朝廷の典禮稍古に復するを得たり。

かく此の時代は、僅に小康の時こそあれ、前後大方紛亂の世なりしかども、彼の武士道の如きは、鎌倉時代にもまして著るく發揮せられたり。されば當時の武士は皆、廉直を重んじ信義を尙び死を鴻毛に比して只管ら父祖の名譽を汚さざらむを士の本分なりと思惟したりき。これ將軍義滿の頃、管領細川頼元等率先して斯道の獎勵を務めたるに依ると雖も、一部は當時の武士が多く參禪したる結果、人生を無常なるものと觀ぜしかば、同じくは果敢なき命も義のために死なむと期せしにありべし。而して此の生命を輕んずる觀念は、また當時戰亂の世の中とて、剛強を貴ぶ風と一致結合して、卑怯未練の舉動を無上の耻辱として厭惡したり。故に其の

死につくや、從容として苦痛を感ぜざる如く、或は腹を一文、八文、十文に掻き割き、剝へ自ら臟腑を搦み出だして、辭世の句を詠ずるもありけり。かくて此の氣象は、單に武士の間にのみ存したるにあらず、公卿殿上人の如き若しくは、婦女子の如き亦之を尙びたり。公卿殿上人の尙武の氣風に移らむとする傾向は、昔て述べたる如く、鎌倉時代の末葉に於て既に之ありしが、此の時代の初には、是等の人も時としては自ら兵器を執りて戰場に立つことありしより、一層著るく此の氣風を發達せしめたり。但し此の反對に諸侯が公卿等の優柔なる氣風に感化せられて、其の家を亡ぼしたる例も稀に無かりしにあらず。婦女子の義に勇み貞操を重んじたるは、一般に社會の表面に立つ男子の氣風こゝに在りしかば、其の自然の感化に依りたるなるべし。然れども社會の人の多かる中には、武士道の眞意を誤認したるものも往々にして之れありしは、勿論なりとす。就中世漸く降り、應仁亂後となりては、此の如きもの却りて多數を占めたりしが如し。道義地に墜ち、法令其の効を失ひ、吞噬搏撃たゞ事とする世の中に、眞實に廉直を尙び信義を重んずる風の聊かたりとも残るべき筈なければ、武士道の眞意失はれたるは當然の事ぞかし。



すなはち此の時代の中葉以後には人々剛強を尙ひ然諾を重んじ卑怯未練を耻づるものから後世の所謂任侠の如く理の是非事の善悪を問はざる傾向生じたり。故に武人にして一朝の然諾のために身を粉に碎くものあるも必ず信義のために生命を棄つるにはあらずき。剛強一邊を重んずる輩には大功は微瑕を顧みずとて斬り取り強盜をなすも武士の面目に關するとなじと思惟するとありき。此の頃我が狼慾の犠牲としては最愛の兒女を敵に嫁せしめ山海の恩ある父母をも人質となすを躊躇せざりきと聞かば誰れかは尙ほ之れを武士道の眞意失はれずとせむ。

かく當代の人士は上下を通じて一般に殺伐剛強を尙ひしかば其の遊戯の如きも多くは之れに合ふ流鏑馬、笠懸、犬追物、狩獵等の雄壯活潑なるを愛したり。しかれども又京都縉紳の風を承けて武士等が軍陣の間に閑雅瀟洒なる茶の湯を弄び田樂、猿樂、白拍子等を招きて遊ぶことも妙からざりき。南北合一し天下稍小康の觀を呈せし將軍義滿又義政の頃は地方の士民の困弊せるに拘はらず上下遊惰驕奢に流れしかば時人の嗜好も勢ひ殺伐なる事を餘所にして優美閑散なる娛樂に傾

きぬ。茶の湯今を盛りと行はれ聞香插花の遊び又時を得顔に持囃されたり。猿樂の専ら世上に流行せしも義滿將軍の頃にして世阿彌と稱せる者が猿樂田樂、舞等の諸曲を折衷して謠曲を作りしも又狂言の出でたりしも皆此の頃の事なりとぞ聞こえし。其の他連歌、蹴鞠は更なり園藝の法はた精巧を極めぬ。かゝれば義滿義政の頃に於ける諸藝術の發達流行の優美なるはなか／＼に平安時代の昔の姿にも譲らざるべしとこそ思はるれ。而して是等諸種の遊戯技術は嘉吉應仁の後に至りても廢絶することなくて織田豊臣二氏の世にも尙ほ一般に行はれたり。かくて又此の時代の武人が美少年を愛嬖したりし一事は特に記載すべき價値あるべし元來僧侶が美少年を嬖せしは佛戒に女犯を禁絶したるためなりしが武人も戰場にありては婦女を携帶せむことかた／＼遊妓を聘せむことはた意に任せねば軍旅の鬱悶を散ずるがために男子相契りて互に慰藉すること古くよりも稀に之ありき。此の時代に及びては其の風ます／＼盛行し美少年の眉を剃り齒を涅め鉛粉を粧ひ女装して只管ら媚を賣るものもありけり。義滿將軍を始め歴代の將軍の美少年を寵し男色を愛したるためし妙からざりしに戦國の世に在り



ては殊に此の風盛なりき。

此の時代に於ける宗教の状態は鎌倉時代に比較すれば多少沈靜の觀あり。鎌倉時代に在りては殆ど佛教革新の時期といふべく日本の佛教の創創せられたるもの多かりしが此の時代には新に開れたるもの更になくたゞ前期に創せられたる念佛宗、法華宗等の盛大となれるが有りしのみ。就中禪宗は京鎌倉の間に甚た尊信せられしかば貴族の參禪するもの多く之がため禪味の人心に浸染し發揮せられたるもの尠からざりき。禪宗の教理能く武人の精神と合一して彼等が心膽を練り生死を輕んずる風を養成するに與りて力ありしことは既に述べたるが彼の茶の湯の如き聞香の如き遊技も一部は禪味の妙趣あるより盛行したりしが如し。一向宗は始め叡山の徒いたく之を排斥せしかば京都附近にはさして弘布するとなかりしが本願寺八代の主兼壽蓮如上人と稱し辯才ありて説教に長ぜしかば男女を化導して信徒加能三越の地に漸く多かり。是に於いて信徒遂に兵器を蓄へ民間無頼の徒を囂集し世の亂に乗じ威力を以て其の宗に歸せしめむと謀れり。其の勢猖獗にして諸侯其の暴横に苦しめども或は其の援を得て一時を利せむと

するにより其の徒益、諸國に遍くなりぬ。日蓮宗も當初は諸、窮阨の間に在りて微々たりしが宗徒大に布教に従事せしかば此の時代に入りてまた盛大となれり。此の宗は一向宗と相惡むこと甚だしきより其の宗徒また囂集し遂に一向宗と相對して干戈を動かし互に焚掠を逞うせり。其の他叡山根來等の僧徒の破戒無慚にして専横なる決して一向、日蓮の徒に譲らざりき。しかるに信長日頃僧徒の専横跋扈なるを惡み峻酷なる攻撃を之に加へしかば久しく跳梁を恣にせし僧徒も漸くにして屏息の姿を呈するに至れり。しかのみならず此の頃佛法布教の上に一大敵の加はるありて僧徒の勢力を減殺せしめたるものあり。耶蘇教(切支丹宗)の渡來即ち是れなり。抑此の宗は天文十七年(二二〇)八薩摩國の一少年郷里に於いて人を殺して南洋の一小島に遁れ彼の地にありて耶蘇教を信じて洗禮を受け日本に布教せむことを勤めしより宣教師フランソア、ザヅィエーといふもの鹿兒島に來り島津氏の許可を得て傳道に従事したるを始めとす。宣教師等陽に徳行を示し仁慈を旨とし熱心を以て之が傳道を務めしより其の教徒俄に増加し嘗に九州一帯の僻地のみならず次第に東方に蔓延し遂に關東諸州を経て仙臺會津に



至り北は金澤南は和歌山にも及びたりとぞ。信長の如きまた京都に南禪寺を創設し安土に大成寺を築きて傳道の便宜を與へたりき。しかるに豊臣氏の時代に及び九州に於ける耶蘇教徒いたく跋扈して神社佛閣を破毀焚燒するものありしかば秀吉之がために國家の亂れむことを憂ひ遂に其の傳道を禁じ宣教師の徒を海外に放逐せり。しかれども世人の耶蘇教に對する信仰は決して之がために一時に消滅するものにあらず是れより永く我が邦人の心に佛教の信仰と共に銘記せられたり。さもあれ耶蘇教の渡來は此の時代の末造に屬せしを以て重もに當代の人心を支配せし信仰は尙ほ佛教にありきと知るべし。彼の古來我が邦人の精神ともせし敬神の念は此の時代に入りて佛教と同じく一の宗教として唱説せしものありしかど其はさまで人心に影響を及ぼすことあざりき。漢學の攻究につきては殆ど地に墜ちたりと云はゞ足るほどなり。鎌倉時代は四海概ね靜謐なりしを以て猶ほ多少は漢學に志す徒もありしかども此の時代に至りては只、僅に一縷の命脈を維持せるあるのみ。此の時代に於いては文筆の權は大方僧侶の手に委せられしが漢學の攻究を維持せしも全く僧侶に過ぎざりき。

武人は既に戰陣の馳驅に忙しく庶民は連年の紛亂凶荒に疲るれば如何にか漢學の攻究に身を委ぬるとの出來べき。後醍醐天皇の如き將軍義尙の如き當代に在りては珍らしくも學に志し、方なれども尙ほ一般に普及せしめむとは到底能くすべきにあざりき。しかるに此の間下野に足利學校といふものあり京都に五山の僧徒のあるありて僅かに有志の士の就いて學修するを得たりしは幸といふべし。

足利學校は其の創設詳かならず或は國學の遺跡ならむとも或は小野篁の建設なるべしともいへり從來久しく頽破に屬せしを北朝の貞和年中足利基氏之を再興したるなり。永享十一年上杉憲實また之れを再建し多く書籍を納め學田を寄附し禪僧快元をして教授たらしめき。これ當時にありては海内唯一の學校なりければ學徒東西より集まり隨うて憲實の功を贊せざるものなかりきといふ。さて此の頃京都五山の僧徒等が専ら修めしは朱子の註疏にして古註は早く彼等の排斥せるところなりき。されば徳川時代に朱子學の隆盛を極むるに至りしも一は此の時代の餘波に外ならず。また此の時代に杜撰なる漢語の行はれそめしも偏



に斯學の攷究普からざりしに依れりと知るべきなり。

以上叙述せしところ室町時代に於ける社會の狀態を觀察し來たれば此の期の文學が細流の手に残りて僅かに一縷の命脈をやうくにしてつなぎ止むるに至りし所以も明瞭なるべく佛教的思想の鎌倉時代にもまして遍在したりし理由も推測せらるべし。况や古風なる文學おほむね衰殘して思想も言語も文章も皆一樣に古今未曾有の變革を詞壇の上に見るの當然なりし理由をや。要するに此の時代の變亂は論なく文學の發生をして一時衰殘の非運に陥らしめたりと雖も再び其の萌芽の不羈自由なる新天地に移らしめたり。就中從來文學の中心なりし京師の騷擾は文學をして朝紳宮娥の手を離れて一層平民的なる邊に向はしめたると共に併せて其の中心をも他に轉せしむべき端緒を開きたり。

### 第三章 歌謠

#### 第一節 歌界の概況

歴代の勅撰歌集 和歌の衰微 連歌の發達並びに  
流行 謠曲の創始

上に述べたる如く此の時代の初つ方は南北朝の兵亂に到るところ修羅の街となりて庶民其の堵に安んずるは稀なりしかども和歌のみは流石に鎌倉時代の餘勢を承けてさまでの非運に到らず故に若し其の頃の歌人の數と詠歌の量とにつきていはゞ決して前代の末造に譲らざるべし。花園上皇をはじめ奉り吉田兼好冷泉爲之、二條爲定、同爲明、足利義詮、頼阿、二條爲遠、宗良親王、慶雲、淨辨等は當時の最も名高きもの其の外歌集に載れるものに至りては殆ど枚舉に遑あらず。されば勅撰の歌集の如きも俄に廢滅するに至らず數十年の間に尙ほ能く數種の撰進ありし程なり。即ち此の時代に入りて先づ世に公にせられたるは北朝の光明天皇の貞和二年南朝にては後村上天皇の正平元年に當るに花園上皇の親しく撰録せさせ給ひし『風雅集』を以て始めとす。上皇の此の集を撰び給ふや當時の風調おしなべて姿詞の艶麗ならむのみ希ひ徒に虚飾摸倣を事とするあまり往々にして卑野に流るゝものあるを慨かせ給ひて姿情共に『新古今』の雄偉瑰麗なる古躰に復せむとするにありき。

其の序文に曰はく「近き世となりて四方のこまわざすたれ誠すくなく偽りおほくなりたれば偏に飾れる姿たくみなる心ばせを旨として古の風は殘らず或は古きこまばな



ぬすみいつはれるさまにつくるひなして更に其のものにまごふ、又心をさきさすきのみ知りてひなびたる姿、だみたき言の葉にて思ひみだるゝ心ばかりをいひあらはす。正しき心すなほなるこそばは古の道なりまこと之れをさるべしさばいへどもことわり迷ひて強ひて學ばすなほち卑きすがたとなりなん、艶なる味巧なる心優ならざるにあらす若し本意を忘れて妄りに好まば此の道ひとへに廢れぬべし。かれもこれも互に迷ひて古の道にはあらす或は姿にかゝらんとすれば其の心たらず、言葉こまやかなれば其のさまいやし、艶なるはたはれすぎ、強きはなつかしからず、凡べてこれにいふに其のこきわりしげき言の葉にてのべつくしがたし、むれを得て自らさきりなん。おほよそ出雲八雲の色に志を染め和歌の浦波に名をかくる人々流れての世に絶えずしておのゝ思ひの露ひかりを磨き玉をつらね言葉の花匂ひを添へて錦を織るさのみ思ひあへるうちに誠の心を得て歌の道を知れる人は猶ほ數すくなくなんありける。(中略)萬の道の衰へよものこきわざするゝを歎く。これによりて元久の昔の跡を尋ねて古き新しき言葉目につき心になふを撰み集めて廿卷ニハヤキさせり名づけて『風雅集』といふ。これ色にうみ情に引かれて目の前の興をのみ思ふにあらす正しき風、古の道末の世に絶えずして人の惑ひを救はんがためなり」

然れども上皇の宣言し給ひたる敝慮は實際に之を『風雅集』の上に見るを得ず彼の集は強ひて奇僻に流れたる觀あり。當時の歌人は先に藤原爲兼の撰進したる『玉葉和歌集』と共に之を排斥したりとぞ。是れ一には當時の歌人何れも二條家の流

派ならざれば冷泉家の歌風を奉ずるものゝみにて毘沙門堂の風に類する歌辭を厭忌せし偏見にも依るべしと雖も亦一には此の集の敝慮に添はざりしにも基かずばあらず例へば

春の歌の中に

正三位知家

たがためぞ賤機山のながき日にこそあや織る春のうぐひす

春の歌の中に

後京極攝政太政大臣

はるの色は花ともいはじかすみよりこぼれて匂ふうぐひすの聲

戀の歌の中に

權大納言公蔭

契りありてかゝる思ひやつくばねのみねども人のやがて戀ひしき

などを見て明瞭なり。是等おほむね單に縁語を用ゐて姿詞を修飾したる外歌情に其の斬新なるものをも亦雄偉幽玄なるものをも認むる能はざるなり。そもそも此の集が上の如き敝慮を以て撰進せられ其の中に散見する歌人も柿本人麻呂紀貫之等を始め歴代のあるかぎり、さては當代の名手を網羅せられたるにも拘はらず其の膚淺軟弱なること、かくの如しとすれば其の他の注意之に及ばざりし



勅撰の如何なるべきかは類推すべきなり。此の集巻の数は廿巻、歌の数は二千二百十首之を春夏秋冬、旅、戀、雜、釋、教、神、祇、賀の十部門に類つ等略、從來の勅撰歌集に異なるところなし。此『風雅集』につぎて世に出てたるを『新千載集』廿卷二千三百五十九首といふ。『新千載集』は又北朝後光嚴天皇の御宇延文四年南朝後村上天皇の正平十四年に二條爲定の撰進せるものなり。三光院此の集を評して曰はく『新千載集』は歌よりも詞ももしろしとさもあるべし。『風雅集』と同じく上代の歌をも載録せりといへども歌情の特に賞揚するに足るものあるを見ず。此の集出で、僅かに四年にして同天皇の貞和二年同後村上天皇の正平十八年に亦『新拾遺集』廿卷千七百五十八首といふもの撰進せらる。選者は二條爲明にして順阿之を完成したりき。『新拾遺集』につぐを『新後拾遺集』廿卷一千五百五十四首といふ。此の集は北朝後圓融天皇の永和元年二條爲遠勅を奉じて撰録に従事せしものなるが未だ篇を終らずして薨去せしかば二條爲重其の後を襲ひ後小松天皇の至徳元年に及びて漸く稿を終へたりき。『新拾遺集』の撰進を距ること二十一年なり。其の後に至り『新後拾遺集』より五十五年を経て後花園天皇の永享十二年二〇九八飛鳥井雅世『新續古今集』とい

ふを奉りぬ。之を勅撰和歌集の終尾とす。其の昔延喜の御代紀貫之が『古今集』を撰次しより此の『新續古今集』の成りしまで其の數總じて二十一世に是れを二十一代集といふ其の間年月を経しこと凡そ五百三十年に亘りぬ。此の外に猶ほ『新葉集』廿卷千四百十五首といふものあり南朝なる後龜山天皇の弘和元年二〇四一北朝の後圓融天皇の永徳元年に宗良親王の撰次給ひて奉りたるを勅撰に准ぜられたるものなり。此の集は元弘以後五十餘年間に於ける南朝の人々の歌を集録せり。其の序文に曰へらく

「秋津島の中、浪の音しづかならず春日野のほさりとぶ火の影しげく見えしかど程なく亂れたるを治めて正しきにかへされしのちは雲の上の政事更にふるまにかへり(中略)一度は治まり一度は亂るゝ世の中なればにや終に又むかし唐土に江をわたりけん世のためしにさへなりにたれど、千早振る神代より國を傳ふるしとなれる三種の寶をもうけつたへましまし(中略)に矣竹のその人數に列りても三代の御門につかへ和歌の浦の道にたづさはりては七十のしほにみちぬるうへ勝事を千ささの外にさだめしむかしは野邊の草こさしげきにし紛れき。心を三の衣の色にそめぬる今は藍間の船さほるべきふしなればかつは老のこゝろをも慰め且は末の世までも殘さんため、かみ元弘のはじめよりしも弘和の今に至るまで世は三つぎ年はいそとせの間假



りの宮に、從ひつかうまつりて折りにふれ時につけつゝ言ひあらはせる言葉どもを玉の蓋金の殿より瓦の窓、繩の扉の内に至るまで人をもちて言を捨てず撰びさだむるところ千歌四し、ちあまり廿卷名づけて『新葉和歌集』といへり云々と

かく『新葉集』の歌は大率南朝の社稷を回復せむと計りし人々の作歌なるを以て他の勅撰歌集の軟弱膚淺なりしに似ず雄壯の調多く讀者をして慷慨悲憤の情に堪へざらしむるものあり。宗良親王が「歸雁を」

かへる雁なにいそぐらんおもひてもなきふるさとの山と老らずや

と詠ませ給へるが如き又は後醍醐天皇が「月前の霞といふ事を詠ませ給ひける」に

かげやぞす月さへ今は馴れにけり都にかはるそでのあらつゆ

と製らせ給ひしが如き、其の他後村上天皇が

百首歌よませ給ひける中に豊明節會の心を

豊明天つをとめのそでまでも代々の跡をばかへしてぞみん

と製らせ給ひ法眼湛助が

後醍醐天皇吉野の行宮におはしましける頃歌めされけるに

月前雁を

あくがるゝ心を月にさきだてゝみやこにかへるみちいそぐなり

と詠めりしなど其の歌情當時の勅撰歌集と異なるを見る。蓋し其の歌の雄壯卓抜なるは勿論詠者直ちに其の肺肝を發いて真情を吐露する趣あること此の集の特色なりとす。彼の聲調稀に調はざるものありて流麗典雅の致或は之がために稍乏しきことありとするも予疑は此の集を以て『新古今集』以來の傑作とするに躊躇せず。『新葉集』は實に我が近古の歌界に於いて掉尾の觀を呈せしものなりと謂ふべし。

かゝれば當代に入りて續出せる諸勅撰歌集は上代のにはいふに及ばず鎌倉時代のみに比してだに其の歌情の劣れるところ多かりしことは推しても知らるべし。况や勅撰歌集の撰進全く世に絶えはてたる以後の状態をや。『新續古今集』の撰進せられし頃には撰者雅世の外今川貞世(了俊)、宗朝、正徹、一條兼良、心敬、宗純(一休)等あり稍下りては太田持資(道瀧)、足利義尚、東常縁、宗祇、肖柏、西三條實隆、宗牧、荒木田守武、三條公條の如き多少其の名世に存するも古人に及ばざると遠く只、僅かに餘光の減せざるありしのみ。蓋し其の頃如何に秘事口傳の弊歌人の間に流傳せしかを



知らば斯道の陵夷するの止むべがらざりしを解するに難からざるべし。そも、歌道の師傳は其の濫觴遠く平安朝の季世に於いて既に之ありしこと并つて記載したるが如し。然るに歌道の師傳は此の時代に入り遂に秘事口傳など唱ふるものとなりて漸次其の弊害を増長するに至りぬ。其は歌道を指南するもの、『古今集』の秘事といふものを設けて容易に人に許さざりし如きをいふなりすなはち『古今集』の中なる「相生の松」を「玉の木」めどの「けづり花」を「三木」といひ「喚子鳥」「いなちほせ鳥」「みやこ鳥」を「三鳥」といひて大切なる秘事とせしが如し。此の時代の中葉以後には殊にこれを重んじ世に古今傳授と稱して其の皆傳を得るを以て一生の面目と爲したる程なりき。是れ其の起因は彼の斯道の師範家二條冷泉及び毘沙門堂の三家に分かれてより各自其の正統を主張し自ら貴うせむがために虚構せしに基くべし。然れども之を傳ふるものは是れ紀貫之が其の昔宇佐の宮に祈り夢想によりて授かりたるを後ち基俊に傳へ基俊又之を俊成に傳へ俊成より更に定家に授けたるものなりといへり。平安朝の末葉より行はれたる歌學さへ歌謡の原理を教ふるにはあらで單に些末なる修辭の一端を消極的に指示するか、

さなくば撰集の趣歌の書式墨の濃淡など諸の舊儀典例を傳ふるに止まりしかば偶、以て詠歌の自由を制限する外利益するところあるべしとも覺えざりしに古今傳授若しくは之に類する口傳の如きは之にもまして無益の業たりしや論ずるまでもなし。

吉田令世曰はく『古今集』は延喜五年に貫之などが詔を承りて撰りとのへたる昔今の歌の集にこそあれ玄妙不思議の深き理こもれる物にはかつてあらす秘事とてかくしも傳へもすべき事はいづこにかはあるべき只讀み見るまゝの古今の歌集なるをや。若し今世にある古今の傳授といふものゝ如くなるすぢならば「あひおひの松」を「玉の木」めどの「げづり花」これを「三木」といひ「喚子鳥」い「なほせ鳥」都鳥これを「三鳥」と云ひていみじき秘事とすなるは愚痴なるたは昔といふべし。凡そ草木鳥獸の名などは昔有りて今無きもあり今有りて昔無きもあり又一つものながら昔と今と名のかはりたるもありて其れを考へ明らめんとはたたやすかられども三鳥三木などは貫之が撰ばん時は皆當時世にありて人も能く知りたるから顯にもよむわざにて今の如くかくし物する事にもあらざりければ貫之それが秘事口傳を作るべきかは。よしや其の事秘事にあらめども三鳥三木などを知り得たりとも歌よむうへの心得には本より用なきわざなれば道の傳授とすに足らず。又七首の秘事七個の大事といふことあり其の説つばきして棄つべき事ともなり。たとへ貫之が袖ひぢて結びし水のさいふ歌を此



歌は三國和合の理侍るなりさて法華經梵網經などを事々しく引きていへる如何である事のあらん。其之いかにも自ら誇る事も我が詠める歌にかゝる傳授を作りなくべきにあらず。又基俊俊成定家いかに文旨至愚の人なりともさすに聞こえたる此道の上手たちのかゝるはらあしき事を構へ出て古今の秘事なりといふべしやは云々と

古今傳授は此の時代の季に東常縁本傳第二節といふもの宗祇に傳へ宗祇之を西三條實隆に傳へ實隆之を其の子公條に傳へ公條より實澄公國を経て細川幽齋に傳へたるを二條家傳といひ宗祇より牡丹花宵拍に傳へたるを堺傳授といひ宵拍より奈良の饅頭屋林宗二に傳へたるを奈良傳授といへり。されば是等の無益なる傳授も如何ばかり當世に重きを爲し、かを知るべく隨うて又當時如何に多く和歌の精神を解するもの、尠かりしかを知るに足るべし。和歌の精神を看過擲擲して一意無益の詮索に従ふ是れ即ち斯道の陵夷を早からしめたる一大原因なるべき。

そも、和歌は斯くの如くにして遂に全く地に委するまでに陵夷せしかども歌界は此の時代に入りてより所謂和歌とは其の方式を異にせる連歌の上に未曾有の發達進歩を見たりき。今や此處に其の概要を敘述せむと欲せば勢ひ從來の連

歌が如何なる地位を騷壇に占有したりしかを略記せざるべからず。

連歌の起源は日本武尊が東夷を征せられしころすでに之ありしことは曾つて記載したるが如し。其の後となりては此のもの隆盛といはむほどの流行をば見ざりしかども尙ほ代々に其の跡たゆることなくして『拾遺』『金葉』の如き勅撰の歌集にさへ一時は短歌に並べて採録せられたりき。さもあらばあれ當時の歌人が連歌を見ることは決して和歌の貴きが如くにあらざり、諸の會合に餘興として機智滑稽を弄して一時の娛樂を得むとするに過ぎざりき。故に其の頃の連歌には後世の如く一定の方式などいふものあることなく單に一首の短歌を上下の二句に分ち其を二人して詠ずるまでの事なりき。されば當時に於ける短歌と連歌との差異は只、一首の短歌を一人にて讀むと二人して詠ずとの別ありしのみ。すなはち當時は通常の短歌も連歌も其の一首を成せるのちに之を唱すれば思想の上にも形式の上にも些の特異なる點だにも絶えてあることなかりき。かくてのち鎌倉時代に入り後鳥羽天皇の頃となり藤原定家同家隆等の出づるに及び稍、其の形式を異にし始めて五十韻或は百韻などと稱して短歌の上下の句を五十句又は百



句と連接すること行はれき。これ從來支那の詩賦に聯句と唱ふるものゝ行はれたるを見て模倣したるものならし。其の思想上の連鎖をもて展轉推移し五十句百句を連接するところ以前の連歌に比すれば其の形體の延長によりて歌情の上にも幾多の妙趣加はりたるや論なし。殊に其の連歌を詠せるものは『八雲御抄』に「連歌をばあらぬやうに引きなし引きなし付くるなり春に久しく秋にて久しきは連歌せぬものゝ集まりたる折の事なり」などいへるが如く努めて同工一體に陥らざらんことに注意せしかば一篇の首尾變化に富みて多趣なるものとなれり。されども當時の連歌も未だ尙ほ全然舊套を脱すること能はず後世に所謂一面見渡しの去嫌打越し景物の指合等に意を留むるとなく多くは長短二句の間の關係に注意するまでなりき。而して其が二句の關係も全く以前の連歌に異ならず單に短歌の上の句下の句といふが如きものにて未だ獨立に各句が二個の思想を表示するものにはあらずりしなり。かゝれば當時にありて連歌を詠せしものは大率通常の詠人に過ぎず隨うて連歌の騷壇に於ける位置も遙に和歌の下にありたりき。

また當時の連歌には其の格調に二様ありて一は上代の連歌の如く機智滑稽を主とし他は常の歌の如く専ら優美瑰麗なるを貴びぬ。かくて其の優美瑰麗なるをば柿の本と名づけてよき連歌として滑稽を主とするを栗の本と呼びてわろき連歌となし是等を別座に分かちて或は又有心の座無心の座ともいへりき。されども前にも記載したりし如く當時に連歌を詠せしものは大率和歌の名手として世にきこえたる定家家隆等を始めとし土御門院順徳院爲家爲氏辨内侍等なりしかば偶々光親宗行等の如く専ら滑稽的なるを詠せるものなきにあらずりしも幾程なく優美なるもの勝を占め滑稽なるは一時其の跡を潜めたりき。此の頃連歌が尙ほ單に歌人社會の玩弄物としてのみ行はれ未だ獨立の位置を騷壇に有つこと能はざりしは其の昔にかはることあるなし。予輩が鎌倉時代の篇において連歌の行はれしことをいひながら特に之を詳述せざりしも一に此の故なり。鎌倉時代の末葉に及びては和歌がやう／＼諸の秘鑰の中に鎖されて其の道ならざるものゝ容易に窺ふこと能ざるものとなりしにつれて所謂地下の輩の文學に志あるもの多くは連歌道に其の身を投ぜしより其の流行一時稍隆盛を極めたり



き。さる程に南北朝の初つ方は天下多事の秋にして所謂月卿雲客も遂に文學に心を委ねること能はざりしかば連歌も亦同じき運命の下に地下の隠士若しくは僧侶の輩にのみ其の餘命を維ぐに至れり。其の頃の連歌師にして其の名の後世に残れるはわづかに善阿法師といふものひとりありしのみなるにても如何ばかり斯道の衰微せしかを推測するを得べし。其の後南朝の勢威次第に衰へ室町幕府の権力やうやく加はれる足利三代の將軍義滿の頃に諸般の藝術再興するとも、連歌も亦た空前の流行をなせり。殊に其の頃より短歌は前にまして秘事口傳といふ事盛行せしかば之がために文人の連歌道に心を傾くるものますます多く其の勢滔々とし一瀉千里にて遂に短歌を壓倒するに至りき。されば從來久しく地下の隠士若しくは僧侶の輩にのみ弄ばれしものもいまはまた殿上の間にも之に意を注ぐものあり否な當時連歌再興の機會に乗じて之が基礎の鞏固を計畫せしものは其の身唱歌道の師範たる二條家に生まれ位攝關の榮を極めたる二條太閤良基となむいへる人なりし。實に良基の手に成れる『菟玖波集』と『筑波問答』と『應安新式』とは方に連歌をして騷壇に一個最好の位置を占有せしめたるものなり。

り。すなはち『菟玖波集』はやがて勅撰の歌集に準ぜられて世の視聽をして連歌の上に注がしめ『筑波問答』は其が智識を世人に扶植してものづから斯道の手引草となり『應安新式』は最も正確に其の形式を規定して既に斯の道に入れるものになり、裨益あらしめたり。されば連歌界は茲に一大革新をなして愈々繁榮の緒につきぬ。其の後の状態を叙するに先だち當時に於ける連歌の大體の形式を説明するはさのみ贅言にあらざるべしと信ず。

よそ連歌は五七五の長句と七七の短句と交互連接して百句より成立するを通常例とす之を百韻とはいふなり。百韻を二分したるを五十韻といひ百韻を十倍して千句と稱す共に百韻につぎて世に行はれたり。百韻の連歌を記載するには通常懷紙四枚を以てし其の第一枚目の表面に八句を記して之を表といひ其の裏面に十四句を書して之を裏と稱し第二枚目第三枚目の表裏は各十四句を記して之を二の表、二の裏、三の表、三の裏といふなり。また第四枚目の表は名殘の表と稱して第二枚目第三枚目の表裏と同じく十四句を記載し其の裏面をば名殘の裏と唱へて八句を記すること第一枚目の表面に於けるが如し。かくて其の懷紙の裏



と二の表と二の裏と三の表と三の裏と名残の表と各二面を合して之を見渡しといひ各懷紙の表裏二面を合したるをば同懷紙と稱せり。其の最初の第一句を發句と呼び次なる句を脇、又は入韻、といひ脇の次なるを第三句と稱し最終の句を舉句といひぬ。又一卷の各短長句を連接するにはそれ〴〵の規定ありて妄りに動かすべからず『應安新式』に記載するところに従へば輪廻、遠輪廻、本歌取、或は一座一句物、一座二句物、一座三句物、一座四句物、一座五句物、可嫌打、越物、可隔三句物、可隔五句物、可隔七句物、可分別物、等諸種の指合去嫌さては賦物の法などを其の大要とす。而して特に當代の連歌をして以前のに異ならしめしものは長短二句の關係が從來の如く二句連接して始めて一個の意味を完成することを短歌の上の句と下の句といへるが如き地位に立てるにあらで一句一句に各獨立の思想を表示するもの、前後思想の連絡によりて相連接集合せることは是れなり。

さて當時連歌を詠せしもの大方皆是等の規定に順はざるべからざりきとせば是れ秘事口傳の究屈なる拘束ある和歌に代ふるに煩瑣なる法則ある連歌を以てするものなれば到底和歌の覆轍を踏襲するに至るべきは豫期するを得べし。され

ども是等の規定は短歌の秘事口傳とは其の趣異なりて只、大やうに一巻の首尾をして變化多からしめ随うて多趣ならしめむと企圖せしものなれば或は之がために時としては同工に流るゝ弊はあるべきも能く其の煩瑣に堪へて完成せむには其のもの大率思想の流轉究極なき觀あるべし。况や其の思想上及び修辭上の工夫は遂に梵灯庵をして此の道に醉はずしては、我が心より出来る連歌あるべからずとさへいはしむるまでに發達せしかば斯かる輩に取りては未だ尙ほ是等の規定はさまでに其の思想の發展を拘束することなかりしをや。

其の頃斯道の達人として世に最も名聲ありしは善阿の弟子救濟なり其基の如きも之に師事したりきといひ傳へたり。其の他周阿、梵灯、心敬、宗砌、兼藏、智蘊、等救濟と殆ど時を同じうして世に出で名もまた相若けり。是等の人々に次ぎて一時連歌道の主權を掌握せるを宗祇とす時の天子より花の本の號を賜はりき。宗祇の弟子に牡丹花宵柏あり宗收、宗長又之に次ぎて其の名世に高かり。是等の詠出せる連歌は何れも本歌調の流派に屬し殊に和歌の師範家たる其基の獎勵によりて興隆せしものから一旦陳套に歸したる歌人的思想も再び新奇なる觀ありき。さ



れど此はやがて又此の種の連歌をして衰微せしむる原因となりぬ剩へ宵柏等の頃より以後世の降ると共に形式上の規定いよ／＼煩瑣なるものとなりしかば是れは其の衰微を早からしむる原因となりけり。

宗祇が集録せる『新菟玖波集』には其の頃栗の本が主張せし俳諧調の連歌は全然排斥せられて隻句だも載ることなかりしに荒木田守武、山崎宗鑑といふもの出づるに及びて斯壇は再び俳諧調の連歌のために風靡せらるゝの止むを得ざるに至りぬ。守武と宗鑑とが俳諧調の連歌を主張するに至りし所以は全く右に云へるが如く本歌調の連歌に於ける規定の煩瑣に赴けるを厭ひしに依るべし。守武の著に『飛梅千句』あり宗鑑に『犬筑波集』あり是等の主とせる點は思想上の滑稽にあらずして單に縁語を用ゐて修辭上のをかしみを企圖せしに過ぎずといへども亦見るべきものあり。况や徳川文學をして異彩あらしめたる俳諧は松永貞徳を待ちて始めて大成せるものなりと雖も其の先驅の功は此の二人に歸せざるべからざるものあるをや。是れより彼の本歌調の連歌は次第に衰へ其の後紹巴といふもの、僅に微光を明滅の間に取りとめしむるも一時的のわざにして程なく嘉例など

の場所に儀式として稀に行はるゝ事ありしのみ。

連歌の外なほ當室町時代の文學をして異彩あらしめたるを謠曲とす。謠曲とは猿樂の能に用ゐる歌曲の謂なり。此の時代の初めには鎌倉時代に引續きて田樂猿樂共に世上に行はれしが後には猿樂のみ獨り盛なりき。當時大社の神事に従ひたる猿樂の諸座には伊勢に和屋、勝田、主門の三座ありて大神宮の神事に従事し近江には山階、下坂、比叡の三座ありて日吉の神事に従事し丹波に本座、河内に新座、攝津に法成寺座ありて加茂、住吉の神事に従ひ大和に外山(後の寶生)結崎(後の觀世)、坂戸(後の金剛)圓滿井(後の金春)の四座ありて春日の神事に奉仕せり。蓋し伴の大社にては其の神祭の時神樂の外に田樂猿樂の技を行ふを當時の式例とせしかども田樂稍廢るゝに及びて猿樂のみ隆盛を極めたるなり。かくて應永の頃大和に結崎次郎清次といふものあり猿樂の巧者なりしかば足利三代の將軍義滿これを寵し同朋となして觀阿彌と呼びき。其の子に左衛門太夫元清といふものまた世阿彌と稱せしが子孫終に觀世の名を唱ふるに至りぬ。此の父子從來の猿樂の能に田樂曲舞等種々の舞曲を折中して古作を改竄し新曲を創作して只管ら之が進



歩を計りしかば之より節調大に整ひ世上の流行一層其の度を高め遂に將軍家の式樂となりて恰も朝廷に於ける彼の神樂、催馬樂などの如くなりき。此の頃の謠曲には始めの如く管に神の功德を讃する神事能のみにあらずして稍複雑なる人事の現象を詩的想像をもて寫せるもあり。是れ其の摸範は支那元朝の雜劇傳奇に取りしこと新井白石が嘗て其の著『俳優考』に云へるが如し。

『俳優考』に曰はく「鎌倉の世の末、室町殿の代の始めに當たりて傳奇雜劇などいふこと元朝に盛に行はれき。其の代には我が國の人も彼の國へ行き彼の國の人も我が國に來たり彼れこれ行きかよひしかば彼の國にすなる雜劇を我が國の人も見もし聞きも傳しを田樂猿樂を業とせる輩やがて彼の國の傳奇などいふことに倣ひて古にありし事の悦ぶべく恐るべく樂むべく驚くべきことなどを歌ひものゝ詞に作りて歌ひ舞ひけるなり」と

是に至りて從來の専ら痴態を装うて滑稽なるをば特に狂言と引離して通常に所謂猿樂の能と區別せり。其の新曲の出でしこと亦此の頃を以て最とす。其の曲の數既に三百番の以上に及びきとなり。

是等謠曲は『謠曲作者考』などには元清、信光等の作と傳へたれども其は甚だ稀なる

ことにして大方は單に其の節譜舞容を一定したるまでなりき。されば其の作者は何れも他にあるべしと思はるれども今は湮滅して之れを知るに由なし。或はいふ、江口、山姥等は一休和尚の作といひ源氏供養は河上神主、高砂、兼平は僧正徹、卒塔婆小町は寶性院宥快の作なりと是れ併しながら正確なる徵證ありといふにあらず。されど當時文筆の業は一般に僧侶の間のみ遺存せる頃なれば要するに釋氏の手に成れるものなること炳然たり。之を其の思想若しくは言詞に就いて稽査するも亦常に彼等の作に係かりしものたるを知るべき證あり。

謠曲の趣向は大抵一樣の脚色にして或は巷談俗説を基とし或は歴史傳記の一事件若しくは一人物を素として以て盛衰流轉の理を説かんとするものなり。されば諸種の謠曲を通じて渾然として貫流せる思想は一に佛教の以外に出づることあるなし。即ち現世は穢土にして未來は淨土なり然るに萬物は皆過去の罪業によりて此の穢土に執着し迷惑して長へに當來の苦を受く故に能く此の境を出でむと欲するものは偏に佛教の加護によらざるべからずといふにあり。此の故に謠曲は大方男女僧俗を問はず禽獸草木の類に至るまで過去の罪業によりて迷執



一方ならざるに能く僧侶が一遍の回向に得度成佛し畢るといふが如きものならざるはなし。其の大體の趣向の往々にして千篇一律に傾く弊の見ゆるは此の如き思想を素として結構したるに基くところ多かるべし。謠曲の結構体裁が支那の雜劇傳奇に類するところあるは其摸範の彼れより出でたるものあるに歸するや論なし。

文章は幾百篇の謠曲皆一様に論ずべからずと雖も幽婉悽愴なるもの其の常にして時に崇高なるものなきにあらず。縁語の用法稍杜撰なることは煩はしと雖も能く莊重なる漢文調と典雅なる國文調の二要素に剩へ佛語を併用して自在に調和したるは謠曲の文詞こそ其の上乗なるものなるべけれ。殊に其の最も麗しきは叙景の文と道行の文と也。されども是等の華麗なる句も多くは之を『白氏文集』『朗詠集』『源氏物語』『源平盛衰記』『平家物語』さては『萬葉』『古今』『新古今』等の成語成句を其のまゝに轉用し巧に綴合したるに過ぎず。一篇の中には語るべき部分と謠ふべき部分とありて語るべきは大抵當時の流行語を以てし謠ふべきは大方七五の調を用ゐると多し是れまた謠曲を見むものゝ注意すべき點なるべし。

さて謠曲は室町時代の文學をして異彩あらしめたる價值あるものなれば出來得るだけ精細に研究せむと必要なるべし。されどもかゝる略史にありては固より其の精細を盡くすべくもあらず。讀者しばらく次に掲ぐる「高砂」の曲に就き予輩が前に略述せることゝ比照して其の如何なるものなるかを推知すべきなり。

## 高砂

ソキ次第「今をはじめの旅衣日もゆくすゑぞ久しき。詞「そもくは九州肥後の國阿蘇の宮の神主友成とはわが事なり。われいまだ都を見ず候ふほどに此の度おもひたち都に上り候ふ又よき序なれば播州高砂の浦をも一見せばやと存じ候ふ。道行「旅衣末はるく、の都路をけふ思ひたつ浦の波舟路のどけき春風もいく日來ぬらん跡末もいざ白雲のはるく」とさしも思ひし播磨がた高砂の浦に着きにけり。

シテツレ一聲「高砂の松の春風ふき暮れて尾上の鐘もひしくなり。ツレ「波は饑の磯がくれ二人「昔こそしほの満干なれシテサシ「誰れをかも知る人にせん高砂の松も昔の友なちで過ぎ來し世々は白雲の積りく、て老の鶴のねぐら



に残る有明の春の霜夜の起き居にも松風をのみ聞き馴れて心を友と菅菴の思ひを述ぶるばかりなり。二人歌「おとづれば松に事問ふ浦風の落葉衣の袖はへて木陰の塵を搔かうよ所は高砂の尾上の松も年ふりて老の波もよりくるや木の下陰の落葉かくなるまで命ながらへて猶いつまでか生の松それも久しき名所かな。ワキ詞「里人をあひ待つところにて老人夫婦來たれりいかに是れなる老人に尋ぬべき事の候ふ。シテ詞「こなたの事にて候ふか何事にて候ふぞ。ワキ「高砂の松とはいづれの木を申し候ふぞ。シテ「唯今木陰を清め候ふこそ高砂の松にて候へ。ワキ「高砂住の江の松に相生の名あり當所と住の江とは國をへだてたるに何とて相生の松とは申し候ふぞ。シテ「仰せの如く古今の序に高砂住の江の松も相生のやうに覺えとありさりながら此の尉は津の國住吉のもの、是れなる姥こそ當所の人なれ。知る事あれば申させ給へ。ワキ「ふしぎや見れば老人の夫婦一所にありながら遠き住の江高砂の浦山國を隔てゝ住むと云ふはいかなる事やらん。ツレ「うたての仰せ候ふや山川万里を隔つれど互に通ふ心づかひの妹背の道は遠からず。シテ「まづ案じても

御覽せよ。シテツレ「高砂住の江の松は非情のものだにも相生の名はあるぞかし。ましてや生ある人として年久しくも住吉より通ひ馴れたる尉と姥は松もろとも此の年まで相生の夫婦となるものを。ワキ「いはれを聞けばおもしろや。さてくさきに聞こえつる相生の松の物語を所にいひおくいはいれはなきか。シテ「昔の人の申しは是れはめでたき世のためしなり。ツレ「高砂といふは上代の萬葉集のいにしへの義。シテ「住吉と申すはいま此の御代に住み給ふ延喜の御事。ツレ「松とは盡きぬ言の葉のシテ「榮えは古今あひ同じとシテツレ「御代をあがむるたとへなり。ワキ「よくく聞けばありがたや今こそ不審春の日のシテ「先やはらぐ西の海のワキ「かしこは住の江シテ「こは高砂ワキ「松も色そひシテ「春もワキ「のどかに地「四海波しづかにて國も治まる時つ風枝を鳴らさぬ御代なれやあひに相生の松こそめでたかりけれ。げにや仰ぎても言ふもあるかや斯かる世に住める民とてゆたかなる君のめぐみありがたき。

ワキ詞「なほく高砂の松のめでたきいはれくはしく御ものがたり候へ。地



クリ「それ草木こゝろなしとは申せども花實の時をたがへず陽春の徳をそなへて南枝花はじめて開く。シテサシ然れども此の松はそのけしきとこしなへにして花葉時を分かず地四つの時至りても一千年のいろ雪のうち深く又は松花のいろ十かへりとも云へり。シテかゝるたよりを松が枝の地言の葉草の露の玉心をみかく種となりてシテ生きとし生けるもの毎に地敷島のかけによるとかや。クモしかるに長能が言葉にも有情非情のその聲みな歌にもるゝ事なし。草木土砂風聲水音まで萬物のこもる心あり。春の林の東風にうごき秋の虫の北露になくもみな和歌の姿ならずや。中にも此の松は萬木にすぐれて十八公のよそほひ千秋の緑をなして古今の色を見ず始皇の御爵にあづかるほどの木なりとて異國にも本朝にも萬民これに賞翫す。シテ高砂の尾上の鐘の音すなり地曉かけて霜はおけども松が枝の葉色は同じ深みどり立ちよる陰の朝夕に揺けども落葉の盡きせぬはまことなり松の葉の散りうせずして色は尙ほ正木のかづら長き世のたとへなりける常盤木の中にも名は高砂の末代のためしにも相生の松ぞめでたき。

ロギン地「げに名を得たる松が枝の老木の昔あらはしてその名を名のり給へや。シテツレ今は何をかつゝむべき是は高砂住の江の相生の松の精地夫婦と現じ來りたり。地ふしぎやさては名どころの松の奇特をあらはしてシテツレ草木こゝろなければども地かしこき世とてシテツレ草木も木も地わが大君の國なればいつまでも君が代に住吉にまで行きておれにて待ち申さんと夕波のみぎはなる海人の小舟にうち乗りて追風にまかせつゝ沖の方に出でにけりや沖の方に出でにけり。ヨキ歌高砂や此の浦舟に帆をあげて月もろともに出でしほの波の淡路の島陰や遠くなるをの沖すぎてはや住の江に着きにけり。後シテわれ見ても久しくなりぬ住吉の岸の姫松いくよ經ぬらん。むつまじと君は知らずや瑞籬の久しき世々の神かぐら夜の鼓の拍子を揃へてすゝしめ給へ宮つこたち。地西の海あをぎが原の波間よりシテあらはれ出でし神松の春なれやのこんの雪の朝香がた地玉藻とるなる岸陰のシテ松根によつて腰をすれば地千年の緑手に満てりシテ梅花を折つて頭にさせば地二月の雪ころもに落つ。



ロギン地」ありがたの影向や月すみよしの神遊御影を拜むあらたさよ。シテ  
 げにさま／＼の舞姫の聲もすむなり住の江の松影もうつるなる青海波とは  
 これやらん。地神と君との道すぐに都の春にゆくべくはシテ、それぞ還城樂  
 の舞。地」さて萬歳のシテ、小忌衣地」さすかいは悪魔を拂ひ、をさむる手には  
 壽福をいだし千秋樂には民を撫て萬歳樂にはいのちを延ぶ。相生の松風颯  
 ヲの聲ぞたのしき。

## 第二節 重要なる歌人

頼阿法師 和歌の四天王 宗良親王 東常縁

當室町時代の和歌は大體よりいへば衰微の趣ありきと雖も既に本章第壹節にお  
 いていへるが如く尙ほ勅撰の歌集又は其の他の集に其の名を列らねたる歌人の  
 數決して少からざりき。就中卜部兼好、冷泉爲之、二條爲定、全爲明、足利義詮、二條爲  
 遠、宗良親王、慶運、淨辨、今川了俊、飛鳥井雅世、常光院堯孝、太田道灌、足利義尙、僧正徹、東  
 常縁、西三條實隆等其の名最も世に聞こえたり。されども是等の歌人も大體既に  
 衰微の趣ありたる歌界の事なれば一々取りいで、評隲すべき程顯著なる特色あ

りしにあらず。故に此處には只、頼阿法師、宗良親王及び東常縁の三人に道灌と實  
 隆とを附記し當代の歌人を代表せしめて聊か之が略評を試みむとす。

頼阿は下野守光貞の子にして後伏見天皇の御宇正安三年に生まれ俗名を二階堂  
 貞宗と呼びき。二十四歳の頃叡山に入りて佛學を修め又高野に登りて感空と號  
 せり。其の後京師に歸り四條の金蓮寺に住し更に名を頼阿と改めき。頼阿性來  
 和歌を好みて藤原爲世に従ひ其の蘊奧を究めしが爲世歿するに及び其の己れを  
 知るものなきを歎きて復歌を作らざりきといふ。其の頃兼好、慶運、淨辨と共に和  
 歌の四天王の名ありき。頼阿嘗て歌會に臨みけるに慶運また其の坐にあり題多  
 くして詠者少かりしかば頼阿慶運共に堪能者たる故を以て各六首の題を採りて  
 詠ずることとなりぬ。しかるに頼阿たま／＼所用ありて題を分かちたるのち其  
 の坐を起ちて他に往きけるに慶運戯れに其の題を取りて己が得たる題と相替へ  
 己れは即ち頼阿の得たる題六首を詠じて筆者に交附せり。頼阿暫くして歸り來  
 たり將にちのが題を採りて詠まむとするに藝に得たるものに異なりしかば驚く  
 ものから徐に筆を執り咄嗟の間に六首を詠じをはりて之を筆者に附せり。其の



詠せしところ巧麗能く尋常人の企及すべきところにあらずりしかば慶運すなはち之を稱し且つ其の戯能を謝しきといふ。彼れの歌は爲世を師としたる程ありて思想は舊套別に賞すべき點少かりしも一首の聲調は流麗にして繊細なる能く當時を代表するに足れり。

稀戀と云事を

おけわたる雲間の星のさのみなどまれになりゆく契りなるらん

千五百番

朝日かげにほへる山の櫻花つれなくきえぬ雪かとぞおもふ

といへるは頼阿みづからいかなる病中にも此の歌を吟ずれば心のはれよとなるといひける歌なるが其れだに想の上には指して賞揚すべき點あるとなし。其の他なほ

入道二品親王家五十首歌に雉

月はなほかすみてのころかた岡のあしたの原に雉子鳴くなり

といへるを見ても艶麗巧緻或は畫圖に似たる趣致はあるも奇抜なるところは更

に認むること能はざるなり。されども當時以後は二條家の風一世を靡かし歌人大方かゝる風體を以て絶好の標準と爲し、かば頼阿の歌は草庵躰と呼ばれて一派をなすに至れり。今川了俊の『落書露顯』に曰はく

「又近代は歌の聖の如くに頼阿法師をば人々存して草庵さかいふ家集をのみ或はへつらひ或は盗みよむどもがらも侍るにや」

と、其の時代の賞賛を博せしさま、以て見るべし。光嚴天皇いたく頼阿の歌躰を愛して輓近の歌風衰へたるを回復せむとし貞治二年攝政二條良基と共に問答數篇を著はさしめ以て後世の龜鑑たらしめき。之を『愚問賢註』といふ。頼阿また足利尊氏の招きに應せしとも度々に及びきとなり。後龜山天皇の元中元年三月十三日雙林寺において逝りぬ。齡正に八十四。其の家集を『草庵集』といふ其の歌躰を草庵躰といへるも之に依るなり。其の外に『井蛙抄』といふものあり専ら詠歌の式例等を雜録す。また藤原爲明が『新拾遺集』を撰録せし時未だ果さずして薨せしを頼阿繼ぎて戀の部以下を集成せりし由は既に大略記載したるが如し。四天王の中に慶運と淨辨とは稍々頼阿に劣るところあるべきか兼好は敢て頼阿に譲ら



ずといへども彼れは寧ろ散文家として高名の人なれば今は略しつ。其の他の歌人は推して知るべし。

然るに其の頃頼阿と稍時を同じうして而も多少の特色を具へて一方に對立せるものありき之を宗良親王とす。宗良親王は後醍醐天皇の皇子にして母は藤原爲子といふ親王は花園天皇の正和元年に生まれしが年十歳にして僧となり尊澄と號し妙法院に住して三品に叙せられ天台の座主となりぬ。元弘元年八月帝笠置に幸するに及び尊澄御兄尊雲親王と與に僧兵を糾合して佐々木時信と辛崎の濱に戦ひて之を走らせしが門徒中敵に内應するものありて遂に捕へられ長井高廣の家に拘せらるゝと二年に及びぬ。其の後讃岐の託間に遷りしが四海一時平定に歸せしかば尊澄四國の兵を率ゐて京師に歸り再び座主となり建武二年二品に叙せられき。延元元年足利尊氏叛して京師に迫るに及び父帝延曆寺に幸し尊澄を一品に叙し以て僧徒を督勵せしめつ。座主の一品に叙せらるゝは此の時を始めとす。されども是れより南朝常に利あらず父帝愛憤の中に崩御ましまししかば尊澄遺憾やる方なく遂に髮を蓄へて名を宗良と改め上野親王或は信濃宮と稱

し以て宗廟を回復せむとを謀りぬ。後村上天皇即ち親王に勅して中務卿に任じ征東將軍となし四方の賊を討せしめつ。親王即ち遠江に駿河に甲斐にさては信濃美濃越中越後に轉戦して只管ら平定を努むといへども時我れに利ならず流離竄遁備に艱苦を嘗めき。さる程に後龜山天皇の末年に至りては南朝愈衰微し詔勅も次第に行はれずなりしかば親王は文中三年吉野に詣り天授三年遂に長谷寺に入りて復僧と爲り尋いで信濃に往き後また河内の山田に寓しき。弘和元年十二月『新葉和歌集』を奉りぬ是れ嘗て撰進しけるを後龜山天皇聞こしめして勅撰に准ずる由仰せ下されしかば重訂して奉れるなり。此の時御年七十と聞こえしが其の終はる所を知らず隨うて終焉の年月また知るに由なし。其の家集を『李花集』といふ。親王の境遇既にかくの如くなりしかば隨つて其の歌も

春毎にかはらぬ花を見るにもいとわづらひ果てたる身のをしき思ひしられて

老木まで花の咲きけりうたてなど我が世の春のすくなかるらん  
住みあらしたる前栽の中に撫子の一むら花さきて見えけるに



今さらに塵をもたれか拂ふべき荒れにしやどのとこ夏の花  
の如き又は

五三〇

萩の風の吹きける比よみ侍りし

もの思ふ人のこゝろぞ萩の葉に風も吹きあへぬ秋を知りける

の如く見るもの聞くものにつけて其の悲憤の胸中を語らざるもの稀なり。故に  
表面には悲憤の見えざる歌にても

中院准后歌よみて吉野より見せ侍りし中に九重の御階の櫻さ

ぞなげに昔にかへる春を待つらんとありしそばに書き加へけ  
る

きみすめばこれもみはしのさくら花むかしの春にかはらざるらん

の如くなほ裡面には明らかに哀切なる情感の迸るを見る。縦令親王の詠は措辭  
婉曲奇巧なるもの少なきにもせよ其の情の激越なる直ちに肺肝を吐露して物に  
寄する概あり。されば一見したるところは平語めきたる趣ありて膚淺なるが如  
く思はるゝとあるも反覆吟誦するにつれて同感の情を衝動せざる者少し。此の

點においては所謂二條家の風の一讀趣味津々たるが如く覺えて漸次に膚淺に赴  
くとは方に反對の地位に立てるものといふべし。蓋し親王の境遇彼の如く其の  
精神はた常に勤王の一途にありけるが故に其の詠歌此の如く北朝の祿を食みて  
優遊せる歌人輩のとは其の趣の異なるどころありしも自然の數なりとす。親王  
の詠歌は以て『新葉和歌集』を代表せしむべくやがて又南朝に於ける歌人の詠を代  
表せしむるに足るべき也。

其の後今川了俊(一九八五—二〇八〇)飛鳥井雅世(三〇五〇—二二一〇)五常光院堯孝  
(二〇五一—二二一五)僧正徹(二〇四一—二二一八)等輩出して其の名世に聞こえた  
りと雖もさしたる特色の評すべきものありしにあらざり足利將軍義尚(二二三三—  
二二四七)の如き亦然り。太田持資(法名は道灌)二一〇五—二二四六)出づるに及び  
其の聲調

朝花

あらし吹く高嶺は雲の色かへて花より明くるあさくまの宮  
の如き又は



勝元朝臣短慮不成功といふ昌黎の作りし詞など消息のはしに書  
きつけて此の心ばへを問ひ給ひしかば

いそがずはぬれざらましを旅人のあとよりはるゝ野路の村雨

といふが如き或は雄壯或は清新當時に卓越するものありしも其の身武人なりしかばこれはた未だ親しく歌界に馳逐して一世を動かすに足らざりき。其の集を『慕景集』といふ後世其の歌躰を慕ふもの激賞して措かず遂に將軍實朝の風骨を得たるものとなせり。

太田道灌と時代殆ど相前後して東常縁(三〇六一—二一五四)といふ人ありしが籍を武人に列せるなど亦頗る道灌に類するところあり。されども常縁が歌界に及ぼせる影響は遙に道灌に超えたるものあり。常縁は美濃の人、父を益之といふ母は藤原氏、常縁は其の三男なりき。祖先は千葉介常胤の六男にして胤頼と呼びぬ。胤頼嘗て其の食邑下總の國香取郡東の莊に住せしより東氏を稱するに至れりとぞ。東氏の家は世々和歌を嗜みき。即ち胤頼の子胤重は藤原定家に就いて和歌を學び重胤の子胤行は承久二年初めて美濃國郡上郡篠目城を築き藤原爲家の女

を娶り古今傳授を受けて後に素還と號せり。素還の曾孫益之は即ち常縁の父なるが當時の歌人今川了俊、飛鳥井雅世、常光院堯孝頼阿の曾孫、僧正徹徹書記さし招善説等と相交り素明又は平田或は格物、鐵堅など號し和歌を以て其名世上に聞こえたり。されば常縁が其の父の教訓と又父の交友等より傳習せる事柄によりて如何に其の身を益したるところ多かりしかは容易に推測するを得べし。其の作『東野州聞書』と唱ふるものを見るに招月庵へ参りてといひ或は常光院云ひけるはなど書けるところの多きは明らかに此の推測を證明するものなり。常縁兄の後を承けて家を繼ぎ下野守に任じ幕府に昵近せり。康正元年千葉氏分かれて兩流となり下總國之がために擾亂に及びしかは常縁則ち足利將軍義政の命を奉じて之を鎮め以て東の莊に居りぬ。さる程に應仁二年京師大に亂れ山名宗全兵を遣はして郡國を侵掠し郡上城を抜き齋藤妙椿常縁集にはを念とありしてこれに據らしめしかば常縁遙かに變を聞きて憂憤惜く能はず父素明のために冥福を修め僧を供養し和歌一首を詠じて之を上りぬ。曰はく

あるが中にかゝる世をしも見たりけん人の昔のなほも戀ひしき



と。妙椿も亦當時和歌を以て世に聞こえしものなりければ偶、此の歌を聞くに及び感吟之れを久うして曰はく、これ我が和歌の友なり、今山東に漂居し城邑を失ふ憤懣察すべし信義を友に失ふべからず願はくは常縁和歌を詠じて吾れに贈らば即ち吾れ彼の邑を復すべしと。常縁之を聞き濁世亂邦といへども猶ほ此の如き人あるを喜び乃ち和歌十首を詠じて贈りぬ。かくて明年の春に至りしに和歌贈答の事幕府に聞こえしかば將軍令を常縁に傳へて其の子を下總に止めて京に歸らしめ五月更に妙椿をして常縁の舊邑を復せしめき。常縁の名是よりますます世に聞こゆるに至りぬ。文明三年十二月古今和歌傳授を宗祇に傳へぬ。初め宗祇歌道を常縁に問ふや常縁和歌を以て之に答へき。

いまさらに身のをこたりぞ知られける問はずばいかに敷島の道

後土御門天皇常に常縁の名を聞召しけるが詔を下し美濃より召して和歌再興の道を説かしめ給ひき。常縁乃ち京師に朝して留まること三年歌道を諸家に傳へて其の邑に還れり。准后藤原政家右大臣藤原公敏足利將軍義尙等皆常縁の教ふるところなり。明應三年(一一五四)逝りぬ年九十四。法名を素傳と號せり。常縁

が宗祇と贈答せるところ『東野州消息』あり又歌集あり世に傳へて之を『常縁集』といふ。前に引用せる『東野州聞書』と唱ふるは歌道に關する雜録なり。

常縁が武人の身にして歌界に重きを致し、こと斯くの如し。されども其の詠歌はさまざま俊秀なるところありとも見えず前に掲げたるにても既に知らるゝ如く多少真情の流活するものある外聲調平板にして着想はた常套なるを免れざる觀あり。例へば尙ほ

夏月

いりあひの鐘聞きすて、見るほどもあかずかたぶく夏の夜の月

島雪

すみよしの松のあらしの音さえて淡路の島に雪を見るかな

の如きを見ても知るべし。されば常縁の斯界に尊重せられたる所以は主として彼れが古今傳授の如き歌道の舊儀典例に通せりしによるめり。之につけても當時の歌界の如何ばかり衰微せしかを知了するに足らむ。

常縁より少しく後れて冷泉政爲(一一〇七—一一八三)後柏原天皇(一一二四—一一



八六西三條實隆二一一五—二一九三等最も世に知られき。政爲に『碧玉集』後柏原天皇に『柏玉集』實隆に『雪玉集』といふ家集あり世に三玉集と呼ばれて珍重せられき。就中『雪玉集』最も行はれぬ。實隆は内大臣公保の次男にして其の家世々公卿の班に列れり。長祿二年從五位下侍從に任ぜられ遂に正二位内大臣に至りぬ。永正十三年薙髮して僧照全刺斗に就いて佛戒を受け號を堯空と呼び又耕穩刺斗ともいひき。是れより常に緇衣を着て諸國の勝地を探り遂に高野に至りぬ。此の行『高野參詣日記』の著あり。當時坊間書籍に乏しかりしかば實隆自ら司馬遷が『史記』を謄寫せりとなむ其の精勵思ふべし。實隆管に和歌を能くせしのみならず又詩賦連歌等にも巧なりき。其の歌の風姿多くは纖麗能く當時の風を代表するに足る家集及び『高野參詣日記』の外『源氏細流抄』の著あり。其の子公條二一四七—二二二三といふものもまた歌文に長じたりき。其の著書に『石山紀行』『吉野詣記』『源氏明星抄』等の名稱高し。

### 第三節 重要なる連歌師

當時高名なる連歌師

二條關白良基

宗祇法師

荒木田守武及び山崎宗鑑

當代に於ける連歌は文學史上前後無比の流行を極めたりしとて單に連歌のみを以て其の名聲の世上に噴々たりしもの殆ど枚擧するに遑あらず。今其が中の最も盛名ありしものゝみを取り出でんも之を始めにしては善阿、順覺、救濟、信照、良阿、二條關白良基等あり是れを中頃にしては周阿、梵灯、心敬、宗砌、兼載、智蘊等あり稍下りては宗祇、肖柏、宗長、宗牧、荒木田守武、山崎宗鑑、里村紹巴、全昌叱の徒前後相輩出せりき。されども是等多數の連歌師を擧げて悉く評論せむはかゝる略史の到底能くすべきにあらず且つは又精密なる批評にあらざるよりは其の特質を指示せむことも頗る難事なるを以て予輩は其の中に就いて唯四人のみを掲げて之が略評を物せむとす。連歌の改革主唱者若しくは獎勵者として二條關白良基之が大成者として宗祇法師、俳諧調の再興者として荒木田守武及び山崎宗鑑即ち是れなり。

二條良基は藤原師輔の後裔にして關白左大臣道平の子なり。後醍醐天皇の御宇、元應二年に生まれしが嘉暦二年八歳にして元服を加へ禁色を聽されて正五位下



に叙せられ權中納言に累進せり。後醍醐天皇西國に遷幸せさせ給ふに及び良基は前任のまゝに北朝の光嚴天皇に仕へまるらせしが後醍醐天皇御歸洛あらせられてのち復仕へ奉り建武二年權大納言に榮轉したりき。さるほどに後醍醐天皇再び吉野に遷らせ給ひ皇統愈南北兩朝に分かるゝに至り彼れは猶ほ都に止まりて遂に光明崇光、後光嚴、後圓融の四天皇に歴事し内大臣、左右大臣を経て氏の長者と爲り牛車兵仗を聽され太政大臣從一位に至りぬ。天授二年更に三后に准せられ弘和二年四月攝政となり元中四年職を辭し五年四月また攝政となり六月攝政を罷めて關白を拜し即口之を辭し奉り尋いで逝りぬ。年六十九。諡號を普光園院とす。

良基博覽強記にして文才あり『扶桑拾葉集』を披けば其の十四の卷上下貳冊は悉く此の公の著作なるを見ても其の程知らるべし。和歌また二條家の流を繼承して其の蘊奥を究極せり。其の歌の風躰如何は既に二條家の流派なりといへば今更めて之を云はずとも讀者の大方推測するところならむ。歌學に關する著に『近來風躰抄』あり『愚問賢註』あり『筑波問答』ありき。『近來風躰抄』は近世に於ける和歌の

風躰を批判せるもの『愚問賢註』は頓阿法師と歌道の奥義を論議して記録せるもの既に略云へるが如し。『筑波問答』は全く連歌に關する公の意見を知るべき唯一の好資料にして又斯界の好指針たり。別に古來の連歌を集めたる書に『菟玖波集』といふもの二十卷あり、これまた當時斯界の好模範として世に稱へられたるのみならず勅撰和歌集に準すべき勅命をさへ賜はりき。其の外著書に『御禊記』『百寮訓要鈔』『榊葉日記』『小島の口ずさみ』『貞治御鞠記』『諒闇記』『大嘗會記』『雲井御法』『白鷹記』『山鳥の慰』『魚鳥平家』『小夜のねざめ』等あり。其の祖先師輔以來世々攝關たりしを以て其の家もと舊記に富めるが上に良基汎く諸家の秘書を借覽して謄寫せしめしかば奇書珍籍の秘して世に傳はらざるもの多く之を藏しき。其の家世々に藏する所の家記を世に『二條殿日次記』と稱せり。故に朝廷の儀式、武家の禮法等にして人皆疑議ある時は必ず其の家に就いて之を質したりとぞ。其の著作の公事儀禮に關するもの多かるもまた之に依るなるべし。良基また常に好みて庭園を修め池を龍躍といひ橋を綠楊といひ又御榻藏春亭、洗暑聽松の諸閣、觀魚臺、古籟泉、梅香、水明等の樓榭を營み邸宅頗る風致を盡したりといふ。



良基が其の『筑波問答』に述べたる説は從來の歌學書に云へるとは稍、其の趣を異にして大小連歌道に於ける當時の意見を代表するものあるが如し。彼れは先づ連歌の由來を説き更に其の効用を擧げむとして、連歌の國の政事まつりごとの助けなどに侍るべきなど申す人のあるはあまりの事にや」といふ問に答へて

かへすくも事あたらしきおん尋れかな  
とて論なき旨を明言し次に連歌は善事にてあれば此の世一ならず菩薩の因縁に侍るべしなど申すはあまりの事にや」といふ問には

おほかた過去現在の諸佛も歌をとなへ給はずといふ事なし。あらゆる神佛いにしへの聖たちも歌にても多く群るをみちびき給へば今更申すにも及ばず。連歌は殊に心あらん人おもひ入りてし給ふべきにや

と答へて其の然るべき由を明らかにしぬ。連歌を以て國政を補佐する效ありとし又は菩薩の因縁に協へりとするは一切の萬物を擧げて厚生利用の目的ありとするにおなじく共に拘泥附會の説たるを免れずと雖も當時の人の斯道に關する信仰は全く此處にありて連歌の位地もこれがために高められし事あるは忘るべ

からざる事實なりとす。良基更に一篇の變化に着目して

おほかた秀逸の體は定まれる事なればいつもうるはしき姿をこそすべけれ其の時の好士によりてちまかほる事もあるべき也。千句のはすめの一二、百韻などかばらまおとせてし侍る可きにや、當座の百韻は如何程もうきくささめめかして面白きやうにすべし。千句になりぬれば發句よりたけたかく疵もなき連歌まことしきをしとくとし侍るなり。又たゞの連歌にも一の懷紙より面の程はしと、やかの連歌すべしにて、なほもうきたる様なる事なばせぬ事なり。二懷紙よりさいめき句をして三四の懷紙なば特に逸興あるやうにし侍る事なり。樂にも序破急のあるにや。連歌も一の懷紙は序、二の懷紙は破三四の懷紙は急にてあるべく鞠にもかやうに侍るとぞ其の道の先達は申されし

といひ發句の特に肝要なる所以を説きては

當道の至極の大事發句にて侍る也發句わろければ一座皆けがる。されば堪能宿老にゆづりて末座は斟酌あるべきなり。よき發句は皆同類のがれてあたらしき又侍りがたし、かへすく、道の至極にて侍る也忽せにし給ふべからず。先發句のよきと申すは深き心のこもり、詞やさしく、けだかく、あたらしく、當坐の儀に叶ひたるを上品とは申す也一も缺けたらんばうるはしき秀逸にてはあるべからず

といひ脇句に付いては



脇句は發句かうけてする事なればさのみ心こもる事はあるまじけれど是れもあまりに平假ならんはわるく只するくと詞やさしく心あらん事をし給ふべき也、わづらはしきやうなる脇句はかへすくゝわるき事なり。たとへば『万葉』などの長歌に後に反歌さて長歌の心なうけて三十一字の歌をよみ添へ侍るにや、それは長歌の心なうけて而もつゞまやかにする事也。脇句もさやうにや侍らん、但發句のなな心なる様なる事にわろく侍る也別の事なのかねやうにすべきにや、さぞ古人申し侍りし

と説きぬ。その他連歌は前念後念をつがず又盛衰憂喜のさかひをならべて移りもてゆくさま浮世のありさまに異ならず昨日と思へば今日にすぎ春と思へば秋となり花と思へば紅葉にうつろうさまなどは飛花落葉の觀念もなからんやといへるは連歌の體さながら宇宙の万象に類似するところあるより下だしたる見解にしてやがて一篇の變化各句の推移を貫ぶを見るべし。されども其基の企圖したる一篇の變化は森羅せる自然の物象千變萬化しておのづから統一あるとは異なりて早く既に連歌の鑄型を與ふるが如き弊あるを見る。一の懷紙の面の程はしとやかの連歌をすべく二の懷紙よりさゝめき句して三四の懷紙をば特に遊興あるやうすべしと云へるは樂に序破急あるが如く連歌をして最も趣味あらしむ

べき最要の結構なるべしと雖も其基のいへるところは唯一の結構と思惟する傾向あるにあらずや。縦令ひ其基の意はこれを唯一の結構と見做せるにはあらずきとするも後世の連歌は全く之を鑄型として結構せられ遂にまた見るべきものなきに至れり。况や連歌の替古は天才あるものも尙ほ忽諸に附すべからずと説きながら其の思想の範圍を『万葉』『日本紀』『風土記』さては『源氏』『伊勢』等の物語『古今』以來の撰集にのみ限りて普く詩材を天地間の万象に求むべき所以に説き及ばざりしをや。予輩は實に其基の『筑波問答』に云へる説は斯道に於ける後世の證言となりしを認識すると同時に來者をして多少誤解せしむべきところあり之がために連歌をして遂に短歌と同じく持法のものとならしむるに至りしを信ず。『菟玖波集』は後光嚴天皇の御宇文和五年に撰集せる者にして、やがて勅撰に準ぜられき。卷の數すべて二十卷。此の集は日本武尊の筑波の詠よりはじめ代々の連歌を網羅して當時の世に至りぬ。世の連歌に志せるもの彼の『筑波問答』と共に重寶とせるのみならず予輩が代々の連歌の變遷を推究するとを得るも全く此の集のあるに因るなり。されども其の採録せる連歌は彼の古今の結構に差異あ



りしに拘はらず即ち上古の連歌は單に長短二句を連接し鎌倉時代已後の百韻五十韻等を一篇の首尾とせしもの多かりしに關せず共に只長短二句のみを録して百韻五十韻等一篇の關係を示さざりしは遺憾なりとす。およそ連歌の集に於て百韻五十韻等一篇の關係に着意せず單に長短二句を録せるもの此の集のみに限らめと雖も此の集が後世の模範となりしだけ予輩は此の集に對して之を惜まざらばならず。されば既に云へるが如く連歌の趣致は主として一篇の變化打越去嫌等の如何にありと雖も世々の連歌の後世に殘留せるもの大方只長短の句の關係のみに限るとすれば讀者もこゝには此の關係を知るのみにて姑く満足せざるべからず。而して此の『菟玖波集』に見えたる連歌の風姿風情は集録せる旨意たゞ古今の連歌を後世に傳へむとするにありて傑作を撰擇せるにあらざるが故に玉石同架の觀あると云ふまでもなき事なりとす。別著『應安新式』と唱ふるは其基が其の師救濟等と議して連歌の法式を規定したるもの其の旨意はた一篇の變化を企圖するにありき。後世連歌の法式は多少追補改竄するところありきと雖も大方其の標準のこゝに出でざりしは稀なり。

其基の連歌は其の身もと和歌の師範家たる二條の流派を承けし程ありて長短の二句おのづから短歌の上下句の關係を有するを免れざりき。例へば

家の千句の中に「旅のたもとのつゆとこそなれ」といへるに

ふるさとに思ひおきたるひとありて

と附くるが如き又は

文和二年六月世の中しづかならぬ事ありて美濃國小島といふ所へ行

宮にて侍りけるに同月彼處にて連歌し侍りしに「をしまの里はたゞ松

の風」と侍るに

旅にあるみのゝをやまのうき秋に

と附けたる如き共に其の一斑を知了するに足るべし。されば其の風體も大方二條流の短歌の如く優美瑰麗を主とせしのみにて思想は平凡なるものなりき。故に予輩は彼の連歌就中長短二句の關係を記せるものを見たるのみにては彼れが何故に斯道に於ける中興の祖と仰慕せらるゝに至りしかに就いて疑訝の念なくばならず。蓋し彼れの『筑波問答』と『菟玖波集』と『應安新式』とは能く彼をして



後世の欽慕を博せしむるに足るべかりきと雖も彼れの詠はた一篇の變化打越去嫌等の工夫に妙なるところありしにあらざるなきを知らむや。

良基の薨後には宗祇(一一一五)心敬(一〇六七—一一三六)猪苗代兼載(一一三〇—一一五八)等の諸名家續出して騷壇益繁榮の運に會せしが宗祇法師出づるに及びて斯壇は爲に空前絶後の偉觀を呈したりき。

宗祇は紀伊或は近江の在田郡藤並村の人俗姓を飯尾と稱しき。稱光天皇の御宇應永二十八年(二〇八一)に生れつ。幼にして律僧となりしが性甚だ和歌を好みしかば當時心敬の佳名ありしを聞き京師に出て就いて之に學びぬ。齡稍壯なるに及びて猪苗代兼載に従ひ連歌の風韻を問はむと欲して其の門下に到りぬ。兼載其の年齢を問ふ曰はく三十歳と。兼載曰はく惜いかな子の齡已に闕けたりもし子にして弱冠ならば則ち我れ能く斯道の妙手たらしめむものを、連歌は一紀の功を積まざれば其の奥に至ること能はざるなりと。宗祇曰はくさらば我れ能く之を成し得む勉勵十年日に夜をつがば豈に一紀の晩學は之を償ふを得るにあらずやと。兼載嘆じて宗祇の器必ず名を成すあらむ我が及ぶところにあらずといひ

しが果して其の蘊奥に達し大名を専らにするを得たり。但し肖柏の傳ふる説によれば宗祇の成功は宗砌に負ふところ多しといへり。或は縉紳の筵に列り或は同志の需に應ずるに一塵宗祇に及ぶものなく皆推して宗匠と爲ししが朝廷また花の本の號を賜ひて之を賞じき。花の本の號蓋しこゝに始まりぬ。さて宗祇が嘗て束常縁に就いて和歌を學び古今の傳授を許されし由は既に記載したることあれば讀者の知らるゝところならむが彼れは又卜部某に従ひて神道の旨をも究めき。平素旅行を好みて四方に漂遊し曾て定居することなかりき。或時比叡山に上りて一室を結び號して種玉庵とも又自然齋とも呼びしが又程なく一笠一杖の向ふところに任じ連歌の會あるを聞くときは則ち飄然として來たり又飄然として去りきといふ。文明十二年三月武藏國隅田川の邊に寓して終夜人と連歌の道を語りし事あり其の記を號して『吾妻問答』といふ。古今に於ける連歌の風體の變遷異同を論じ或は本歌のとり様源氏の付様など其の他種々の心得を採録せり。其のいふところ委曲周匝を盡くすと雖も良基の『筑波問答』に比較すれば稍未に流れて法に拘はる弊あり。此の年六月また筑紫に遊びぬ其の紀行を『筑紫の道の記』



と呼べり。宗祇東は金華の嶺を攀ぢ西は紫塞の遠きを窮め北は越嶺の雪を踏むなど足跡殆ど天下の名區にして印せざるはなかりき。文龜二年信濃より關東に赴き鎌倉に滞留しまつた駿河に到りぬ。其の弟子に宗長(三一〇八—二一九三)といふものあり駿河國志太郡島田驛の産なり宗祇の老いて且つ遠僻の地にあるを想ひて之を尋訪しき。かくて宗祇は七月晦日相模の湯本の里に宿せしに病發りて遂に客舎に残りぬ。行年八十二とぞ聞こえし。辭世の咏あり。

はかなしや鶴の林のけむりにも立ちおくれぬる身こそうらむれ

宗祇或時近隣に難産ありけるに宗長と共に其の屋に臨みて「摩珂般若はらみ女の奇特かな」と唱へけるに宗長之れに和して「一二もすんでさんのひもとくとくといひければ男子出生しけりとなり。宗祇また常に鬚髯を美にしけるが嘗て獨り深山を行きけるに適山賊あり一絲を遺さず彼の所有を奪ひ剩へ其の鬚髯に及ばむとせしかば其の用を問ふに拂子に作りて市に鬻がむと答へければ宗祇すなはち悵然として

わがために拂子ばかりはゆるせかし塵のうき世をすてはつるまで

と詠じ以て山賊の難を免れたる事もありきとぞ。

宗祇の連歌は良基の詠とは異なりて其の長短の各句は孰れも一句毎に獨立の意味を成して而も前後相連接せるものなり。而して宗祇の詠の最も妙なるは着想常人の意表に出でゝさながら連歌其のものゝ要求に適合するが如き天才を有するにあり。其の『獨吟千句』中に就いて數句を引用してこれが例を示さむ

なべて世の風ををさめよ神の春

花もたむけのゆふかくるころ

旅立てばかすむ山にもみちありて

かりねのそらに近き明けがた

誰が里のかねかとはばかり聞こゆらん

霜にふけゆく月のさやけさ

枯野にもなほかげたのむ虫の聲

一むらすゝきちりなつくしそ

秋風やわがそでのみやどらまし



なにかこえん山ふかきみち  
はるかなる高嶺を見れば雲の居て

浦わの波の立ちかはるおと

措辭も亦輕妙なり。若し強ひて其の難を指摘せば思想の範圍狹隘にして和歌者流と多く異ならず聲調はた壯大の氣乏しく稍、纖弱の風あること是れなり。因にいふ宗祇の如き非凡なる名家の手になれる連歌といへども其が本來の性質として全篇を貫通する意味なく随つて亦其れより生ずる趣味もなく只、前後長短句の關係、一篇推移の妙あるのみ其基の所謂當座の逸興を催すまでのものにして一個の大文學としては未だしきところあるは惜しむべきことならずや。

宗祇の著は以上に擧げたるもの、外『新菟玖波集』あり其基の『菟玖波集』に倣ひて其の以後の連歌を集めたり。『宗祇自讃歌集』といふは後鳥羽天皇が鎌倉時代の高名なる歌人十人をして各自讃の歌十首宛を奉らしめたる事ありし歌の評註なり。

『愚句老葉』は宗祇みづからの連歌を自註せるを宗長の更に評註せるもの、『宗祇初學抄』は連歌を詠ずるもの、ために四季折々の景物の分別すべきを説き『老のすゝみ』

は宗祇以前の連歌の傑作をえり出で、評註せるものなり。其の他尙ほ『山口記』、『白髮集』、『宗祇法師前句付』、『宗祇和歌集』、『宗祇法師和歌の言葉』、『豆爾葉大概抄』等ありて今世に傳はれり。

宗祇の弟子に牡丹花宵柏(一一〇二—一一八六)といふものありき太政大臣源具通の後裔なり。年少にして世態を好まず粗、書籍に涉り専ら和歌を嗜み又連歌を能くせり。攝津池田に住居し宗祇に就いて古今の傳授を受けき。其の著に『伊勢物語宵聞抄』とて『伊勢物語』を註釋せるものあり文龜二年勅命を奉じて又『新式今按』を編述し以て連歌に關する法則を追訂せり。是等宗祇宵柏宗長等と殆ど踵を接して世に出で俳諧調の連歌を再興して世に大名を博せるを荒木田守武及び山崎宗鑑とす。

荒木田守武は後土御門天皇の御宇文明五年(一一三三)に生まれき。伊勢内宮の神官にして鹽田長官と稱せり。守武夙に宗祇等と交誼を修めて和歌連俳に名ありき。ある時守武連歌興行の席に臨みけるに會合せるもの皆法林の人々のみなりければ御座敷を見れば何れもかみな月と唱へしに宗祇すなはちひとり時雨のふ



る烏帽子着てと附けしかば一座大に興を催しきといふ。守武また童子の教誡のため一夜百首を詠せしことあり一首毎に世の中の三字を冠せしかば世に是れを『世中百首』といひ又尊重して『伊勢論語』とも呼びぬ。別著『獨吟千句』は其の巻頭を「飛梅やかるくしくも神の春の發句を以て端を開きたれば或は『飛梅千句』ともいへり。かくて後奈良天皇の天文十八年八月八日享年七十七にして逝りぬ。山崎宗鑑は近江の人本姓は支那佐々木義清の裔なり。通稱を彌三郎といひ本名を範重一作範光と呼びぬ。寛正六年(一一二五)後土御門天皇御即位の年に生まれ稍長ずるに及びて當時の將軍足利義尚に仕へき。延徳元年六角高頼近江の甲賀山中に據り命を拒みし時義尚後名之を伐ちて鈎里に薨去せられしが範重將軍に従うて陣中に在りしかば君臣の別れにまのあたり人生の無常迅速なるを悟り遂に致仕して剃髮し攝州尼が崎に住し後ちまた城州山崎の竹林に移りぬ。致仕せし時齡僅に廿五歳に過ぎざりき。是れより號を山崎宗鑑と稱せり。宗鑑少時僧一休の愛するところとなり朝夕之に給事せしかば能く一休の風骨を得て滑稽洒落の趣きありけり。其の山崎に移るに及び専ら俳諧調の連歌を弄びて風月

を蓬窓の中に賞し或は客を引見して歌書を講ずるを樂みとせり。宗鑑また書法に達し妙技を盡し、かば支那人或は之を賞揚して金佛を瑠璃盤上に載するが如しと謂へり。居常油筒を鬻きて口を糊し且暮錢十文を以て食に換へ居室たゞ一藥罐を蓋へしのみ。篆額を掲げて云へらく「上客は立ちどころにかへれ中客は一日にして還れ下客は一宿せよ」と其素行の程大方推測せらるべし。當時連歌道にあいては宗祇の名四方に噴々たり宗鑑初めは彼れの右に出でむと欲せしかども到底其の企及すべからざるを見て俳諧調の一派を再興し遂に斯壇に異采あらしむるに至れりといふ。宗鑑一日宗長と俱に内大臣西三條實隆を訪ふとて常に愛翫しける烟筒カキタバコを截りて贈りぬ。實隆之を見て戯れに手に持てる姿を見れば俄鬼つばたとて打興むけければ宗長のまんとすれば夏の澤水と脇句を附し宗鑑蛇に追はれていづち歸るらんと第三句をぞしたりける。晩年西國へ赴き歸途讃岐の琴平山の麓に留まり假居して一夜庵と號しき。天文二十二年癩を患ひて歿りぬ年八十九。其の著を『犬筑波集』といふ。辭世の一首は頗る宗鑑の人となりを説明するものあり。



宗鑑は何處へと人の問ふならばちとようありてあの世へといへ  
此の辭世の歌といひ彼の家額といひ何れも彼れの洒々落々たる性質を表せざる  
はなし。かゝれば傳には宗鑑は所謂本歌調の連歌を以て宗祇の右に出でむ事を  
難しとして俳諧の道に入れりといへども此の人元來不羈洒落なるが故に當時の  
連歌の繁雜なる拘束あるを煩はしと思ひて法式未だ自由なる俳諧に心を委ねし  
にはあらざるか。守武が所謂本歌調の連歌を捨て、俳諧調を取りしは全く此の  
主意に基けりと見ゆ。曰はく。

「国吟千句の立願ありければ打粉れ又は成りがたく過ぐしけるも空おそろしくいかゞ  
はせん之餘りに御園を作るべきに一ならば本歌二ならば俳諧の、からまいにてあはれ  
二なれよと念うければ二なりぬ、有難き限りなく」云々

かくて守武と宗鑑とは同じく本歌調の連歌を捨て、俳諧調を取れりきといへど  
も守武は宗鑑に比ぶれば其の風躰頗る異なり彼れは優美にして上品に、此れは粗  
豪にして野卑なる趣あり。宗鑑の『犬筑波集』の中には殆んど卑猥讀むに堪へざ  
るも見ゆるに守武の『飛梅千句』には決してさせる難なし。されども守武の俳

諸も宗鑑のも其の滑稽談話極めて單純にして未だ識者を絶倒せしめむことは難  
し。即ち其の滑稽は單に一種の地口の如く若しくは落語の如くにして眞にか  
いきものにあらず又世俗を警醒罵倒せむとする諷刺的意味を有するものにもあ  
らざるなり。否彼等の滑稽談話とするところは其の思想の上にあらず主として  
修辭の邊のみに存するが如し。例へば

あつたら味柑くさらかしぬる

『犬筑波集』

正月の茶の子にことをかきばかり  
花よりも鼻にありける匂ひかな  
月はおぼろにふくるゐの志し

『飛梅千句』

の如きを見ても言語上縁語又は係辭を以て平凡野卑なる思想を表白したるに過  
ぎざるを知るべし。予輩日本文學のために云はば寧ろ此の種の滑稽談話を以て  
大名を博せしものあるを恥ぢずばあらず。されども此の種の滑稽談話にせよ若  
し守武と宗鑑と其の詩想何れが豊富自在なりしかと問はば勿論宗鑑を推さざる  
べからず。守武宗鑑共に其の發句古雅にして人口に膾炙せるものあり。



元日や神代の事も思はるゝ

守武

摺小木に知らるな夢の花ざかり

宗鑑

笠を着て雨にも出でよ夜半の月

宗鑑

守武宗鑑以後俳諧調の連歌甚だ流行し江戸時代に入りて松永貞徳出で、其の極盛に達せり。かくて江戸文學の一異彩たる俳諧は全く守武宗鑑が此の種の先驅によりて一方に旗旆嚴然たるを得たりしなり。讀者須らく之が研究を忽諸に附することなからむを望む。

## 第四章 散文

### 第一節 散文界の概況

此の時代の散文は若し其の大體の性質に就いていへばさまで鎌倉時代のと異なるところなし即ち其の思潮も佛教的傾向を帯び文章はた和漢梵の三語を併用したるものなりき。さはれ強ひて彼此の相違せる點を求むれば其の文體の偶華に過ぎたるものあるも一般に質樸平板なる風の増加せると前期に流行せし繪巻物の發達して御伽草子となり徳川時代に生出せる草雙紙の萌芽をなせるとにある

べし。其の文體の質樸平板なる風の増加せるは兵馬倥傯の際として其の著おほむね故事有職等を始め實川のもの多きにもよるべきか。予輩が此の時代の散文を大體鎌倉時代のに類せりといふは此の散文界を代表するに足るべき重要な著作の此の傾向ありしに依りてなり。

此の散文界を代表するに足るべき重要な著作とは何ぞ。「徒然草」「神皇正統記」「増鏡」「太平記」の如き是れなり。作者の著名なるを兼好法師並びに源親房とす。

此の外一條禪閣兼良の作に「樵談治要」「文明一統志」「花鳥餘情」「公事根源」「東齋隨筆」「桃華藥業」「歌林良材」「藤川記」「小夜寢覺」等あり今川貞世(了俊)の作に「言塵集」「道行きぶり」「落書露顯」北條氏康のに「武藏野紀行」等の作ありき。御伽草子には「浦島太郎」「酒頭童子」「文正草子」「鉢かつぎ」等およそ二十餘種ありて後世に傳はりぬ。歌謡に謠曲のあるごとく散文に御伽草子あるは此の時代の文學を異色あらしむるに足る。

予輩が此の章に於いて散文を評騭するに就いては其の最重なるもののみを擧げて先づ



の三項に區分して其の作を採らむとす。一條禪問兼良、今川貞世、北條氏康の作中數種は多少文學的著作として見るべき價值ありと雖も大方は擬古の跡更に取出だして評すべきふしなきを以て之を省略す。况や故實有職に關する全く實用一邊の作をや。

## 第二節 草子

『徒然草』

卜部兼好

兼好の經歷並に性行

『徒然草』の思想及び文體

此の時代に草子の名を冠せしむべきものは只『徒然草』の一部ありしのみ。其の著者を吉田の法師卜部兼好といふ。

兼好法師は大織冠藤原鎌足の裔にして姓を卜部といひ治部少輔兼顯の第三子なり。後宇多天皇の御宇弘安六年(一九四三)に生まれ後村上天皇の朝正平五年二月十五日齡六十八歳にして逝りぬ。其の家代々神道を以て官に仕へしかば兼好も自然に其の教育を承けて斯學に通ぜりしはいふに及ばず有職故實の事或は儒學

老佛の學さては我が朝の古文和歌等にも明らかなりき。彼れ始め吉田といふ所に住して吉田兼好と呼びぬ。伏見後伏見天皇の御宇禁中の瀧口に參り後二條花園天皇の朝六位藏人となり左兵衛尉に任ぜられしが三十七歳の頃後宇多院の仙洞におはしますに奉仕して北面に伺候しつ。かゝる程に伊賀守橘成忠の女中宮の小辨といへる女房に懸想して假りの契を結びけるが此の事間もなく世に顯はれしかば人のおもはく耻かしくやありけむ仙洞を辭して東國に下り武藏國金澤といふ所に草庵を結びて橋居せり。かくて此處に其の年も過ぎけるが法皇の御召頻りなりければもだしがたくて京に上り再び奉仕するととなりぬ。ふかるに是れより先中宮の小辨既になき人となり正中元年六月法皇亦崩御ありしかば兼好今は無常の感交と身に迫りて堪へがたく遂に出家し俗名のまゝを音讀して兼好法師とは唱へけり。此の時兼好四十二歳とぞ聞こえし。是れより諸國を歴遊し此處に住みかしこに移りて只管風月にのみ感懷を漏らしぬ。或る時信濃國木曾の御坂のあたりに庵を結びて住みたりしに國守鷹狩にとて人あまた具して來にければ其のさまのいと煩はしきに



こゝもまた憂世なりけりよそながら思ひしまゝの山里もがな  
と詠じて又都に歸りぬ。仁和寺の邊、雙が岡といふ所にはかなどころ設け其の  
たはらに櫻あまた植ゑて

ちぎりおく花とならびの岡のうへにあはれいく世の春をすゞさん

と詠じつ。此の頃は世の中愈々亂れにしかば兼好は専ら和歌をのみ弄びて貧しき  
日を送りけりとなむ。頼阿淨辨慶運は兼好が和歌の友にして皆孰れも詠歌に巧  
なりしかば時人之を和歌の四天王と稱せりしこと曾て叙べたるが如し。正平四  
年五月伊賀國なる橘成忠に招かれて彼の地に赴き國見山の麓田井の莊の密乘院  
に住みぬ。其の後いつの頃にや兼好西國を行脚して播磨國の阿部野といふ所に  
一小庵を營みて僑居せしが成忠の切なる招によりて伊賀の國に還りて住しけり。  
正平五年二月兼好臨終の際北朝の崇光院典藥頭和氣清元を遣はされて服藥をす  
すめけるが固辭して受けざりき。此の時二條良基また潜に伊賀に赴きて其の病  
床を訪ひけりとぞ。兼好が高師直の爲に艶書を書きたりといふ事に關しては世  
の毀譽褒貶甚しく甲論乙駁或は淫樂を恣にして花鳥の媒をなす俗僧の如く或は

南朝の社稷を挽回せむとする忠臣の如くいひなして諸説紛々たり。是れも、『太  
平記』卷の廿一「鹽谷判官讒死の事」とある條に根據すといへどもまた『彼の書』の  
記事を皆がら信憑するに足るべきものと爲したるより生ぜし誤謬にして探るに  
足らず詳細の考證は此處に叙べ盡くす。况や兼好の發心して以來の性行を警査  
すれば全く塵世に交はる事を欲せざりし次第の洞察せらるゝをや。

道心あらば住むところにもよらず家あり人に交はるるも後世を欲はんにあつたる  
べきかばさいふは更に後世しらぬ人なり。げには此の世をばかなみ必ず生死を出で  
んと思はんに何の興ありてか朝夕君に仕へ家をかへりみいさなみのいさましからん  
心は縁にひかれて移るものなれば靜かならば道は行つがたし

といへる如き彼れが平素の心事を知了するに足りぬべし。

其の著『徒然草』は一時に書き綴りしものにあらず見聞するに隨ひて心に感ぜし事  
どもを其をりくりに記しけるもの、草庵の壁などに貼られて残りしかば兼好  
の歿後に曾て召仕はれたる童の形見にもたりし草稿など、共に取集めて一書に  
編成したるものなりといふ。其『つれづれ草』と名づけしは卷首の文章冒頭につれ  
づなるまゝにと書出だましに依るなり。



三光院殿の『崑玉集』に曰はく「兼好法師のつれづれ草はその世には知るものなかりしか。童命松丸今川了俊のものとつかへありしに兼好もしや歌などのこるか作のものやあると問はれしに書きすてられし藻蘆草あるは歌のそゝるごも尤も候ふにや多くは庵の壁をばられて候ふ。こゝにも形見にもきたくはへ申し候ふと語りければそれ尋ねさせよとて吉田の感神院へは命松丸を遣はし伊賀の草庵へは従者伊與太郎光貞さいふもの歌のこゝろざしありとて歌の集は伊賀の草庵にてやうく五十枚ばかりあつめ「つれづれ草」は吉田にて多く馳にはられあるは経巻などをうつせるものゝ裏書にてありしなとりて來ぬ。それな了俊命松丸などとりそるへ命松丸がもとにありしなもまた二條の侍従の方によみかはされしなごもとひあつめ歌の集一冊としまた草子なも二冊とせしなり。つれづれなるまゝにさ書出せし語意がらのおもしろく哀れ深きになぞらへて「つれづれ草」といふ題號はつけられたり。それより「源氏」「枕草子」などの如くつたへうつせるなよじさし誰れくもすてぬ草子のおもしろきものになりぬ。」

此の故に『徒然草』は始終の連絡一貫せずきれくなる長短の文すべて二百四十餘篇より成れり。其のいふ所は大方

あらし野の露きゆる時なく鳥部山のけぶり立ちさらでのみ住みはつるなら

ひならばいかに物のあはれもなからん。世はさだめなきこそいみじけれ。命あるものを見るに人ばかり久しきはなし。かげろふの夕をまち夏の蟬の春秋を知らぬもあるぞかし。つくく一年をくらす程だにもこよなうのどけしや。あかず惜しと思はれ千年をすぐすとも一夜の夢の心地こそせめ。すみはてぬ世に見にくきすがたをまちえて何かはせん。命ながければ耻ぢほし長くとも四十に足らぬほどにて死なんこそめやすかるべけれ。其の程すぎぬればかたちを耻づる心もなく人に出でまじらはんとを思ひ夕の日に子孫を愛してさかりゆくすゑをみんなでの命あらまほし、ひたすら世をむさぼる心のみ深くものゝあはれも知らずなりゆくなんあさましきの如く佛説に基き又は

名利につかはれて志づかなるいとまなく一生を苦しむることおろかなれ。たから多ければ身をまもるにまどし害をかひわづらひをまねぐなかだちなり。身の後には金をして北斗をさふとも人のためにぞわづらはるべき。愚なる人の目をよるこばしむるたのしみ又あぢきなし。大なる車肥えたる



馬、金玉のかざりも心あらん人はうたておろかなりとぞみるべき。金は山に  
 して玉は淵になぐべし。利にまどふはすぐれて愚なる人なり。うづもれぬ  
 名をながき世に残さむこそあらまほしかるべけれ。位高くやんごとなきを  
 しもすぐれたる人とやはいふべき愚につたなき人も家に生まれ時におへば  
 高き位にのぼりおごりを極むるもあり、いみじかりし賢人聖人みづからいや  
 しき位にをり時におはずしてやみぬる又多し。ひとへに高きつかさ位をの  
 ぞむも次におろかなり。智慧と心とこそ世にすぐれたるほまれも残さまほ  
 しきをつらく思へばほまれを愛するは人のきゝを喜ぶなり。ほむる人そ  
 する人共に世に止まらず傳へきかん人またくすみやかに去るべし。誰れ  
 をか耻ぢ誰れにか知られんことをねがはん。ほまれは又そしりのもとなり  
 身の後の名のこりて更に益なし是れをねがふも次に愚なり。たゞし強ひて  
 智を求め賢をねがふ人のためにいはゞ智慧出でゝは偽りあり才能は煩惱の  
 増長せるなり。傳へて聞き學びて知るはまことの智にあらず。如何なるを  
 か智といふべき。不可は一條なり。いかなるとか善といふ。まことの人

は智もなく徳もなく功もなく名もなし誰れか知り誰れか傳へん。是れ徳を  
 かくし愚をまもるにあらずもとより賢愚得失の境に居らざればなり。まよ  
 ひの心をもちて名利の要を求むるにかくの如し。萬事は皆非なり、いふに足  
 らず、ねがふにたらず

の如く老莊の説を參酌したるもの多し。其の他儒學の口吻を帯びたる或は公事  
 有職の道を叙べたる或は和歌を論じ男女の性情を説くなど讀み來たれば時に森  
 嚴襟を正さしめ時に妖艶魂を奪ふあり又は眞摯激切肝膽を穿ち滑稽洒落頤を解  
 かしむる概あり。若しそれ前論後説時として矛盾傾向の見ゆめるは此の草子の  
 章段順序時代の経過に伴はず遁世前のと遁世後のとの作錯然たる者あるによる  
 めり。さはいへ此の草子を通じて一貫せる思潮はなほ全たく老佛の教旨に基け  
 る厭世的觀念なりといふを妨げざるべし。彼れみづから云へらく

ひざり灯のもとに文をひろげて見ゆ世の人を友とするこそこふなぐさむわざな  
 れ。文は『文選』のあはれなるまきく『白氏文集』老子のこまば南華の篇此の國のはがせ  
 ざしの書ける物も古のはあはれなる事おほかり

と、彼れの思想の根柢は是にても知るを得べし。



其の文章は『源氏物語』『枕草子』など優美なるをとり之に『文選』『白氏文集』又は『老子』のことは南華の篇さては佛氏の語などを交へたり。此の草子が如何に後世に影響するところありしかは後に至りて更に説く時あるべし。然れども此の節を終ふるに臨みて尙ほ此處に一言の附加すべきは兼好の詠歌に巧なりしこと是れなり。是は前に掲載したる歌にても略知らるることなるが『崑玉集』に兼好と頼阿と平生歌を詠みしに景色の歌は頼阿まさりしかどまことの佛心無常をよみしは兼好にしくものあるべからずとあるにても如何に其の歌幽玄にして當代に重きを致ししかを推測するを得む。其の歌集の後世に傳はるもの之を『兼好法師集』と呼ぶ『風雅』『新千載』『新拾遺』『新後拾遺』『新續古今』等の諸勅撰歌集に採録せられたる歌も亦少からず。予輩は兼好が亂雑混濁なる世に當り其の名聲の雷に現代の耳目を衝動せしのみならず永く我文學史上に幾多の材料を與へたるを偉なりとす。

### 第三節 正史並に雜史

『神皇正統記』 源親房 『増鏡』 『太平記』

此處に正史として録すべきは『神皇正統記』と『増鏡』との二書なり『太平記』は古來事

實の信憑すべきものとせられたれど今は採らず姑く雜史の命題下に攝して之を録すべし

『神皇正統記』は後村上天皇の興國元年に准后源親房の著はしくものなり。親房は具平親王の裔權大納言師重の子伏見天皇の永仁元年(一九五三)に生まれき。家を北畠或は中院とも稱せり。花園天皇の延慶の頃從四位下に叙せられ右近衛中將左少辨を經參議に任ぜられしが後醍醐天皇の元應の初め累進して權中納言となり正二位にすゝみ淳和獎學兩院の別當を兼ね元享三年大納言に陞りぬ。其の後世良親王の傅となりしが元徳二年親王薨するに及び親房痛悼禁ずる能はず遂に官を辭し剃髮して宗玄と號しき。此の時親房既に五朝に歴事して輿望極めて高かりしかば時人朝家のために之を惜みきといふ。元弘三年王室中興の功成りて車駕隱岐より還り給ふに及び親房復出て仕へ從一位に叙せられ大臣に准せられき。延元三年二男顯信の陸奥介となり鎮守府將軍を兼ねて義良親王を奉戴し彼處に下られし時親房も其の補佐として出立たれしが上總の海にて暴風のため主従父子相失し親房は常陸に漂着せり。かくて此處に義兵を擧げ高師冬の兵



を引受けて數度の合戦に及びしが孤軍援なく糧食はた竭きて遂に支ふるに由なく逃れて吉野に歸りぬ。其の後後村上天皇の正平六年三宮に准せられて輦車宮に入るを許され同九年賀名生に薨じぬ。年六十二。親房嘗て僧玄惠につきて和漢の學を承け佛典にさへ暗からざりき。されば當時兵馬倥傯の際なりしにも拘はずその著作の有用なるもの尠からず『正統記』の外『職原抄』『元々集』『二十一社記』『古今集註』等あり。世の人其の學才の該博なるによりて當代の博識家藤原宣房及び源定房を併稱して後の三房といひぬ。北朝の如き南朝昇進の官位は一般に廢止せられしも尙ほひとり親房のみは其の名をいはずして北畠准后と呼びたり。親房が造次顛沛の間にも忠君の念充滿せし趣は其の經歷にても明なるが『正統記』の著作せられし山來を繹ぬれば一層其の然るを想はしむるものあり。

此の『神皇正統記』は著者親房が後村上天皇の興國中兵馬の間に在り皇統兩立して正閏の分忘れ之がために人々の方途に迷ふものあるを憤慨して述作せしものなり。上は神代より下は興國の初めに至るまでの歴史を叙し我が國體の他邦に異なる所以を明らかにし神器の所在を正し以て南朝の正統なるべき理を知ら

しむるにありき。史論往々佛神の利驗天道の順環に歸着して物足らぬ心地するところなきにあらざと雖も公明端嚴の筆致文勢能く人をして首肯せしむるものあり。若しそれ著者が忠誠の氣作中に横溢して轉其の人の性行を想像せしむる妙あるはた此の書の特徴とも謂ひつべきなり。學者なほ親しく次の文例に就きて之を見よ。

廢帝仲恭天皇諱は懷成順徳の太子御母は東一條院藤原光子故攝政太政大臣長經の女なり。承久三年春の比より上皇思召し立つ事ありければ俄に讓國し給ふ。順徳御身を輕めて合戦の事をもひとつ御心にせさせ給はん御謀にや新主に讓位ありしかど即位登壇までもなくて軍敗れしかば外舅攝政道家の大臣の九條の亭へ遁れさせ給ふ。三種の神器をば閑院の内裏に捨て置かれにき。讓位の後七十七夕日の間暫く神器を傳へ給ひしかども日嗣には加へ奉らず。飯豊の天皇の例になぞらへ申すべきにこそ。元服などもなくて十七歳にてかくれました。扱も其の世の亂れを思ふに誠に未の世には迷ふ心もありぬべく又下の上をしのご端ともなりぬべし。そのいはれをよく辨へ



らるべき事に侍り。頼朝功勳は昔より類なき程なれど偏に天下を掌にせしかば君としてやすからず思召しけるも理りなり。况んや其の跡絶えて後室の尼公陪臣の義時が世になりぬれば彼れの跡を削りて御心のまゝにせらるべしといふも一應のいひなきにあらず。然れども白河鳥羽の御代のころより政道の古き姿やうく衰へ後白河の御時兵革起こりて姦臣世を亂り天下の民殆ど塗炭に落ちにき。頼朝一臂を振ひて其の亂を平けたり。王室は古きにかへるまでなかりしかど九重の塵もをさまり萬民の肩もやすまりぬ。上下堵をやすくし東より西より其の徳に服せしかば實朝なくなりても叛く者ありとは聞こえず。これにまさる程の徳政なくしていかでたやすく覆へざるべき。たとひ又失はるべくとも民やすかるまじくは上天よもくみし給はじ。次に王者の軍と云ふは科あるを討じて疵なきをばほろぼさず。頼朝高官に昇り守護の職を給ふ。これ皆法皇の勅裁なり私に盜めりとは定めがたし。後室その跡を計らひ義時久しく彼れが權をとりて人望に背かざりしかば下には未だ疵ありといふべからず。一應のいはればかりにて追討せら

れんは上の御料とや申すべき。謀叛起こしたる朝敵の利を得たるには比量せられがたし。かゝれば時の至らず天の許さぬことは疑ひなし。但し下の上を剋するは極めたる非道なり終にはなとか皇化にまつろはざるべき。先誠の徳政を行はれ朝威をたて、かれを剋する計りの道ありて其の上の事とぞ覺え侍る。且は世の治亂の姿をも能く鑑みしらせ給ひて私の御心なくば干戈を動かさるゝか弓矢を治めらるゝか天の命に任せ人の望に隨はせ給ふべかりし事にや。終にしては繼牀の道も正路に歸り御子孫の世に一統の聖運を開かれぬれば御本意の未だ達せぬにはあらず、されど一旦もしづませ給ひしこそ口をししく侍れ。

兵馬倥傯の際勿論充分なる参考書もなかりしこと、推測せらるゝに事實明確議論公正文章はた平易にして合格せる何れも以て著者親房の博識老熟の程を窺ふことを得べし。其の他の著書は文學上のものならねども其の價值又想察するを得ん。

『増鏡』は舊説に一條冬良の作なりといひ傳ふれども永和二年の奥書ある古寫本あり。



りて時代合せざるがゆゑに今は採らず。此の書後鳥羽天皇の御時より後醍醐天皇の元弘三年隱岐より還幸ありし所までを載せたれば蓋し建武の中興より程遠からぬ時代に出来しものなるべし。すべての體裁は『大鏡』『水鏡』などのに倣ひ二月の中の五日嵯峨の清涼寺に詣うでける八十にもや餘りぬらむと見ゆる尼の折柄參會せる人々のもとめに應じて語りたる様に作れり。全篇を十七條に分かちておどろのした「新島もり」「ふぢごころも」「三神山」「内野の雪」などいへる雅名を附したり。『水鏡』は神武天皇より仁明天皇まで、『大鏡』は文德天皇より後一條天皇までを記載したるものなれば此の増鏡の記事までは尙ほ後朱雀天皇より安徳天皇の御宇に至る十三代ばかりの間缺けたれども往昔より此の『水鏡』『大鏡』『増鏡』を三鏡といひならはして史學研究者の重寶とせり。此の三鏡の外『續世繼』一名『今鏡』といふもの、後一條天皇の頃より高倉天皇の朝までの事蹟を記載したるものあること曾て述べたる如くなれば此の四篇を通覽せば神武天皇より後醍醐天皇の御宇に至る事件を徹するを得べし。文章は又『大鏡』『水鏡』等のに似て優美なれども事件によりては莊重雄麗なるところ亦なきにあらざ。就中其の序文めきたる端書の

文殊に傑れたり。

以上『神皇正統記』と『増鏡』との二書はまづ正史として見做すべきものなれども茲に雜史として列論すべきは誰れも知れる『太平記』四十卷なり。『太平記』は花園天皇の文保二年より後村上天皇の正平二十二年にかけておよそ五十年間に於ける事蹟即ち南北兩朝の分裂諸所の戦况忠臣義士の物語等を記載したるものなること是れまた普く人の知るところなるべし。其の作者は玄慧法師後醍醐天皇の勅命を蒙りて起稿せしをのちに來賢知教教圓能鄰等の諸僧の増補大成して四十卷となしたりといふ舊説あれど近年修史館に於いて史料研究の際小島法師といふものゝ作なるよしを發見せり。但し小島法師といへるものゝ如何なる人なりしかは今になほ詳かならず。只洞院公定の日記に「應安七年五月三日戊辰傳聞去廿八九日之間小島法師圓寂云々是近日斷天下太平記作者也。凡雖爲卑賤之器有名匠之聞可謂無念とあるのみ。一部の體裁は全く『源平盛衰記』『平家物語』に摸し文章は一層華に過ぎたり。例へば

俊基朝臣は先年土岐十郎頼貞が討たれし後召捕はれて鎌倉まで下り給ひし



かども様々に陳じ申されし趣げにもとて赦免せられたりけるが又今度の白  
 状どもに専ら陰謀の企て彼の朝臣に在りと載せたりければ七月十一日に又  
 六波羅へ召捕はれて關東へ送られ給ふ。再叛赦さるは法令の定むる所な  
 れば何と陳ずとも許されし路亦にて失はるゝか鎌倉にて斬らるゝか二の間  
 をば離れじと思ひ儲けてぞ出でられける。落花の雪に踏み迷ふ片野の春の  
 櫻狩り紅葉の錦を着て歸る嵐の山の秋の暮一夜を明かす程だにも旅寢とな  
 れば物愛きに恩愛の契り淺からぬ我が故郷の妻子をば行くへも知らず思ひ  
 おき年久しくも住みなれし九重の帝都をば今を限りと願みて思はぬ旅に出  
 て給ふ心の内ぞ哀れなる。憂きをば止めぬ逢坂の關の清水に袖濡れて未は  
 山路を打出の濱沖を遙に見渡せば鹽ならぬ海にこがれ行く身を浮舟の浮沈  
 み駒もといろと踏みならず勢多の長橋打渡り行きかふ人に近江路や世をう  
 ねの野に鳴く鶴も子を思ふかと哀れなり。時雨もいたく森山の木の下露に  
 袖ぬれて風に露ちる篠原や篠分くる道を過ぎ行けば鏡の山はありとても泪  
 に曇りて見えわかず物を思へば夜の間にもおいその森の下草に駒を留めて

願る古郷を雲や隔つらん。番馬醒が井柏原不破の關屋は荒れはてゝ猶ほも  
 るものは秋の雨のいつか我身の尾張なる熱田の入劍伏し拜み鹽干に今や鳴  
 海鷗傾く月に道見えて明けぬ暮れぬと行く道の未はいづこと遠江濱名の橋  
 の夕鹽に引く人もなき捨小舟沈み果てぬる身にしあれば誰れか哀れと夕暮  
 の晚鐘鳴れば今はとて池田の宿に着き給ふ。元暦元年の比かとよ重衡の中  
 將の東夷のために囚はれて此の宿に着き給ひしに

東路のはにふの小屋のいぶせきにふる郷いかに戀しかるらん  
 と長者の娘が詠みたりし其の古の哀れまでも思ひ残さぬ泪なり。旅館の燈  
 火幽かにして鷄鳴曉を催せば匹馬風に嘶へて天龍川を打渡り小夜の中山越  
 え行けば白雲路を埋み來てそことも知らぬ夕暮に家郷の空を望みても昔西  
 行法師が命なりけりと詠じつゝ二たび越えし跡までも羨しくぞ思はれける。  
 隙行く駒の足はやみ日既に亭午に昇れば餉參らす程とて輿を庭前に昇き  
 といむ。轅を叩いて警固の武士を近付け宿の名を問ひ給ふに菊川と申すな  
 りと答へければ承久の合戦の時院宣書きたりし咎によつて光親卿關東へ召



下されしが、此宿にて誅せられし時、

五七六

昔南陽縣菊水

汲下流而延齡

今東海道菊河

宿西岸而終命

と書きたりし、遠き昔の筆の跡今は我が身の上に成り、哀れやいと増りけん一首の歌を詠みて、宿の柱にぞ書かれける。

いにしへもかゝるためしを菊川の同じ流れに身をや沈めん

大井川を過ぎ給へば、都にありし名を聞き、龜山殿の行幸の嵐の山の花盛り、龍頭鶴首の舟に乗り、詩歌管絃の宴に侍りし事も、今は二度見ぬ夜の夢と成りぬと思ひつゝけ給ふ。島田藤枝にかゝりて、岡部の眞葛裏枯れて、物悲しき夕暮れに、宇都の山邊を越え行けば、蔦楓いと茂りて道もなし。昔業平の中將の住所を求むとて、東の方に下るとて、夢にも人に逢はぬなりけりと詠みたりしも、かくやと思ひ知られたり。清見瀉を過ぎ給へば、都に歸る夢をさへ返さぬ浪の關守に、いと涙を催され、向ひはいづこ三穗が崎、沖津浦原打過ぎて、富士の高根を見給へば、雪の中より立つ煙り、上なき思ひに比べつゝ、明くる霞に松見えて、浮島が原を過ぎ行けば、鹽干や淺き船浮きて、あり立つ田子のみづから

も、うき世を遷る車返し、竹の下道行きなやむ、足柄山の峠より大磯小磯見下して、袖にも涙はこゆるぎの、急ぐとしもはなけれども、日數つもれば七月廿六日の暮程に鎌倉にこそ着き給ひけり。

の如き其の文の華に過ぎ又纖巧に過ぎたるを察すべし。故に此の書の文は時として厭はしきふしありと雖も、全体的筆致趣味多きによりて、『源平盛衰記』並に『平家物語』等と共に永く世人の愛讀するところとなりき。古來此の書の記事をして知らず、實事と思惟せしめたりしも、全く此の愛讀より出でたる誤謬なり。されば此の書は只、多少當時の人情風俗を想察せしむる外、史上の事實と見做すべからざる事史家の研究によりて一致せるところとなれり。久米邦武氏往時、史學會雜誌に論じたる主意は能く此の書の信ずるに足らざることを表明せるものあり抄録して讀者の參考に供せむ。

『太平記』は四十卷の大部にて、而も小島法師が正平の初比までに書綴りたる書籍なれば、世には史學の基根とも思ふなるべし。されど此の書を史學の研究にあつれば、古探り出でたる屍の如く、盡く消失せて中には朽骨さへ無くなることの多きを如何にせん。



世に是迄史學の研究は起こらず其の材料も乏しかりし故に水戸にて『大日本史』を編修するに反て『太平記』を主にして他の材料を取捨したるより事實は爲に壞れて是非の顛倒したる事夥多し。まして其の他私著の編修書に誤謬の多きは怪むべきにもあらず。今研究といふ正針を取りて此の書を読まば史學の用に立たぬことは自ら瞭然たるべし。

といひ又

『太平記』は平家物語の跡を追ひ保元以來の合戦を假りて狂言綺語を綴りたる語りも  
のにて謠本淨瑠璃本同様の書なり。其の脚色は早く非命に斃れたる大塔宮新田義貞  
楠正成名和長年行くへの知れぬ萬里小路藤原等を立物として尊氏兄弟阿野の准后を  
淨且の役に用ひんために先づ開首に中宮准后の正邪と大塔宮の材武とを示したり。  
所謂序幕なり事實と引合せ考ふる程のものにあらず

などいひて其の理由を考證せり。なほ委しく知らむと欲するものは彼の雜誌に就いて之を見るべし此處にはさまで考證を掲ぐる要なければ略しつ。

『太平記』一部を貫流せる大思潮は『盛衰記』『平家』の如く佛教的思想にしてなほ彼等に見えたるよりも著るきものあり。是れまた當代を貫く一大思潮を表示するものとやいはむ。之に次ぐを神儒二教の思想とす。其の筆するところ往々深遠該

博なるを見れば作者の是等に關する知識の豊富なりしを想ふに足る。要するに此の書の記事は多く荒唐なる非難をば免れざるもなほ長へに良好なる文學的著作として許多の愛讀者を失はざるべきを信ず。

此の『太平記』の記事を妄なりとして折り／＼引證せらるるを『梅松論』とす。此の書何人の述作たるを詳かにせず或は云ふ是れこそ玄慧法師が足利直義の命を奉じて撰せしものなれと。言を巻説に託して上は元弘の頃より足利義春の事蹟を叙べたり。事實は正確として學者の許すところなりといへども文章は遙に『太平記』に劣れり。

#### 第四節 御伽草子

繪巻物の發達 御伽草子の材料並に趣向 『横笛草子』  
の梗概 御伽草子の性質 草雙紙の萌芽 物語類  
鎌倉時代の初より流行せし繪巻物は其の時代に至りて愈發達し從來繪畫を主とせしものも今は多少詞書の上にも留意することとなりぬ。世に之を御伽草子と呼びて當時の上流社會に持囃されたるをさ／＼往時の物語にも譲らざる程なり



き。其の作の今日に傳はるもの數十種。然れども是等の草子は其の主とするところ元來繪畫にありしを以て畫工の外比較的肝要ならざりし詞書の作者は其の名を逸したるもの多し但し畫工の名の詳かならざるものもまた尠からず。各篇の材料並に趣向などは大方古傳説または古物語より採りて増補刪減したるもの文章はた古物語の格法を摸し且つ甚だ杜撰粗漏なる漢語及び俗語を混用せり。例へば『浦島太郎』『酒類童子』『横笛草子』の『記』『紀』等に見えたる古傳説若しくは『平家』『盛衰記』等に其の材料と趣向とを採りたるはいふも更なり『文正草子』の如き『鉢かつぎ』の如き多少『住吉』『竹取』の物語に類似せる概ある點檢し來たれば其の然らざるもの殆どあるなし。而して是等の草子が其の材料と趣向とを古傳説又は古物語に採るや多くは亂雜疎放原作に比するに遙に劣れるが常なり。予輩はこゝに學者の比較考査せん便宜にもとて『横笛草子』の梗概を掲載すべし。

中ごろ建禮門院の御時淨海入道の子小松殿の御うち三條の齋藤瀧口時頼とて花やかなる男あり。女院の御所に横笛とて揚貴妃李夫人にもをさく劣らざるみめよき女房のありけるに懸想し乳母のなかだちにてやうく逢瀬の中となり

てうれしき年月かさなりけり。さる程に父の茂頼モトノリ此の事を聞き身をいたづらになす事こそ口をしけれとてたびく教訓しければ瀧口

つくく物を案するに此の世ばかりの夢ぞかし。かゝる思ひをする事よ。東方朔が九千歳西王母が一萬歳名のみ残りて跡もなし。うき世を物にたさふれば岸のひたひの根なし草入江の水にすて小舟波にひかれて行へなく花の上なる露よりも危き人間の知らですむこそ拙けれ。たいほん玉のたのしみも思へば夢のうちぞかし。か程かりなるあだし世に思ふ人になぐさみてこそ思ひてとは成るべけれ。また如何に榮ゆとも思はぬものをいかにせん親の命を背かん罪深かるべし女の心を破れば一念五百生けんねんむりようごうの罪たるべし。

とは思へども是れを菩提の心と觀じつゝ餘所ながら横笛に名残をつけ其の身十九と申すに嵯峨の奥なる往生院にとち籠りぬ。横笛はかゝる事のありきとは夢にも知らず只瀧口のすさみ給ふをのみ恨みにて明かし暮らし給ひけるが親の不興を蒙りて遁世したる由を聞き思ひに堪へかね忍びて御所をあくがれ出て給ふ。たどりくつてゆく程にやうく往生院にぞ着き給ふ。柴のとぼそに佇みてほとほと叩きつゝ横笛と申すに瀧口障子のひまより見給へば古の有様にもなほま



ざりて見えければ一目見せばやとは思へども二たつ物を思はせむるむざんなりとて下の僧して歸り給へと云はせけり。横笛これを見給ひて

なまけなの有様や昔に變らで今は契らんといはゞこそかはりしすがたたゞ一め見せさせ給へど時雨に濡れぬ松だにも又いろかはる事もあり火の中水の底までもかはらずとこそ思ひしに早くもかはる心かな。ありしなまけなかけよといはゞこそ自らも共に様をかへ同卜庵室にすまひして御身は花を摘むならば自らは水を掬ひひとつ蓮の縁さならばやと思ひ是れまで尋れまいり。夫妻は二世の契りさ聞きしかゞ今生の對面だにもかなうま下さかあさましや親の不興を蒙りてかやうにならせ給へば自らを深く恨みさせ給ふも理なり。思へば又みづからは御身ゆゑに深き思ひに沈み互に思ひふかゝるべしと涙を流し申すやうさても古は雲を動かす雷も思ふ中をばよもさけと契りつる言の葉は今の如くに忘れず睦言の袖のうつり香は今もかはらず匂へどもいつのまにかは變りはてうたての瀧口やとて聲も惜ます泣きければ瀧口これを見てあまり歎くもいたはしせめては聲なりとも聞かせばやと思ひてかくなん

梓弓そるをうらみさおもふなよまこの道に入るぞうれしき

さありければ瀧口が聲さ聞くよりもあまりの嬉しさに横笛とりあへず

あづさゆみはるをなにしに恨むべき引きとむべき道にあられば

さなくく打ちながめもだへこがれて泣きぬたり

かくて横笛今はたのみもつき果てければまだ十七の花のさかりに大井川の底の

藻屑となり果てつ。瀧口柚人の物語にありし事ども聞くよりも急ぎ大井川に到りつき横笛の死骸を尋ね出し涙ながら鳥邊野の煙となしはてしもとの庵室に歸りやがて高野山に上りけり。

此の『横笛草子』の如きは御伽草子中の傑作と認むべきものなるも其の趣向はなほ『平家』『盛衰記』等に見えたる原作前に掲載したる事あれの深刻なると比すべくもあらず文章はた然り。其の他『横笛草子』に及ばざるものゝ如何は殊更に論ずる迄もなし。要するに御伽草子は其の趣向も文章もいまだ幼稚なるものなり。

御伽草子著作の目的は上流社會の慰みに供すると共に教訓をも兼ねたり。而して其の教訓の主義は全く神明佛陀の靈驗功德を説いて讀者の道義心を喚起するにありしが如し。故に各篇大方は

これたゞはせの觀音の御利生とぞ聞こえける。今に至るまで觀音を信し申せばあらたに御利生ありと申しつたへはんべりける。此の物語をきく人は常に觀音の名號を十返づゝ御となへあるべきものなり。南無大慈大悲觀世音菩薩。

の如き又は

後々とても此の草子見給うて親孝行に候はゞかくの如く富み榮えて現當二世のれが



ひ立ちどころに叶ふべし。まづ現世にては七難即滅し障りもなく衆人愛敬ありて末  
繁昌なるべし。後の世にては必ず佛果を得べき事疑ひなし。偏に親孝行にして此の  
草子を入にも御讀みきかせあるべし。

の如く教訓勸説の意を添へたり。然れども話説の材料多くは荒唐無稽の事件に  
して寓意と見る外は大抵信ずること能はざるものなり。是等の草子にして今日  
に傳はる重なるものは前に掲げたる外尙ほ『小町草子』『御曹子島わたり』『唐絲草  
子』『木幡ぎつね』『七草草子』『猿源氏草子』『物草太郎』『さいれいし』『蛤の草子』『小  
敦盛』『二十四孝』『梵天國』『のせざる草子』『猫の草子』『濱出草子』『和泉式部』『一寸  
法師』『さかき』『福富草子』『音なし草子』『化物草子』等あり。

御伽草子の外また此の時代に古物語の體に倣へる物語もありき。一條禪閣兼良  
の『鴉鷺合戦物語』及び『魚類合戦物語』『魚鳥平家』ともいひて『平家物語』に倣ひたる  
もの作者未詳『常磐姫物語』(作者未詳)など呼べる滑稽小説は時世を諷刺せん意  
にて世に出でしものならんといふ。尙ほ『鳥部山物語』『松帆浦物語』(作者共に未  
詳)等は『群書類從』の中にも掲載せられて人の知るところなり。是等何れも文章  
も趣向もとり出で、評すべき程のものならねば云はず。

## 第六期 江戸時代の文學

### 第一章 總論

年代の範圍 江戸時代に於ける文學の概況 言語文章

江戸時代の文學とは慶長八年(一六三三)徳川將軍家康幕府を江戸に創設せしより  
以來慶應三年(一八二七)前將軍徳川慶喜公其の職を辭して王政復古の時に至る二  
百六十餘年間の文學をいふ。

江戸時代に於ける文學の發達は空前の偉觀を呈し中古奈良朝は云ふまでもなく  
平安時代の盛時といへども決して其の比にあらざりき。從來文學は多く貴族の  
掌中のみ限られしが今は平民の手にも移りて各種の社會悉く之れを有し且又  
從來多くは平安若しくは其の附近の目に限られしに今は京大阪及び江戸の三府  
は論なく僻遠なる九州の果廣漠なる奥羽の隅までも普及して皆それの文學  
を有せざるはなきに至れり。漢學は將軍家康其の世道に益あるを知りて之れが  
講習の端緒を開きしより爾來歷世其の方針を變ぜざりしかば支那的思想まづ士  
人の間に榮え經世治民の術を講ずるもの修史の業に従ふもの相つぎて出てたり。